

図 2-2 池田市の標高区分

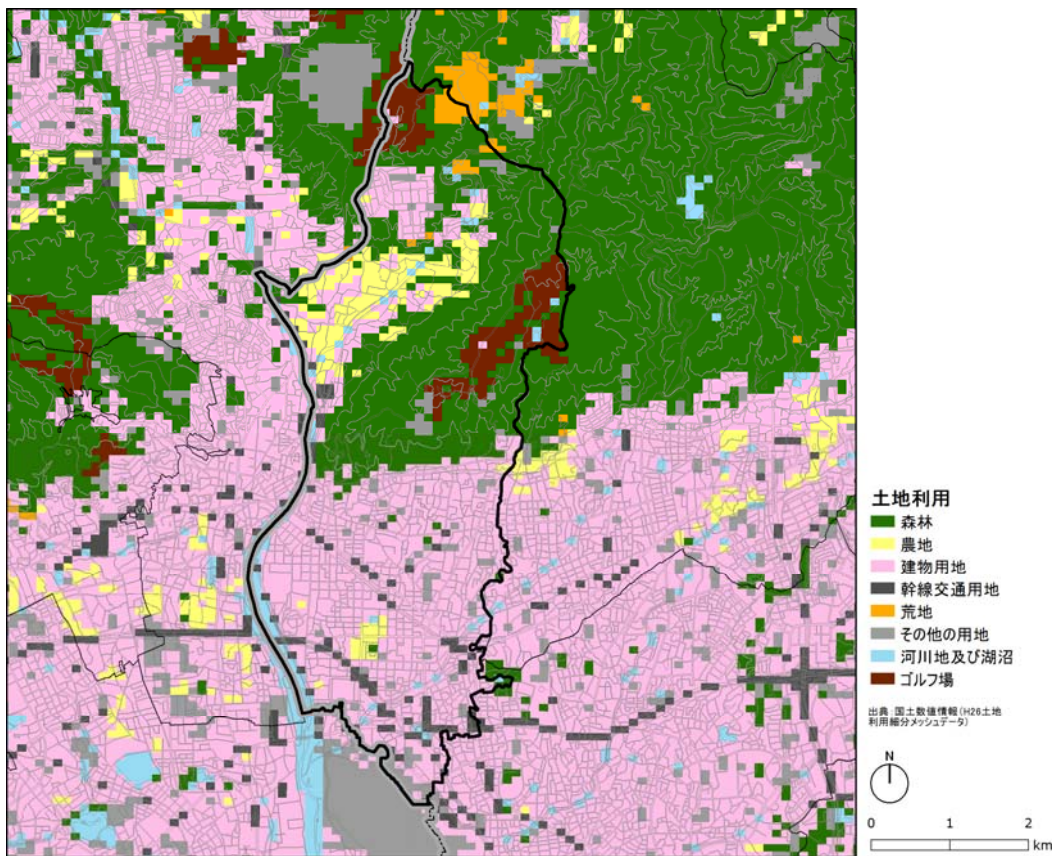


図 2-3 池田市の土地利用

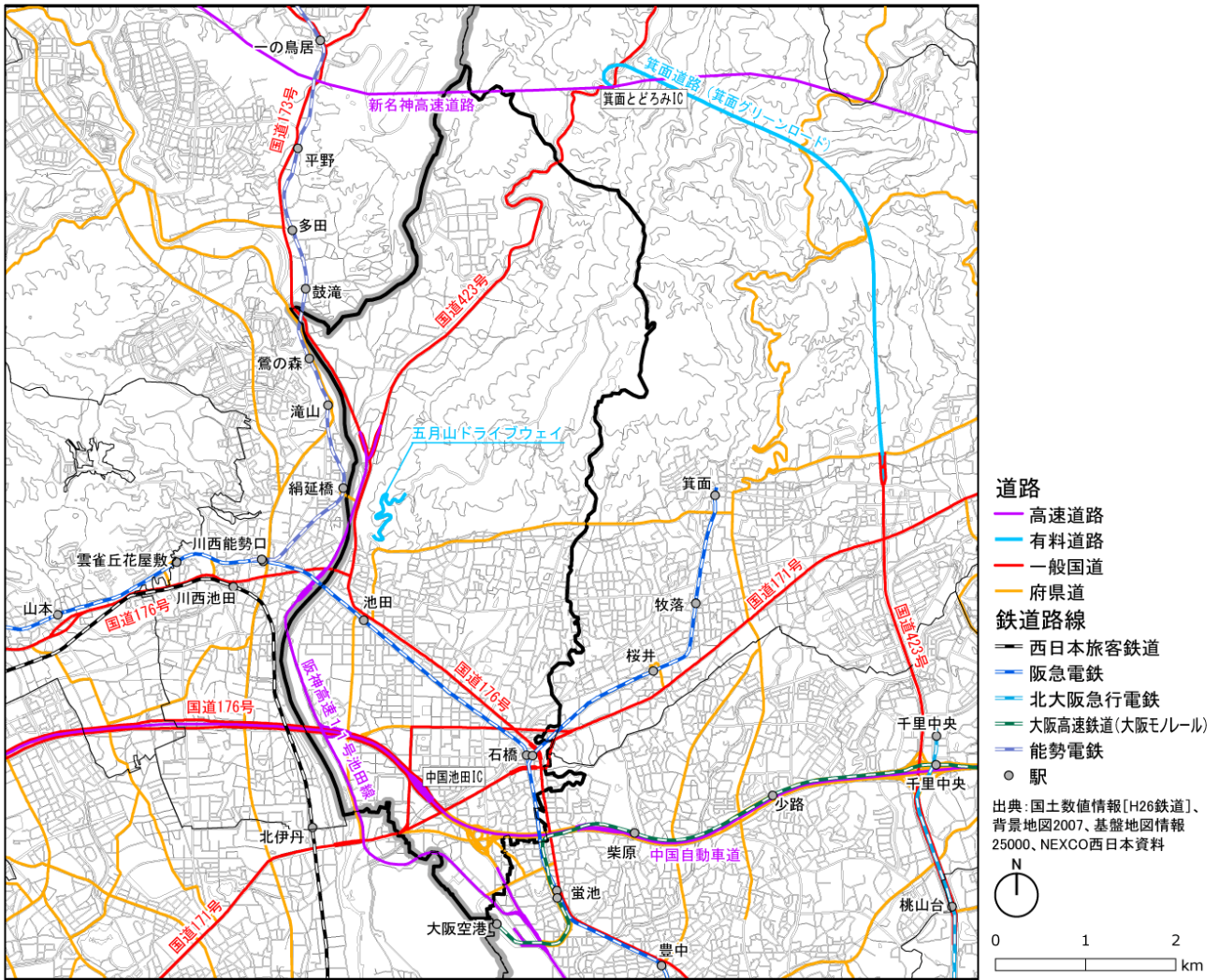


図 2-4 池田市の交通網

イ. 気候

池田市は、年平均気温が 16.4 度、降水量が約 1,394mm と瀬戸内式気候東瀬戸地区に含まれ、比較的温暖な気候を呈している。

気温の年較差もそれほど大きくなく、降水量は 6・7 月の梅雨期に比較的多いものの、冬季の積雪もほとんどみられず、過ごしやすい。

池田市周辺の風は、西寄りの風が出現頻度と強さの点で顕著であるが、北部の久安寺川流域は、地形の影響で川筋に平行する局地的な風が出現する。また、北摂山地と六甲山地とが北西風の流入を妨げる形となって、西寄りの風が卓越する。

表 2-1 池田市の平均気温と降水量

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
気温	4.8	5.9	9.0	14.1	19.4	23.6	27.3	28.9	24.7	19.0	12.9	7.4	16.4 (平均)
降水量	39.7	79.8	111.2	100.9	145.0	175.8	206.2	144.1	142.4	112.0	74.6	62.8	1394.2 (総計)

出典：大阪管区気象台・大阪空港測候所（平成 18～27 年<2006～2015>平均）

ウ. 生態系

池田市の植生区分をみると、山地部にヤブツバキクラス域の代償植生であるアベマキーコナラ群集およびモチツツジ・アカマツ群集が広くみられる。また、小規模ではあるが、ヤブツバキクラス域の自然植生であるケヤキ・ムクノキ群集、ヤブツバキクラス域の代償植生であるシイ・カシ二次林もみることができる。このように、池田市の植生は、北摂地域の典型的な二次林、里山林となっている。

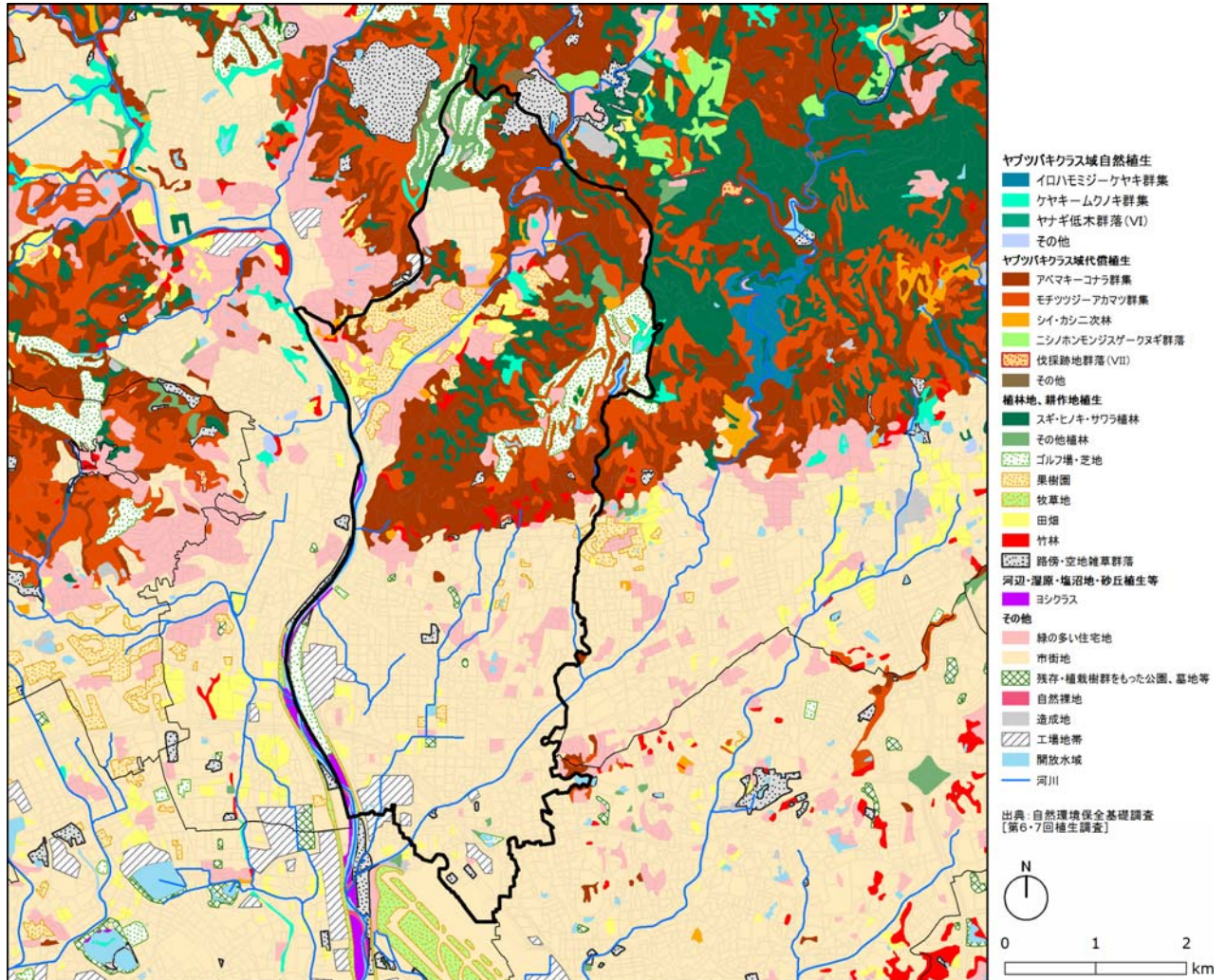


図 2-5 池田市の植生

市域には、高山はみられないものの、エノキ、ムクノキ、モミなどの巨樹がみられる。

瀬戸内式気候に属する本市では農業の振興とともに、多くの溜池が築造されたが、戦後は住宅建設や公共施設の用地として大半が埋め立てられ、溜池の原形が残っているものは、夫婦池など数少なくなっている。

池田市域で確認される野生動物としては、イノシシ・ニホンジカ・ホンドギツネ・タヌキ・ノウサギ・ニホンリス・テン・イタチ・ハクビシン・モグラ・カヤネズミ・クマネズミ・アブラコウモリ・イシガメ・クサガメ・シマヘビ・カナヘビ・ニホントカゲ・イモリ・モリアオガエル・特別天然記念物のオオサンショウウオなどがあげられる。

また、典型的な里山林を残す五月山などの樹林地ではオオムラサキ・コクワガタ・カブトムシなどが、細河地域の田園地帯ではミスジチョウやスジボソヤマキチョウなどの希少種のチョウや、近畿地方でみられる種類の7割ほどのトンボの生息が確認されている。

さらに、猪名川流域などの水辺を中心に、アオサギ・カイツブリ・カワセミ・カワウ・カルガモ・カワラヒワなどのほか、山地でもオオタカ・ヤマガラ・シジュウカラをはじめとした多数の鳥類の生息、飛来が確認されており、「池田・人と自然の会」の市内鳥類調査結果をみると、平成 21 年（2009）では総数 1,141、種数 51 を数える。

また、市内の川や池でオイカワ・コウライニゴイなどのコイ科を中心に 30 種以上の淡水魚が確認され、ヤリタナゴ・メダカ・アブラボテなど、国や大阪府が指定している希少種も少なくない。

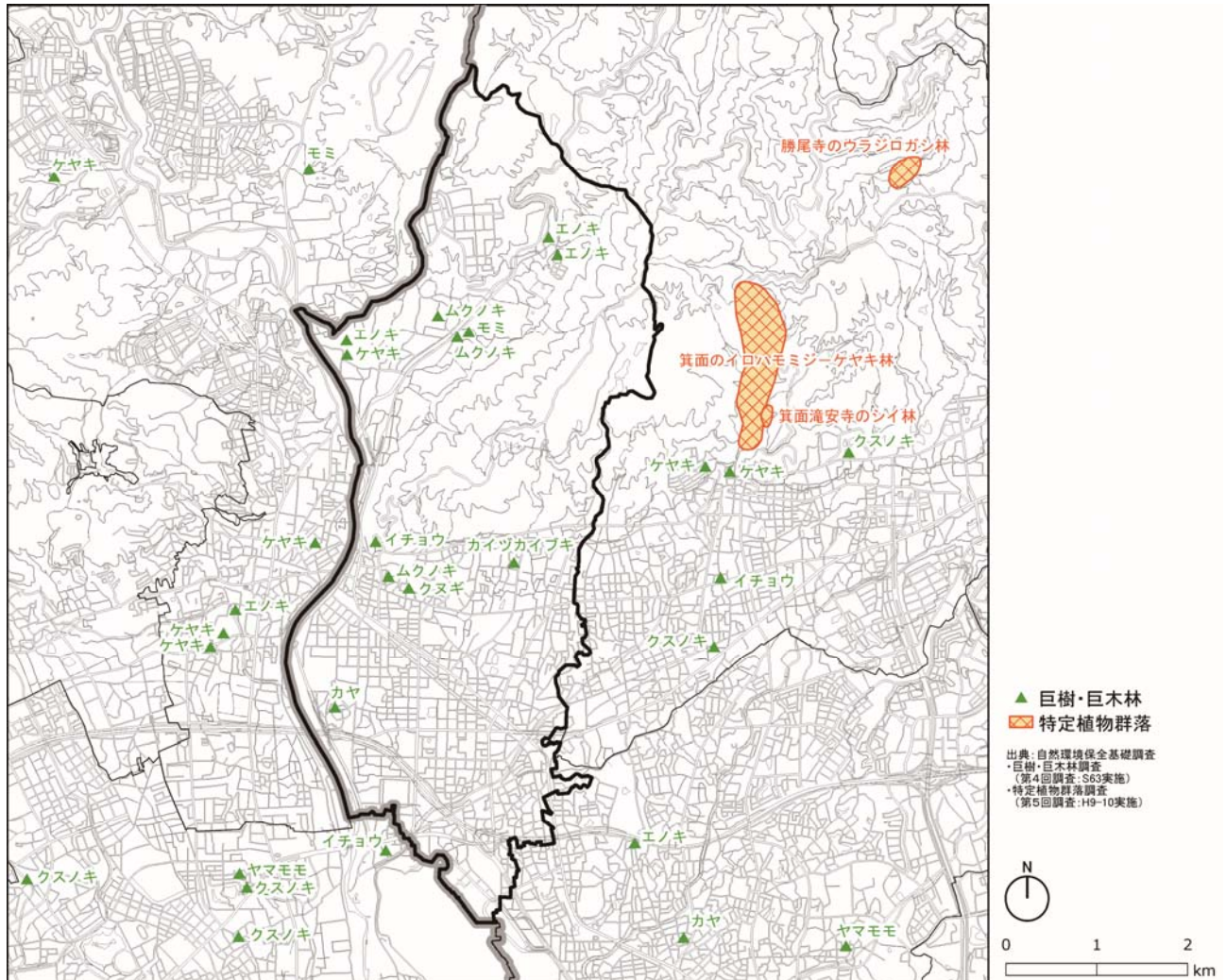


図 2-6 池田市の巨樹・巨木

市内のほぼ全域から望むことができる五月山山系には、市民が自然と親しむ場として、山頂の展望台をはじめ、多くの施設が整備されている。

(2) 社会環境

ア. 人口・世帯等

池田市の総人口は、平成 22 年 (2010) の 104,229 人(国勢調査)をピークに、10 万人強の範囲で推移している。

しかし、長期的には平成 22 年 (2010) 以降は減少期に入り、国立社会保障・人口問題研究所の推計では平成 52 年 (2040) には約 84,000 人まで減少すると見込まれている。また、合計特殊出生率は平成 25 年 (2013) で 1.25 と、全国平均 1.43 を下回り、人口規模が長期的に維持するために必要な水準 2.07 から大きくかけ離れ、少子化が進行している。

世帯数の推移をみると、平成 22 年 (2010) には 45,661 世帯、平成 27 年 (2015) 現在で 45,777 世帯とわずかに増加している。

年齢 3 区分別人口をみると、生産年齢人口 (15～64 歳) は、平成 12 年 (2000) までは、7 万人台を維持しているが、その後の平成 27 年 (2015) までの 15 年間で、10,000 人以上が減少している。

年少人口 (0～14 歳) は、平成 12 年 (2000) から 13,000 人程度を維持している。

一方、老年人口 (65 歳以上) は、平成 12 年 (2000) から上昇傾向が続き、平成 27 年 (2015) には 26,342 人となっている。

このように少子高齢化が進んでいるが、本市においては、地域別の人口推移が異なり、中心市街地の池田、計画的開発が進められた五月丘、^{さつきがおか} ^{みどりがおか} 緑丘地域は高齢化率が低く人口が増加すると推計されるが、北部の市街化調整区域を含む細河、昭和 47 年 (1972) から入居が始まった^{ふしおだい} 伏尾台、阪急石橋駅南側の石橋南地域は高齢化率が高く人口が減少している。このように地域の特性に即した地域課題の解決が必要とされている。

このため、「池田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(平成 28 年<2016>3 月)では、「観光の振興や各種団体等との連携強化などにより『ひと』を呼び込む」こと、「市の魅力 (地域資源、立地、取り組み) を市内外に発信し、移住・定住を促す」ことを総合戦略の施策の柱の一つとして掲げている。さらに、「五月山を中心とした、歴史、伝統、文化を楽しめる、本市全域をテーマパークに見立てた構想を策定する」とともに、「観光施設やイベントの PR」、「旧来からのまちなみの保全」を関連事業として掲げている。

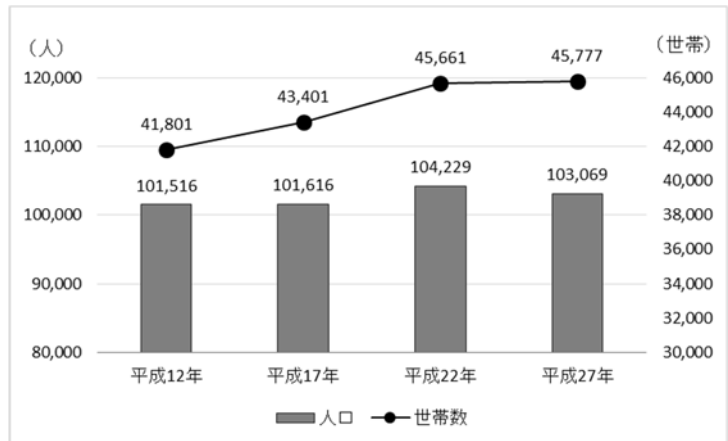


図 2-7 人口・世帯数の推移

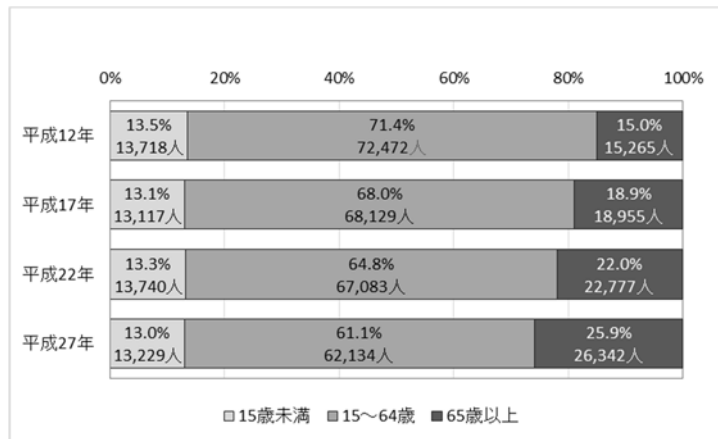


図 2-8 年齢別人口比較の推移

イ. 産業

産業別就業者数比率の推移をみると、平成7年（1995）から第三次産業従事者が順次増加し、平成22年（2010）には77.3%となっている。一方、第一次・第二次産業従事者は順次減少し、同じく平成22年（2010）にはそれぞれ1.2%・21.5%となっている。

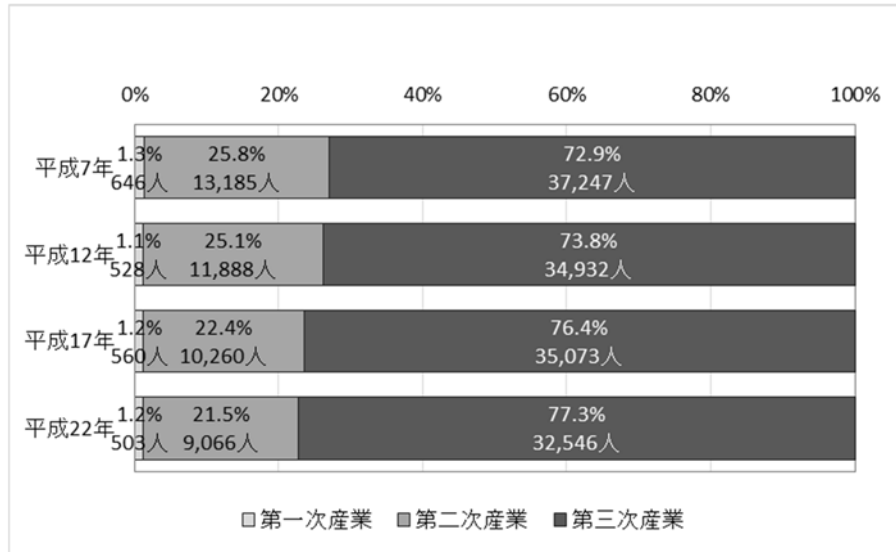


図 2-9 池田市の産業別就業者数比率の推移（平成 22 年国勢調査）

池田市の産業別就業者数の状況を国勢調査からみると、「卸売業・小売業」に就業している者(7,820人)が最も多く、次いで、「製造業」(6,749人)、「医療・福祉」(4,625人)となっている。男女別にみると、男性では、「製造業」に就業している者が最も多く、次いで「卸売業・小売業」、「建設業」となっている。女性では、「卸売業・小売業」に就業している者が最も多く、次いで「医療・福祉」、「宿泊業・飲食サービス業」となっている。池田市の産業構造の特徴としては、「卸売業・小売業」が多いことが特徴である。

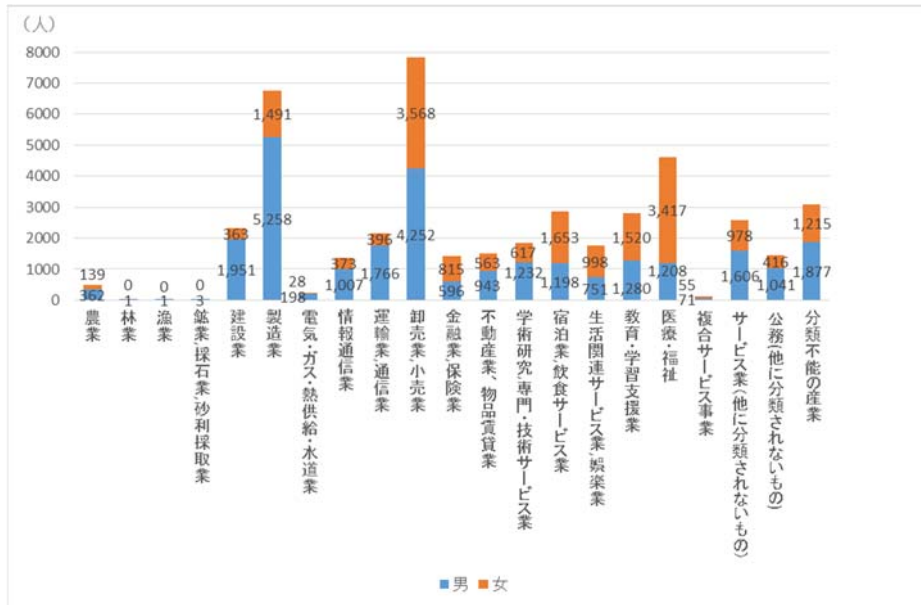


図 2-10 池田市の産業別就業者数の状況（平成 22 年国勢調査）

こうした産業構造の特徴を踏まえ、前述の「池田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、「商業の振興、創業支援、就業支援などにより『しごと』をつくる」こと、「植木産業の振興や都市農業の保全を行う」ことなどを戦略として掲げている。

ウ. 法規制等

池田市は、北部の山地及び細河地区の農地が市街化調整区域に、南部の市街地を中心に市街化区域に指定されている。

山地地域の一部は地域森林計画対象民有林になっており、山麓部を中心に保安林が指定されている。

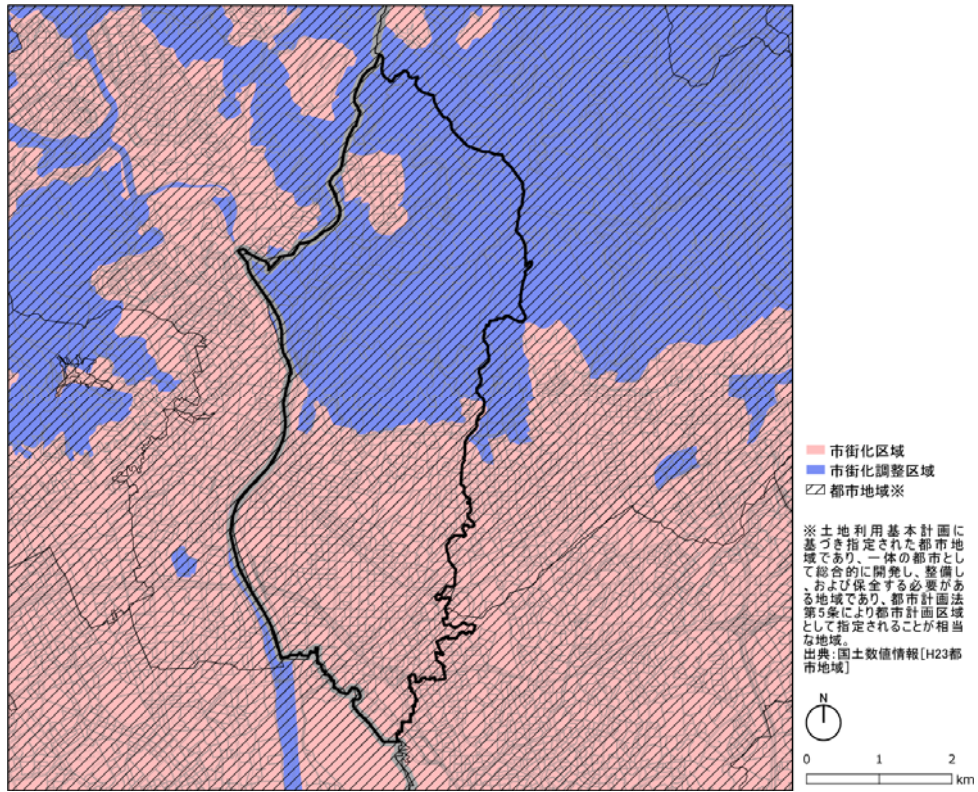


図 2-11 都市計画法に基づく区域指定

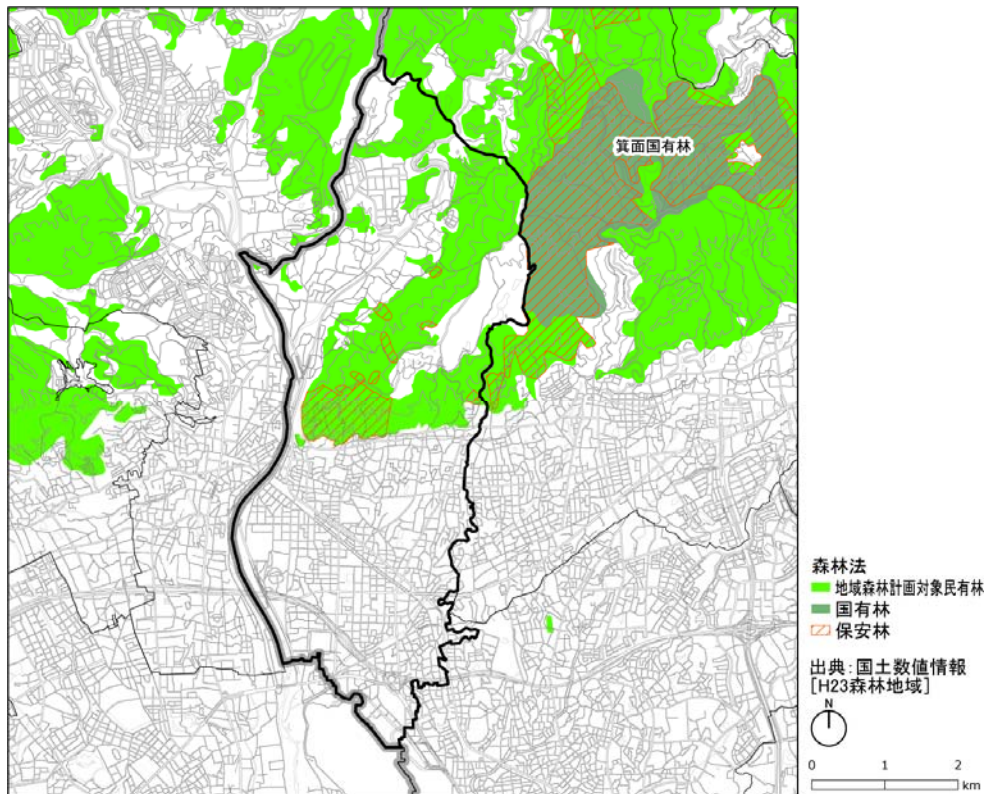


図 2-12 森林法に基づく区域指定

また、下図に示すように、五月山周辺が「池田山風致地区」、鼓ヶ滝^{つづみがたき}周辺が「鼓ヶ滝風致地区」、待兼山^{まちかねやま}周辺が「待兼山風致地区」に指定されている。

さらに、「近畿圏の保全区域の整備に関する法律」に基づき、市内北部の森林が「北摂連山近郊緑地保全区域」に指定されている。

一方、都市計画法による用途地区をみると、阪急電鉄宝塚線の池田駅、石橋駅周辺が商業地域に指定されており、駅周辺が商業・業務を中心としたにぎわいのある地区となっている。

さらに、住宅都市・池田の主な第一種低層住宅専用地域としては、北から「伏尾台」周辺、「五月丘」・「渋谷」・「畑」^{はた}周辺、「旭丘」^{あさひがおか}周辺、さらに、阪急宝塚線南側の「室町」^{むろまち}周辺、「荘園」^{そうえん}周辺などが指定されている。

また、市域西側の猪名川に沿って工業地域が指定され、ダイハツ工業の池田工場が立地しているほか、大阪国際空港周辺は、準工業地域に指定され、空港に近いまちとしての特性もみられる。

このように、池田市は、私鉄沿線に発達した住宅都市としての歩みとともに、大規模工場も立地する産業都市としての歩みを進めてきたことが用途地区指定からも読み取れる。

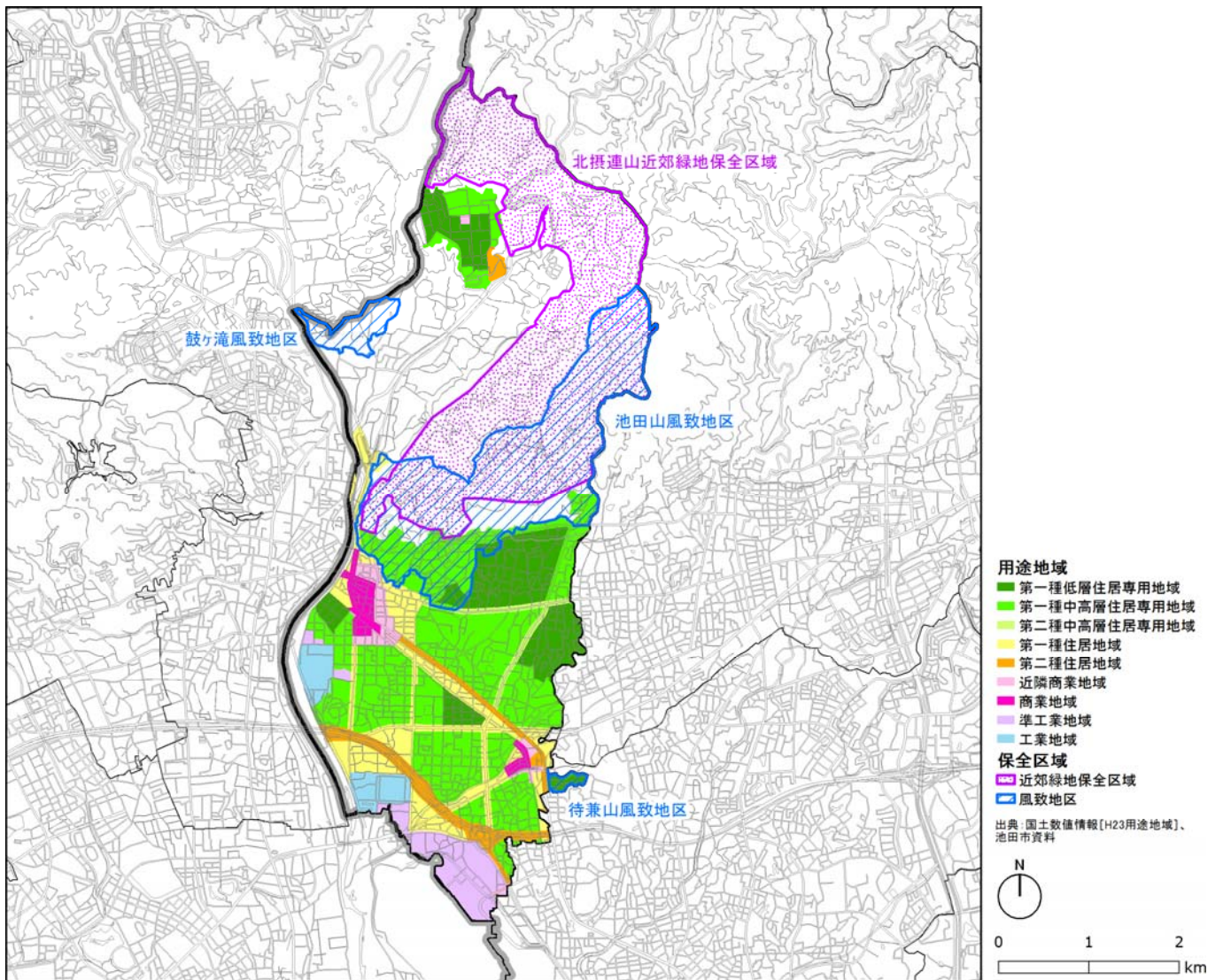


図 2-13 都市計画法に基づく用途地域等

なお、大阪府景観計画では、府域の景観を道路軸、河川軸、山並み・緑地軸、湾岸軸、歴史軸の各軸で特徴付け、それらの軸景観を中心とした、良好な景観の形成に関する方針を定めている。

池田市は北摂山系区域の山並み・緑地軸に含まれ、「市街地においては、背景となる北摂山系を意識した景観づくりを行う」、「山麓や山腹の斜面において、都市近郊樹林などの自然緑地の保全と緑豊かなまちなみ景観の創出を図る」ことを景観づくりの基本方針としている。

池田市の同景観計画に定める区域は、図 2-14 に示すとおり、五月山山麓部が該当する。

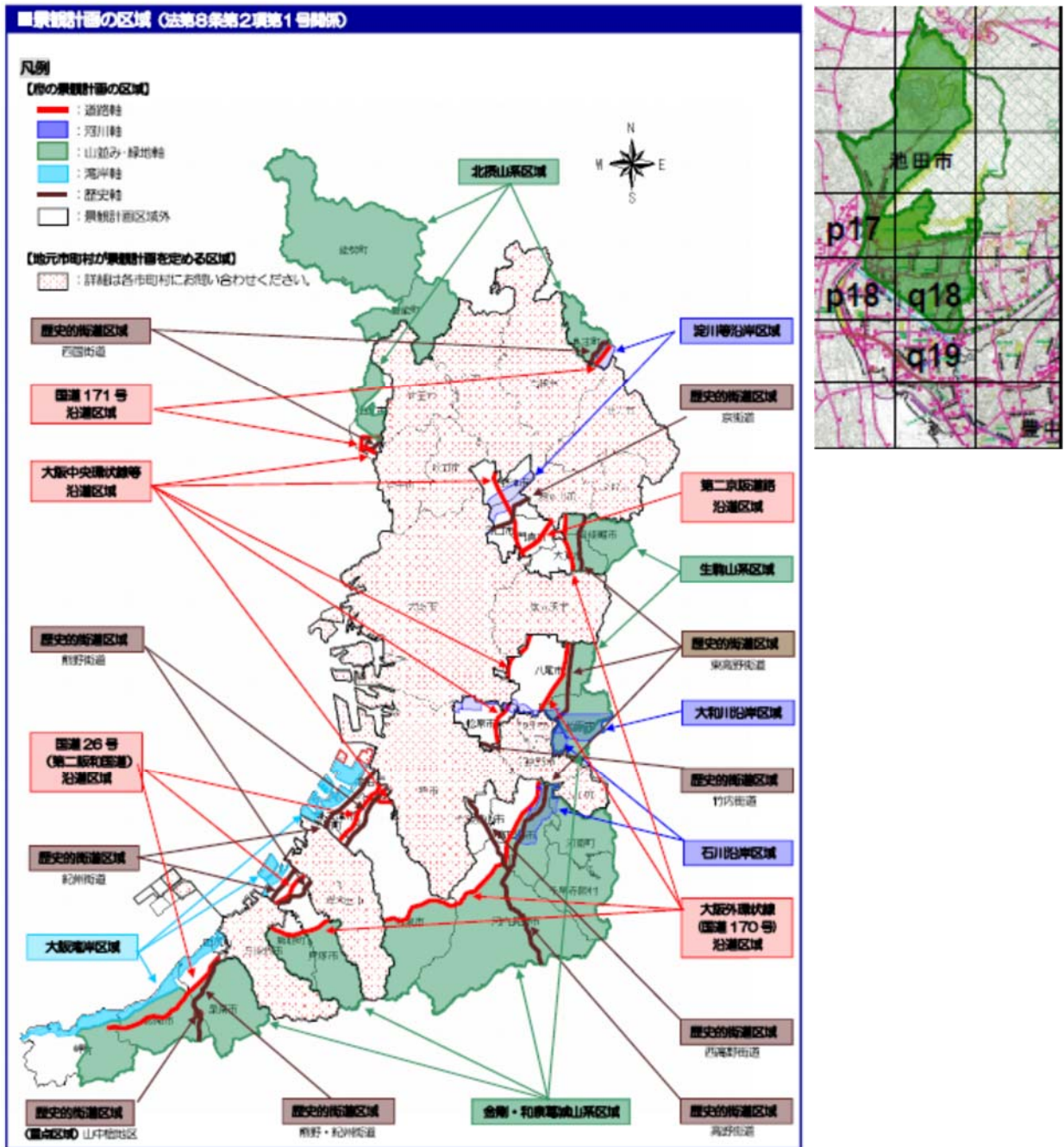


図 2-14 大阪府景観計画区域図（平成 27 年 4 月 1 日現在）

出典：大阪府

(3) 地域の歴史と歴史文化遺産

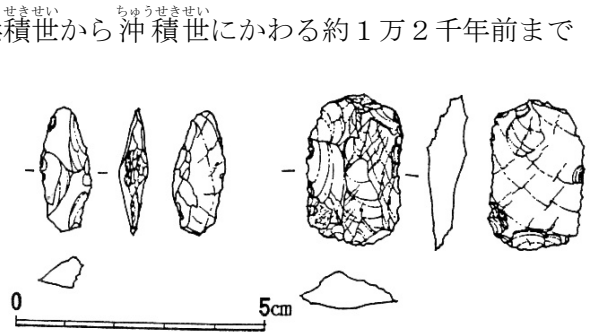
ア. 地域の歴史

○ 原始（旧石器時代・縄文時代・弥生時代）

<旧石器時代>

日本列島に人類が住み始めて、氷河期の最終末である洪積世から沖積世にかわる約1万2千年前までを旧石器時代という。

約2万5千年前からナイフ形石器の使用が広がり、池田では宮の前遺跡（石橋4丁目、住吉2丁目）、宮の前西遺跡（空港1丁目）、神田北遺跡（神田1丁目）、宇保遺跡（宇保町）で出土している。伊居太神社参道遺跡（綾羽2丁目）では時代の下る小型ナイフ形石器や尖頭器（槍先状の石器）が出土している。



（伊居太神社参道遺跡）

図 2-15 旧石器実測図

<縄文時代>

縄文時代になると徐々に気候が温暖となり、土器の使用、弓矢などさまざまな道具が使われるようになる。

池田の縄文時代に関する遺構・遺物は少なく、実態はよくわかっていない。宮の前遺跡では石棒、畑4丁目では尖頭器とよばれる槍先状の石器が、京中遺跡（畑3丁目）では石匙や石鏃、神田北遺跡でも石匙や石鏃が出土している。また、豊島南遺跡（豊島南2丁目）や天神遺跡（天神1丁目）では縄文時代後期の土器が、池田城跡下層（建石町）では縄文時代晩期のモミ痕のある土器が出土している。伊居太神社参道遺跡では石鏃や石匙のほか石器製作時にできた剥片が多く出土しており、キャンプ地ではなく居住場所になっていたと考えられる。



写真 2-1 縄文土器出土状況（池田城跡）

<弥生時代>

日本列島への水田耕作技術及びこれに伴う生活文化の到来以降を弥生時代という。その時期は、最近の年代科学の研究によると九州では紀元前10世紀後半にまで遡るとされるが、近畿地方は紀元前8～6世紀と絞りきれず、まだまだ研究途上の段階にある。

池田では、弥生時代前期末に木部遺跡（木部町）が出現し、紀元前4世紀前半から中頃といわれる中期になると宮の前遺跡、豊島南遺跡など台地に集落がみられるようになる。

宮の前遺跡は石橋4丁目から住吉2丁目の台地縁辺にあり、竪穴住居跡、方形周溝墓、土壙墓がみられる。従来、猪名川流域の拠点集落と考えられていたが、竪穴住居跡群と方形周溝墓群・土壙墓群のセットが複数あってまとまりをもっていないこと、環濠がみられないことから1つの大集落ではなく、いくつかの小集落が集まったものと推定されている。また、豊島南遺跡はそこから分岐した集落と考えられる。



写真 2-2 方形周溝墓（豊島南遺跡）

こうした古墳時代後期にみられる古墳の盛衰は猪名川流域だけの政治変動でなく、中央政権の変動に連動したものとみなされている。そして、突如として出現する鉢塚古墳の存在は、京都市太秦地方の石室と同じく天井がとくに高いという特徴をもつことから、中央政権の変動を経て6世紀末に秦氏の勢力がこの地に及んだことを示しているものと考えられている。

<飛鳥時代>

律令制により国郡里（郷）制が敷かれるまでは、池田及びその周辺一帯は「猪名県」とよばれていた。鉢塚古墳の存在やそれに続いて築かれた宇保猪名津彦神社古墳（宇保町）や後の史料から、大化の改新（645年）までは秦氏の支配下にあったものと考えられる。大化の改新直後の池田はどうであったのか詳しい史料がなく不明であるが、池田市城南半には条里地割がみられるので、律令制による大規模な区画整理が行われたようである。

<奈良時代>

池田市域は国郡里（郷）制によれば、摂津国豊嶋郡に含まれ、市域には北から秦上郷、秦下郷、豊嶋郷の3つの郷があった。史料によれば、「秦」「豊嶋（手嶋）」「倉」「時原」といった氏名をもつ氏族がいた。また、奈良時代の末頃には西大寺領の佐伯村が存在していたことが判明している。

<平安時代>

この時代の前半については史料があまりなく不明な点が多いが、「出雲」「菅原」「佐伯」という氏名をもつ一族がいたようである。11世紀になると、呉庭荘という荘園ができる。この荘園は河内国土師の里（現在の藤井寺市あたり）出身の土師氏によって開発され、12世紀前半には京の貴族である藤原氏の領地に、その後半には源氏を経て鳥羽上皇へ寄進された。この呉庭荘の中心地は宇保町から神田1丁目の台地上（北から禅城寺遺跡・宇保遺跡・神田北遺跡）と推定され、11～13世紀頃の掘立柱建物群や条里に沿った溝、土器などが出土している。

池田市域北部には12世紀中頃に撰関家近衛領の細川荘ができた。なお、奈良時代に建立されたとされる石積寺（畑5丁目）の痕跡に続き、平安時代には文献上でも禅城寺・呉庭寺の寺院の記録が残り、久安寺（伏尾町）は久安元年（1145）に再興されたと伝わっている。市内の寺院には、市域最古とされる9世紀頃制作の久安寺の薬師如来立像、9世紀末から10世紀初め頃の永興寺（木部町）の十一面観音立像など、平安仏が多数残っている。神社については豊嶋郡と川辺郡で、為那都比古神社・細川神社・伊居太神社などの

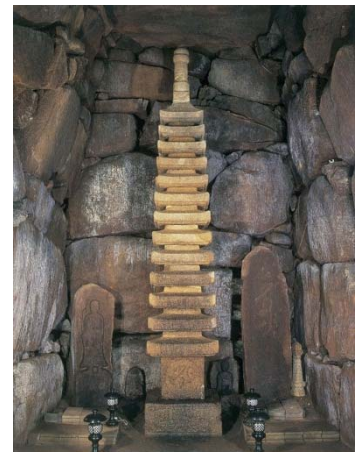


写真 2-5 鉢塚古墳横穴式石室と十三重塔



図 2-17 豊嶋郡周囲と市町

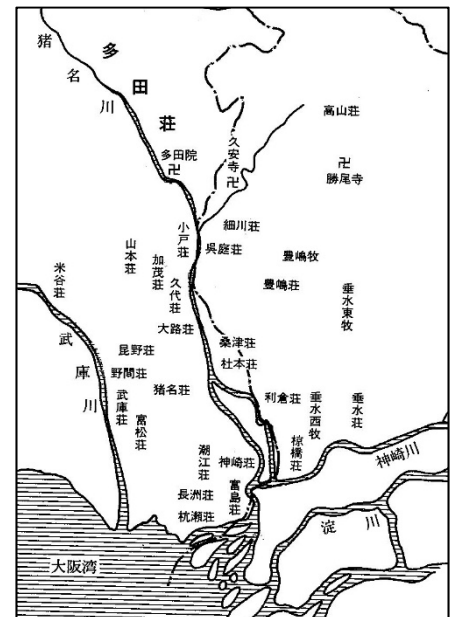


図 2-18 荘園の分布

7座が延長5年（927）の史料に記載されるなど、この時代、すでに豊かな古代の宗教文化が深まっていたことが推測される。

また、今日まで伝わるクレハトリ・アヤハトリの伝承は、土師氏が呉庭荘を開発する頃にできたものと考えられている。この伝承は、『日本書紀』の記述を題材に、呉の国から池田へやって来たクレハトリ・アヤハトリの2人の女性が機織の技術を伝えたというもので、史実ではないものの、猪名川を遡って到着した「伝承 唐船が淵」、糸を染めた「染殿井」、星明かりで機を織った「星の宮」、絹を干した「絹掛けの松」など、市内に関連の史跡が多数あり、その完成度は極めて高い。

○ 中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代）

<鎌倉時代>

治承4年（1180）から始まる源平争乱のなか、「手（豊）嶋蔵人」「手（豊）嶋冠者」ら池田市域周辺に本拠を置く武士たちも争乱に加わり、また、後白河法皇の命による平家追討や源義経の討伐に「手（豊）嶋冠者」が活躍した。

平安時代から続く呉庭荘は範囲も広がり、大きな勢力をもつようになった。この時代、武士の台頭により領主である貴族や寺社の荘園に対する支配力が弱まりはじめると、荘園内の名主（有力農民）が生産の向上とあいまって自立・独立化しはじめ、財力と武力をもつものが現れた。池田氏もそうした階層から出た一族と考えられている。池田氏はこの頃「藤原」の氏名を名乗っており、釈迦院（鉢塚3丁目）や常福寺（神田3丁目）には13世紀末に池田氏の祖先と思われる藤原景正が建立した石造物が残されている。また、地名として「池田」が使われるのもこの頃からと考えられる。

<南北朝時代・室町時代>

建武の新政後、延元元年（1336）に足利尊氏が室町幕府を開いてからおよそ60年間は南北両朝に分かれ、年号は両朝のものが使われた。天満宮（畑3丁目）燈籠や無二寺（古江町）宝篋印塔には北朝の年号が刻まれており、池田市域は北朝方の足利氏の影響下にあったことがわかる。

室町時代、各国の守護は警察権などのさまざまな権限が強化され、武士をしたがえて領地を支配しはじめた。これを守護大名という。14世紀、池田が含まれる摂津の守護大名は幕府の有力者赤松氏で、池田氏はその家臣になるまでに力をつけていた。

15世紀になると、室町幕府の管領細川氏が摂津の守護大名になり、池田氏の棟梁池田充政（池田筑後守充政＝池田城主は代々「筑後守」を自称）はその有力家臣として成長、荘園侵略や高利貸しで莫大な財力を誇った。当時、地頭や荘園の名主などから力をつけて、今の市町村ほどの範囲を支配した人びとを国人と呼んでおり、池田氏も国人の階層にあたる。摂津国には池田氏のほか、伊丹氏、吹田氏、能勢氏、茨木氏、三宅氏などの国人がいた。彼らは守護大名の家臣となり、地域支配の拠点として城を構えた。池田氏もこの頃に池田城を築いたのではないかと考えられる。

応仁元年（1467）、東軍の細川方、西軍の山名方に分かれて戦った応仁・文明の乱が起こる。池田充政は細川方についたため、山名方の大内氏に攻められ、池田城は落城した。大内氏は池田に留まら



写真 2-6 無二寺の宝篋印塔

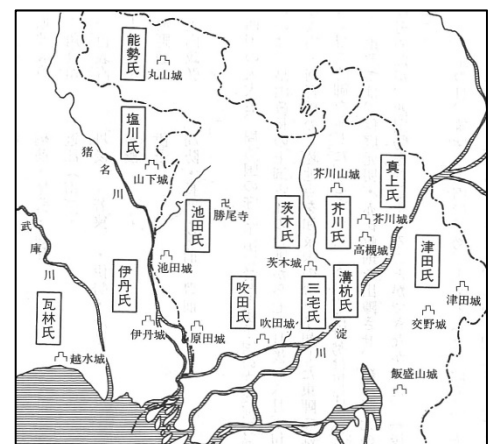


図 2-19 摂津周辺の国人と城

なかったため池田充政はすぐ池田城に入ることができたが、今度は細川方内部の争いに巻き込まれる。争いの発端は細川澄元と細川高国による細川家の家督争いであるが、やがて諸国の国人らを巻き込む戦乱へと拡大した。池田氏は澄元方についたため、永正5年(1508)、高国方に池田城を攻め入れ、池田正盛の裏切りで池田城は落城、当時の城主池田貞正(充政の子)は自害した。

その後、池田城には裏切った池田正盛が高国方の武将として入ったが、永正16年(1519)、貞正の子信正(系図では久宗であるが信正と思われる)が池田城を奪回した。戦乱は細川高国と細川晴元の争い、そして細川氏綱を擁する三好長慶と細川晴元の争いへと移り、池田氏や伊丹氏ら摂津の国人らは争いに巻き込まれて敵味方に分かれ、主導権争いに翻弄される。このことが、池田氏や伊丹氏など京近郊の国人が大名へ成長できなかった要因ではないかと考えられている。

他方、摂津の有力国人に成長した池田氏のもと、歌人招月庵正広や、宗祇、宗長、牡丹花肖柏といった当代きっての連歌師が訪れ、池田氏の歌会や連歌会にたびたび参加し、近世に開花した池田文化の礎をつくった。とくに長享元年(1487)以降に池田に庵を結んで居住した肖柏は、周辺国人の能勢氏や伊丹氏とも交流し、摂津国で隆盛した地方文化の指導的役割を担った。宗祇や肖柏らによる『新撰菟玖波集』には池田一族の作品も収録されている。

また、池田氏の拠点となった池田は、猪名川と五月山の間、狭隘地を出た奥郷の出入りに位置し、古くから交通の要衝・物資の集散地でもあった。天文15年(1546)の史料から、16世紀半ば頃までには、池田に「市庭」(市場)があったこと、すなわち池田氏の池田城の町屋がすでに市場集落として成立していたと思われる。

鎌倉時代からこの室町時代にかけて、池田市域では真言宗のほか、池田氏の庇護のもと曹洞宗も宗勢を拡大した。加えて、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗なども広がりを見せ、こうしたなか、本尊や涅槃図など、各寺院により多様な仏像・仏画が制作された。ほかにも、室町時代初期の建立とされる久安寺楼門の寺院建築や、室町時代前期と推測される五社神社鉢塚古墳石室の十三重塔(いずれも国重要文化財)・石仏といった石造文化財も残されている。

天文18年(1549)、実権は三好長慶が握り、摂津の国人は長慶の配下に、長慶没後は三好三人衆の勢力下におかれた。

永禄11年(1568)、織田信長が京へ上洛、その勢いで三好氏勢力排除のため摂津へ攻め寄せると、ほとんどの国人が織田方に降伏した。しかし、池田氏は抵抗したため織田方の激しい攻撃を受け、町屋が火の海になるほどの激しい攻防の末に降伏した。そして、池田氏は織田方の家臣となって各地を転戦させられる。こうした状況のなか、池田氏内部で三好派の荒木村重らがクーデターを起こし、城主勝正を追放、その弟の知正を城主にして池田氏は荒木村重の支配下に組み込まれた。村重は最初、織田方の茨木城主茨木重親や高槻城主和田惟政を倒すなど織田信長と敵対していたが、突如信長の家臣になり、室町幕府が滅亡した天正元年(1573)摂津守に任じられて戦国大名に登りつめた。



写真 2-7 牡丹花肖柏遺愛碑 (大広寺)

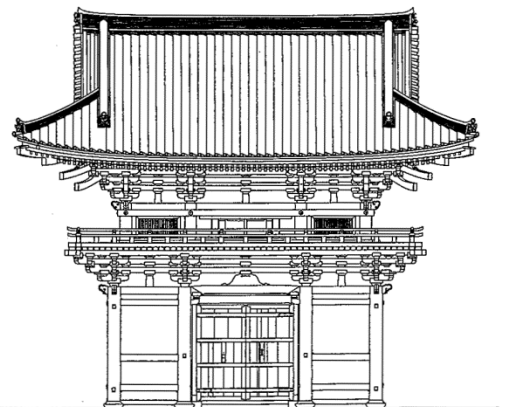


図 2-20 久安寺楼門正面図



写真 2-8 池田城主郭遺構 (H3)

○ 近世（安土桃山時代・江戸時代）

<安土桃山時代>

摂津守となった荒木村重は、翌天正2年（1574）に伊丹氏を滅ぼした後に池田城を廃して伊丹城に入城、ここを有岡城として整備し、摂津支配の拠点にした。一方、城主であった池田知正は村重に従わず神田の館へ退いた。最終的に東西330m、南北550mほどの城域を有し、一部町屋なども取り込んだ総構えの初期形態をもっていたとも推定される池田城であったが、すでに天正3年（1575）には廃城となっていることが記録に残されている。

天正6年（1578）、村重は突如織田方と敵対していた本願寺と手を組み織田信長に反旗を翻す。信長は村重を討伐するため有岡城を包囲、1年間にわたる攻防の末に天正7年（1579）、有岡城は落城、村重は城を逃れた。

有岡城落城後、池田氏は知正の甥他紋丸が、信長方に焼き討ちされた八坂神社本殿を慶長15年（1610）に再建したが、他紋丸やその子孫がどうなったのかよくわかっていない。ただし、有岡城落城の時、池田和泉守が鉄砲で自害したという記録があるので、池田氏の一部は村重にしたがって有岡城に入ったようである。池田氏の菩提寺である大広寺には、池田知正と、知正の甥でのちに養子となった三九郎の墓碑が残る。

有岡城落城後、摂津国は織田信長家臣の池田恒興の領地になったが、豊臣秀吉政権になると摂津国の大部分は豊臣家直轄地になり、池田市域は秀吉家臣の青木一重、船越景直の領地になった。



写真 2-9 池田知正（中央）と三九郎（左端）の墓（大広寺）

<江戸時代>

■ 在郷町池田村

信長が京都の本能寺で倒れた後、秀吉が天正18年（1590）に全国統一を成し遂げた。その間、戦乱で焼かれた池田の町屋も復興していったものと思われる。

徳川時代になった慶長19年（1614）、大坂冬の陣に出陣中の家康に、池田村の役人が陣中見舞いとして池田酒を献上し、その返礼として禁制を下付されたとされている。池田村ではこの禁制を「朱印状」として特権の拠り所とし、後々まで大きな影響を与えた。

市域には、現在も、当時の大坂と能勢妙見山を結ぶ能勢街道をはじめ、京都と西国を結ぶ西国街道や池田と亀山（現亀岡）をつなぐ久安寺亀山道（余野街道）、箕面の勝尾寺から宝塚の中山寺への中山道（巡礼道）、池田と尼崎を結ぶ尼崎伊丹道、西国街道から別れて有馬まで進む有馬道など、多くの旧街道が交差しているが、これらの大半は近世以前には開通していたと思われる。こうした諸街道の整備が進むと、後背地の能勢郡や川辺郡からも、大坂方面からも往復1日程度の間地点という地理的な条件から、物資の中継地として、池田村はさらに繁栄していった。

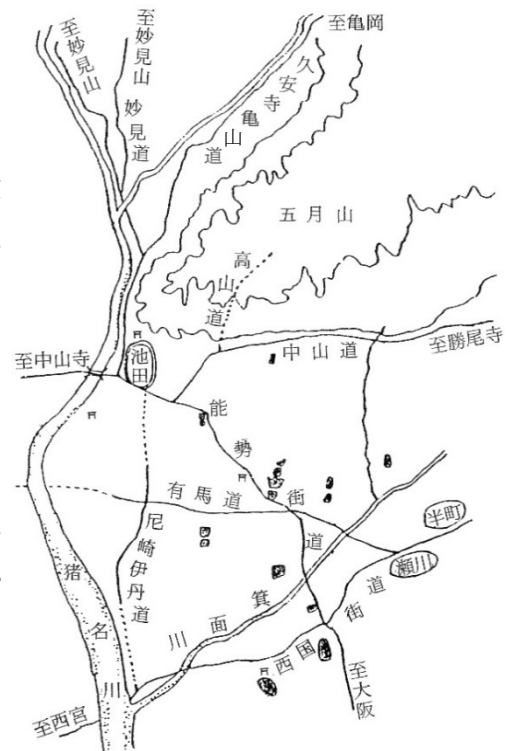


図 2-21 池田を通る諸街道

元和7年(1621)までには馬借所、すなわち公的な人馬継立て場所に指定されている。また、俚謡に「山家なれども 池田は名所 月に十二の市が立つ」とうたわれた十二斎市が、遅くとも寛永年間(1624~44)には営まれている。元禄14年(1701)刊行の『摂陽群談』には、「近里・隣郷の土民・百姓並に商家・樵夫等に至るまで市店に群がって、米穀・飲食・果蓏・衣服・器物・諸材・柴・薪・炭・鳥獣の類までこれを売買し、益繁栄の市なり」と、多くの人びとで市が殷賑を極めてい様子で紹介されている。

池田村は北摂における物流の一大拠点となり、商工業者が集住する小都市的な集落、「在郷町」として成長した。その人口は、元禄期(1688~1704)には約5,300人と推測され、周辺の村々に比べると破格の大村であり、1村でありながら、正保年間(1644~48)から正徳3年(1713)にかけて5株に分割され、それぞれに庄屋らの村役人が置かれていた。

元禄10年(1697)の池田村絵図によると、1,437戸もあり、その半数近い641戸に職名が記載され、農業以外の職に就いていた。一番多い職種は日用(日雇い)の163戸で、賃稼ぎとして、主に酒造や物資の輸送などに従事していたと思われる。次いで、118戸の糸引き、すなわち糸をつむぐ賃労働者が多い。元禄期には、池田は繰綿・木綿の加工集散地としても名を上げており、「池田木綿」として高く評価され、特産物の一つとなっていた。木綿屋・綿引き・紺屋(染め物屋)・茜屋(同)など、関連すると思われる職も多数みられる。

池田村には、こうした近郷からの日雇い稼ぎの農民や、離農して専門化し外から集住した賃労働者らが絶えず流入し、在郷町の経済的活動を支えていたのである。

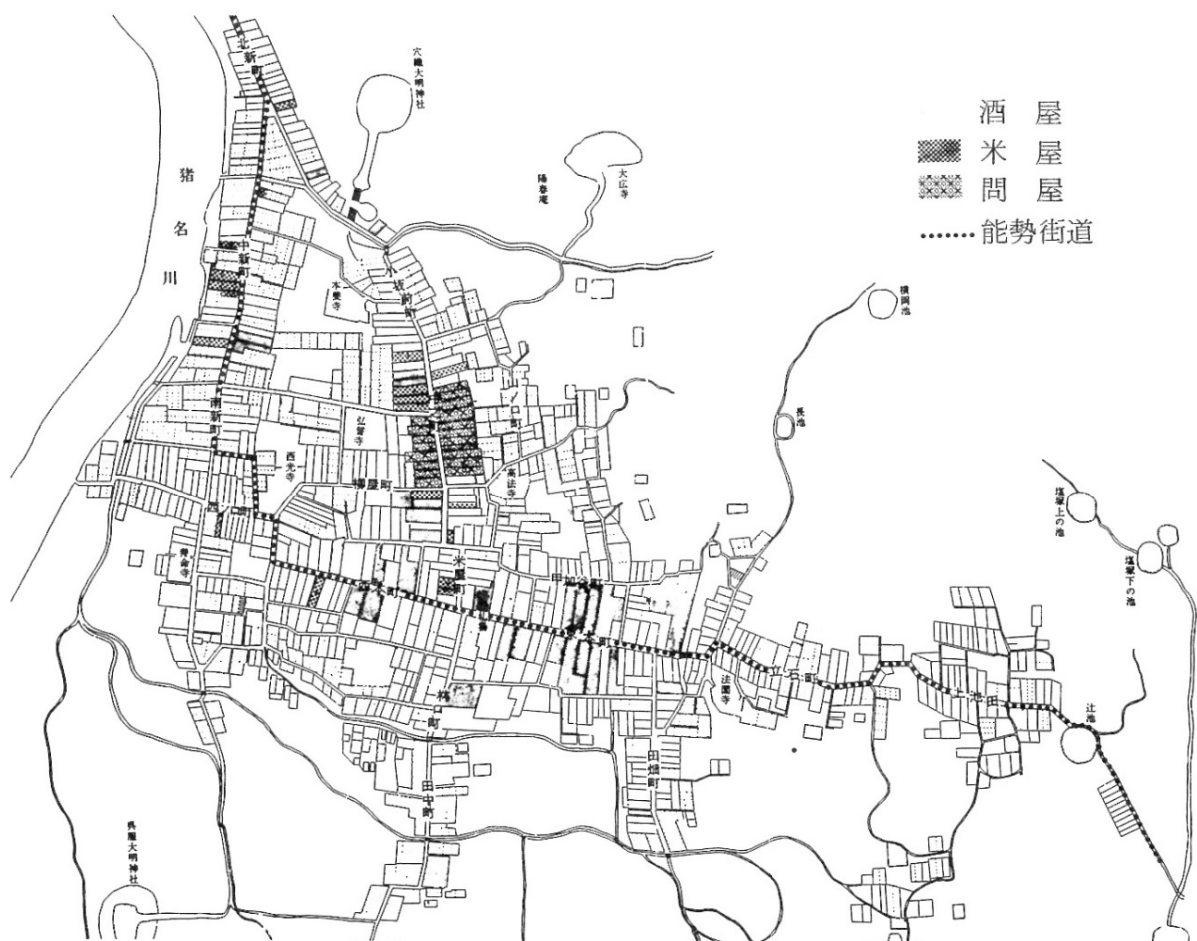


図 2-22 元禄10年 池田村絵図による屋敷割図
(池田市教育委員会『北摂池田』1979年から作成)

表 2-2 元禄 10 年 池田村絵図による職業別戸数

商人 239 戸	食品関係 108 戸	酒屋 32 米屋 21 茶屋 7 餅屋 7 塩屋 7 魚屋 6 饅頭屋 5 豆腐屋 5 茶商 4 茶売 3 菓子屋 2 飴屋 2 味噌屋 2 塩売 1 塩物商 1 魚商 1 八百屋 1 かしわ屋 1
	衣料・日用品関係 84 戸	古手屋 15 小間物屋 12 荒物屋 7 木綿屋 4 紙屋 4 煙草屋 4 油屋 4 足袋屋 3 小間物売 2 布屋 2 瀬戸物屋 2 鍋屋 2 炭屋 2 炭商 2 薬屋 2 箒屋 2 煙草切 2 木綿売 1 蚊帳屋 1 炭売 1 柴屋 1 柴売 1 香具屋 1 薬売 1 薬商 1 蓑屋 1 傘屋 1 莫座屋 ^{ござや} 1 莫座売 1 古手売 1
	その他 47 戸	問屋 20 小商 15 水茶屋 3 干鯛屋 ^{ほしかや} 3 商人 2 なが屋 1 宿屋 1 銭屋 1 古金屋 1
職人 78 戸		大工 16 紺屋 10 樽屋 8 髪結 7 鍛冶屋 5 瓦屋 4 籠屋 3 畳屋 3 割木屋 3 指物屋 3 塗師屋 2 木引き 2 茜屋 2 いかき屋 1 屋根屋 1 壁塗 1 戸屋 1 杭屋 1 堅木屋 ^{かたぎや} 1 檜物屋 1 目切 1 髭屋 ^{かもしや} 1 車屋 1
その他 324 戸	日雇稼ぎ 282 戸	日用 163 糸引き 118 綿引き 1
	特殊な職種 42 戸	医師 14 庄屋 6 町代 4 山伏 4 馬持 3 年寄 2 薬師 2 鉢平 2 絵師 1 目医師 1 陰陽師 1 神主 1 不明 1

次に多い職種として、酒屋 32 戸が続く。池田の酒造は戦国期から江戸時代初期にかけて始まったと推測されている。元禄 10 年(1697)には酒造米高 1 万 1,600 石余、江戸積 2 万 8,200 駄余にのぼり、当時上方から江戸に送られた樽の 1 割近くを占めるまでになった。江戸では池田の酒は伊丹酒とともに銘酒として一、二を争う好評を得ていた。井原西鶴もその著書『西鶴^{さいかく}織留^{おりどめ}』で、伊丹と池田の酒造りの様子を紹介している。



図 2-23 池田・伊丹の酒造の様子 (『撰津名所図会』)

このほか、村絵図には炭関係の職業も多数みられる。池田は炭の集散地としても知られ、とくに「池田炭」はその切り口が菊の花びらのように美しいので「菊炭^{きくずみ}」ともよばれ、今日でも茶の世界では最上の炭として珍重されている。奥郷の川辺郡や能勢郡で生産されていたが、池田で集散されたので池田炭とよばれた。元禄の頃にはすでに全国で盛名を馳せ、また、多数の書物に池田炭のことが紹介されている。



図 2-24 池田炭屋の店先 (『日本山海名物図会』)



写真 2-10 池田炭

在郷町池田では、こうして集積した豊かな経済力を背景に、酒造家や問屋商人などの旦那衆たちが、俳諧・和歌・漢詩文・絵画などに雅懐をよせ文化的素地を高めていった。例えば、酒造家の生まれで、『俳諧呉服絹』を出版した俳人阪上稲丸（1654～1736）や、医師を家業としながら中国の歴史書を著した漢学者清地以立（1663～1734）らの存在が挙げられる。

また、このような豊かで文雅な土地柄に惹かれ、来遊や来住した文人も多かった。將軍綱吉の御前講義を勤めた儒学者・田中桐江（1668～1742）をはじめ、画家で四条派の祖・呉春（松村月溪、1752～1811）、幕末の勤皇儒学者であった広瀬旭荘（1807～63）らがその代表的な人たちである。

儒学者として名高い田中桐江が、池田に来住したのは享保9年（1724）であった。彼は漢詩文の結社「呉江社」を設立し、多くの好学の士を集め育て、池田文化を大きく進展させた。とくにその門下となった大坂の思想家富永仲基（1715～46）、またその実弟で池田荒木家の養子になった漢詩人の蘭阜（1717～67）、そしてその子李谿（1736～1807）に至り、池田文化と呼ぶにふさわしい豊かな文化が花開いた。

李谿は大坂の漢詩文結社混沌社や懷徳堂なども交流し、池田と大坂を文化的に結ぶ役割も担っていた。

与謝蕪村門下の俳人である京都の川田田福（1721～93）は池田に出店を構え、池田の俳人山川星府（1761～1824）や井関左言（1759～1819）といった文人を蕪村に引き合わせ、文化の橋渡しの役を果たしたが、江戸時代後期を代表する画家のひとり、松村月溪を京都から池田に迎えたのも田福である。

天明元年（1781）に移り住んだ月溪は、翌年呉春と改名し、寛政元年（1789）に池田を離れるまでの間、数々の名品を残し、また、酒造家葛野宜春齋（1771～1819）や呉服神社神官馬場仲文（不詳～1830）らが師事している。

さらに呉春は池田の文人との交友を深め、句会を通して、井関左言ら在地の俳人にも多くの影響を与えた。また「一菜会」というグルメの会も始めるなど、絵画以外にも多くの文化を醸成させた。こうした様々な内外の交流による相乗は、例えば、石田梅岩による心学（一種の道徳的な庶民教学）に傾倒し、文化9年（1812）に「立教舎」という心学講舎を設けて庶民の教化に努めた薬屋の黒松光仲（1749～1821）、当時池田の最大の酒造家大和屋の当主で多数の考証学の書を著した国学者山川正宣（1790～1863）らのほか、俳諧では津田道意（1605～96）・井上遅春（1780？～1821）・釈瓜坊（1789～1829）・松下一扇（1794～1830）・阪上呉老（不詳～1834）・稲東三化（不詳～1857）、和歌では平間長雅（1635～1710）・稲東太忠（1710～1805）、また、史学では釈日初（1701～70）、絵画では桃田伊信（不詳～1765）、漢学者では林田林叟（1822～1901）、書家では荒木梅閨（1748～1817）など、多くの在地・来遊の文人とその活動を生み育み、池田文化をより厚いものとした。

このほか、現在も毎夏に行われる「がんがら火」と呼ばれる愛宕火の祭礼の起源は、正保元年（1644）に遡るとされる。信仰・文化・伝統をつくり守り伝えていくという、在郷町池田の庶民による活動力の高さを示すものと言えよう。さらには、古来、豊島郡北部は別荘の設置にふさわしい地とみなされていたとも推測される事例があるが、江戸時代には在郷町池田の富農が別荘での風流を楽しみ、自然と風景を享受している史実がうかがわれ、後の田園都市池田の生活スタイルへと繋がる下地もつくられるなど、その文化やスタイルと、それらの活動の担い手は、さまざまな拡がりとも高まりをみせた。



写真 2-11 松村月溪（呉春）像
葛野宜春齋筆



写真 2-12 立教舎扁額

■市域の村々

池田市域には、この在郷町池田村のほかに二十数か村の農村集落があった。その多くは池田村と同様、中世にその淵源が求められ、細河郷6か村のようなそれぞれの地域的なつながりは、現在の池田のまちにも大なり小なりみることができる。各村の規模は、20～50戸ほどが多く、10戸を割る小さな村落もあり、100戸を超えるのは畑村・神田村の2村のみで、全体に小規模な村が多かった。

市域村々の所領は、池田村も含め、幕府領・旗本領・大名領・公家領が入り交じり、さらに時期によっても異なるなど、非常に複雑であった。例えば池田村は、基本的に幕府領であったが、一時、板倉重宗、柳沢吉保、高崎藩松平輝貞の所領だった時期もあり、さらには、幕府領と近衛家領もしくは九条家領などに分かれていた時期もあった。一方、隣接する神田村は、幕府領、仙洞領と続いたのち、一部は忍藩阿部領、幕府領、一橋領と変わり、残りの一部は旗本船越領として続くなど、池田村と全く異なっていた。こうした入り組んだ支配は、畿内における所領配置の特徴であり、幕府にとって重要な拠点である大坂近辺において、大藩などによる一極集中を防ぐためであった。

江戸時代初期より、市域の半分以上を占めたのが麻田藩の青木氏である。同藩は、麻田村（現豊中市蛭池）に陣屋を置き、寛文2年（1662）以降、摂津国豊島郡と川辺郡、備中国に所領を有した1万石余の外様大名で、石橋村・畑村など、市域では主に南部～中部の村々をおさめていた。二代藩主重兼は、中国の禅宗の僧隠元に帰依、畑村に建立した松隣寺を仏日寺と改称して万治2年（1659）に開山した。さらに、重兼は三田の方広寺や東京の瑞聖寺を建立するなど日本での黄檗宗創設に大きな役割を果たした。仏日寺の墓所には、麻田藩主累代の墓が整然と並んでいる。



写真 2-13 麻田藩主青木家累代の墓（仏日寺）

基本的に幕府領であった市域北部の細郷（現細河）と呼ばれる地域は、山間にあつて猪名川と余野川の両岸に木部・東山などの6か村の村々が集まっており、中世より地域的にもまとまっていた。ここは植木の産地として今も有名である。その起源は明らかでないが、戦国時代半ばの天文年間（1532～55）とも、17世紀中頃の正保年間（1644～48）から始まったともいわれている。とくに牡丹の接木法を生み出してから飛躍的に発展、大坂市中などにも出荷し、『摂津誌』に「細川谷出、名品多類」と記されているように、享保期（1716～36）には名品と多種多品を生産して評判を得ている。江戸時代後期には、全国各地に大量に出荷され、例えば木部村の下村家は、文化2年（1805）には九州大村藩領に楮苗23万本を送っている。



写真 2-14 細河の植木産地

これら、幕府領や麻田藩領以外に、市域に一定期間あった所領として、武蔵国忍藩阿部氏（神田村一部）、旗本船越氏（西市場村など）、旗本渡邊氏（尊鉢村）らの所領などがあつた。しかし近世後期には、こうした幕府領・私領を超えた広域・横断的な動きも多くみられた。例えば、文政6年（1823）の幕府による菜種・綿実販売に対する統制に反対し、最終的に摂河1,300か村以上が幕府領・私領を問わず広域で連合して反対訴願を展開した。このときの惣代46人の中には、才田村や渋谷村の庄屋が名前を連ねている。幕末の安政元年（1854）から翌年にかけてと、慶応元年（1865）にも摂河1,000か村を超す広域の運動が行われているが、このときも野村庄屋や、畑村出身者が領分惣代に選ばれている。

また、寛政元年（1789）以降、東市場村の富農岸上家から長兄忠太夫と次兄治左衛門がたびたび麻田藩に登用され、財政面や政治面で活躍。末弟の小右衛門（＝石田敬起、1784～1860）は、岸和田・尼崎

・富山・新見など 10 以上の領主や西本願寺などの財政改革に請われて手腕を発揮し、弘化 2 年（1845）、出生地の麻田藩でも息子門蔵と協力して一定の成果を上げている。

このように、在郷町池田村のみならず、市域の農村集落でも、広域かつ身分を超えたさまざまな新しい活動が生まれていたことは特筆すべきであろう。



写真 2-15 石田敬起像

■幕藩体制の動揺から幕末へ

江戸時代の後半、商品流通の構造も大きく変貌していくなか、在郷町池田村は、朱印状に代表されるような既得権益への固執によって、旧態依然とした問屋の存続や、猪名川を利用した通船の未開通などといった事態を招き、経済活動の競争力が次第に削がれていった。全国に名を馳せた池田酒も、海上輸送に有利な立地で技術改良も果たした灘などの新興酒造地の台頭に押され、近世後期から幕末にかけて、次第に停滞に向かう。安永 5 年（1776）に特権の拠り所としてきた朱印状が没収されたのはその象徴的な出来事であった。

また、18 世紀半ば以降、全国各地で百姓一揆や打ちこわしなどが増加し、社会不安も徐々に高まり、幕藩体制が少しずつ揺らぎ始めた。天保 2 年（1831）には、池田村をはじめ、市域の村々でもお蔭踊りが流行し、領主の禁令を無視して、数か月にわたって踊りを繰り返した。天満宮（畑 3 丁目）には現在もこのときに寄進された狛犬一対が残っている。天保 4 年（1833）から凶作が続く、全国的な飢饉となったが、この天保飢饉では市域村々でも困窮者が続出し、救済措置がとられる事態になっている。



写真 2-16 「御蔭踊納之」と刻まれた天満宮狛犬

この飢饉を受けて、天保 8 年（1837）には大坂で大塩の乱が起きた。乱そのものは 1 日で終わったが、その影響は大きく、誘発された山田屋大助が、能勢を舞台に「徳政大塩味方」などと書いたのぼりを立てて一揆を起こした（能勢騒動）。このとき、大坂町奉行所の与力らが池田村に出張り、池田村からも数十人以上の足が徴発された。鎮圧後、連行された騒動参加者が村中を通る際にはおびただしい見物人がいたという。

幕末になると、開国・内乱の激動に、市域の村々はさらに巻き込まれていく。安政元年（1854）のブチャーチン率いるロシア船来航の際には、麻田藩も幕府の命によって大坂天保山の警固に就き、市域の藩領村々からも多数が動員されている。その後も、泉州の海岸警備などに割り当てられて領民が人足として動員された。慶応元年（1865）の第二次長州征伐では、幕府領から兵糧運送などのための人夫が徴発されている。慶応 2 年（1866）には、池田村で打ちこわしが発生した。戊辰戦争が始まった慶応 4 年（1868）、麻田藩は泉州の海岸警備を解いて京都警護に就いた。このときの命は明治新政府によるものであった。

○近代（明治・大正・昭和終戦）

慶応 4 年（1868）、江戸の徳川幕府が倒れ、明治新政府が誕生すると、次々と大きな改革が進められた。当時の池田市域には二十数か村があったが、その支配関係と行政区画はめまぐるしく変遷し、一部の村々は一時兵庫県に編入されていた時期もあった。明治 4 年（1871）7 月には廃藩置県により麻田藩が解体された。11 月になって、市域の村々はすべて大阪府の管轄下に入り、江戸時代から続く入り組んだ支配が解消された。その後、大区小区制や郡区町村制などの行政区分けが導入されるが、明治 22 年（1889）の市制・町村制によって、市域は、池田町・細河村・秦野村・北豊島村の 1 町 3 村に集約され

た。当時の人口は、池田町が 5,993 人、細河村 1,905 人、秦野村 1,395 人、北豊島村 2,018 人、全体で約 1 万 1300 人であった。

表 2-3 明治 22 年の市制・町村制による市域行政区画

池田村	池田町
中川原村・吉田村・古江村・木部村・東山村・伏尾村	細河村
畑村・下渋谷村・上渋谷村・才田村・尊鉢村	秦野村
西市場村・東市場村・野村・玉坂村・井口堂村・宮之前村・石橋村・神田村・北轟木村・中之島村・北今在家村	北豊島村

この時代には、さまざまな制度が実施され、また新しい公共機関などの施設も設けられていった。明治 4 年 (1871) に郵便制度が始まった。東京以西でこの年に開設された郵便局は 180 局のみであったが、そのうちの 하나가池田村に置かれた。

また、明治 7 年 (1874)、警察出張所 (現池田警察署) も置かれている。明治 12 年 (1879) に豊島郡役所が池田村に開庁、のち豊島郡と能勢

郡の連合郡役所となり、さらに明治 29 年 (1896) には豊島郡と能勢郡の合併によって、豊能郡役所となった。

明治 21 年 (1888) には、中之島治安裁判所池田出張所 (現大阪池田簡易裁判所の前身) も設けられている。これらの施設の多くは、能勢街道に沿った旧来の池田村中心部付近に設けられ、新しい都市的な核が形成されていった。



写真 2-18 大正末頃の能勢街道 (建石町から本町を望む)



写真 2-17 旧池田警察署 (S38 まで能勢街道沿いにあった T4 建築の洋館)

近代教育制度の確立は明治 5 年 (1872) の学制公布から始まった。明治 6 年 (1873) 4 月には豊島郡第一区第一番小学校 (現市立池田小学校) が池田村に創設された。翌年の開校式には大阪府知事も臨席、記念して自筆した「登龍門」の碑が今も同校の校庭に建っている。

市域では明治 7～8 年 (1874～75) に、豊島郡第二区第三番小学校 (現市立北豊島小学校)・豊島郡第一区第四番小学校 (旧市立細河小学校)・豊島郡第一区第八番小学校 (現市立秦野小学校) も順次創設された。

明治 36 年 (1903) には大阪府立池田中学校が池田町に開校した。その敷地の半分以上は地元の寄付によるものであった。わずか 3 年で廃校となったが、明治 41 年 (1908)、熱心な誘致運動が実って、この場所に大阪府池田師範学校 (現大阪教育大学) が開校した。その後、昭和 8 年 (1933) に移転問題が表面化すると、翌年にかけて全町をあげて反対運動を展開、池田町による新たな敷地買収などの多大な協力もあって、移転阻止を実現させている。また池田町は、明治 42 年 (1909) 来、池田師範学校附属小学校 (現大阪教育大学附属池田小学校) の代用クラス、のちには代用校を提供していたが、大正 8 年 (1919) にはその敷地建物



写真 2-19 登龍門の碑 (市立池田小学校)



写真 2-20 旧池田師範附属小学校の玄関 (池田文庫)

を大阪府へ譲り、ここに池田師範学校の専属附属小学校が独立開校した。

大正期には、さらに実業学校や女子中等教育機関などが次々と設立された。豊能郡立農林学校(現大阪府立園芸高等学校)が大正4年(1915)に開校した。大正6年(1917)に池田女子手芸学校(現大阪府立渋谷高等学校)、大正10年(1921)には私立宣真高等女学校(現宣真高等学校)と北豊島村立女子実業補修学校が開校するなど、地域の熱意と要望にも支えられて、教育施設はさらに充実した。屋外保育を掲げた家なき幼稚園(現室町幼稚園)が室町に開園したのも大正11年(1922)のことである。

昭和に入っても、元満州国初代総務長官駒井徳三による、大陸での指導的人材の育成を目的とした興亜時習社(昭和14年<1939>)、阪神急行電鉄株式会社(現阪急電鉄株式会社)による池田商業専修学校(昭和15年<1940>)、大阪市から移転改称した大阪府立池田中学校(昭和16年<1941>)、現大阪府立池田高等学校)など、新たな教育機関の開設が続いている。

経済活動も暫時変化があらわれた。池田の経済を支えた、炭や青物などをはじめとする物資の集散・物流は、市場機能をもった近隣町村の成長で、次第にその地位を低下させた。池田を代表する産業であった酒造業も、江戸時代後期から維新期にかけてさらに力を落とした。その一方で、繊維業や貨物業、印刷業などといった、新たな産業や企業が生まれている。

さらに商工業の展開が進むにつれ、銀行も開設された。明治27年(1894)の西宮銀行池田支店の開設に続いて、翌28年(1895)には酒造資本から金融資本への動きなどを背景に、地元資本による摂池銀行が池田町に創設。その後も加島銀行池田支店と加島貯蓄銀行出張店などが次々に開設され、明治45年(1912)、地元有志による二つ目の銀行、池田実業銀行が創設されている。大正期に池田町に建てられた加島銀行池田支店の建物(現河村商店)と、池田実業銀行の建物(現いけだピアまるセンター)は、現在国の登録有形文化財となっている。

明治の末、その後の池田を大きく変える出来事があった。鉄道の開通である。もともと、明治25年(1892)に摂津鉄道が、猪名川対岸の小戸(現兵庫県川西市)の池田停車場(池田駅)まで開通。明治30年(1897)にはこの摂津鉄道を買収した阪鶴鉄道が、池田駅を川西村寺畑(現兵庫県川西市)に移転、宝塚へ延伸して開業した。しかしながら、いずれも池田市域は通っておらず、物流に影響があったとはいえ、まちの有り様まで大きく変えるには至っていなかった。ちなみに同駅は、川西市域にありながら「池田駅」の名称がその後も使われ、現在の「川西池田駅」(JR福知山線)と改称されたのは戦後のことである。

明治43年(1910)、箕面有馬電気軌道株式会社(現阪急電鉄株式会社)の梅田―宝塚間と石橋―箕面間が営業を開始し、池田市域に、池田・石橋の2駅が置かれた。同社は池田駅西南一帯に住宅地を造成し、主にサラリーマンを対象とした10か年の月賦という当時としては画期的な販売方法を導入した。現在の室町住宅である。これらは小林一三(1873~1957)の企画構想によるものであり、わが国最初の電鉄会社による本格的な郊外分譲住宅地であった。同時に、住民の交流を目的とした倶楽部を設置、生活用品の購買組合を設けるなど、地域コミュニティの創設も図った。



写真 2-21 興亜時習社など城跡に設置された教育機関記念碑(池田城跡公園)



写真 2-22 旧池田実業銀行(現いけだピアまるセンター)

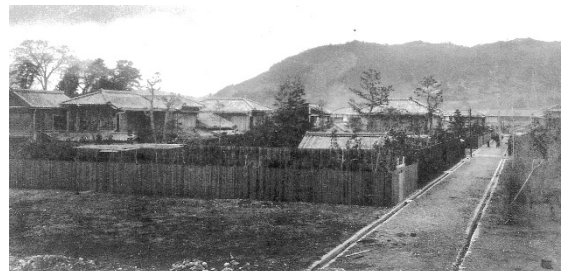


写真 2-23 室町住宅(明治末年頃)

この室町住宅開発に誘発されて、市域では新たな資本による住宅開発が続く。満寿美住宅地が大正7年(1918)に、石橋荘園住宅が大正13年(1924)に販売が開始されている。昭和7年(1932)には阪神急行電鉄株式会社(阪急電鉄株式会社)による石橋温室村が現在の鉢塚に開発された。これは大阪都市部での花の需要増大を見込んで集団経営による温室生産を目論んだ住宅地であった。昭和12年(1937)には、呉羽の里住宅が現在の旭丘につくられている。相次ぐ住宅地の出現、新しい様式の住まいと生活スタイル、サラリーマン層などの外からの居住者、新たな産業の創出など、まちの有り様が少しずつ変わり始めることになった。



写真 2-24 国道 176 号(S36 頃)

この流れを決定づけたのが、昭和10年(1935)の府道大阪一池田線(通称産業道路、現国道176号)の市域開通であった。交通や池田駅への利便性、広大な用地の確保のしやすさなどから、公共施設をはじめとする市街地の中心の、南への移動がさらに促進された。また、物流の変化によって、物資集散の中継地としての性格を失うことになり、池田は大阪の衛星都市、住宅都市へと大きく変容していった。

この年、池田町、細河・秦野・北豊島3か村が合併し、池田町となった。新たな池田町の役場は、それまでの場所から南下して現市庁舎の場所に置かれた。そのすぐ横手には、池田出身の実業家田村駒治郎(1866~1931)の寄付によって同年に建てられた池田公会堂が威容を誇っていた。田村は、ビリケンこまじろうの商標で有名な神田屋田村駒商店(現田村駒株式会社)の創業者である。市立歴史民俗資料館には、当時の公会堂に設置されていた彼の胸像を写したものが収められている。



写真 2-25 田村駒治郎胸像

4年後の昭和14年(1939)、府内6番目の市として市制が施行され、人口35,000余人を擁する池田市が誕生した。この年、市域一部を含む伊丹飛行場(現大阪国際空港)が開港。また、発動機製造株式会社(現ダイハツ工業株式会社)の池田工場が操業を開始した。昭和16年(1941)に大阪工業試験所池田分所(現国立研究開発法人産業技術総合研究所関西センター)と、東京第一陸軍造兵廠第二製造所池田工場が、昭和17年(1942)に大阪府地方事務所が、昭和19年(1944)には豊能税務署が開設されるなど、池田市は官公庁などが集中する北摂の中心地であった。

近世に花開いた池田文化は、かたちをかえながらも引き継がれた。今、近世に池田で活躍した文人を体系的に知ることが出来るのは、重建かいとく徳堂どうを支えた漢学者の吉田銳雄(1879~1948)と、蔵幅家としても知られた旧家出身の稲東いなつかたけし猛まう(1889~1927)の研究によるところが大きい。また、政治家・実業家であった原田長治(1883~1946)は、来住した池田で創業した印刷業を通して、吉田・稲東らの研究などを出版、池田文化の振興を図った。



写真 2-26 稲東家住宅

実業家であり、文化的な造詣も深かった小林一三が池田に住んだのは、箕面有馬電気軌道株式会社開業前年の明治42年(1909)である。彼が開いた郊外住宅地室町には、大阪毎日新聞記者で池田家なき幼稚園の創始者橋詰良一(1871~1934)、画家の須磨対水たいすい(1868~1955)、木谷千種ちぐさ(1895~1947)や古家新ふるや(1897~1977)、写真家小川月舟げつしゅう(1891~1967)、建築家葛野壯一郎そういちろう(1880~1944)、「鳩ぼっぼ」などの唱歌で知られる作詞家東くめ(1877~1969)、小説家岩野泡鳴ほうめい(1873~1920)、数学者小倉金之助(1885

～1962) など、多くの知識人らに移り住んだ。こうした新しい外来の人びとと在来の旧家の文化が融合し、池田文化は新たな広がりをみせた。



写真 2-27 『婦女の友』

近代池田は、新聞や雑誌の発刊などの出版も盛んだった。池田における最初の新聞『明治新聞』が創刊されたのは明治 34 年 (1901) と推測される。その後、『浪北新聞』(明治 38 年<1905>創刊)、社会主義的な主張の色濃い『縦横新報』(明治 40 年<1907>創刊)などに続き、大正に入っても、原田長治の『太陽新聞』を皮切りに、『敷島新聞』、『東陽新聞』などの新聞が相次いで創刊された。また、『婦女世界』(大正 7 年<1918>創刊)、『婦女の友』(大正 10 年<1921>創刊)などの女性誌や、多数の雑誌や出版物も池田から誕生した。

昭和 12 年 (1937) に日中戦争が始まった。戦火の拡大に伴って市民からの出征兵士や戦死者も多数出るようになった。昭和 16 年 (1941) には、太平洋戦争が始まり、戦局が激化するにつれ、出征兵士と戦死者は一気に増加し、さらに市民や学生も巻き込んでいった。昭和 19 年 (1944) 9 月には大阪市立神津国民学校(現大阪市立神津小学校)の児童約 250 名らが池田に集団疎開してきた。自性院ほか 6 寺院などに分宿していたが、昭和 20 年 (1945) 3 月から池田市にも空襲が及び、5 月には現能勢町の田尻村に再疎開している。

また、昭和 20 年 (1945) 2 月頃から、細河の中川原町から東山町にかけての五月山山麓に、海軍設営隊によって横穴の魚雷格納庫が造られた。徴用労働者のほか、大阪府立池田中学校(現大阪府立池田高等学校)生をはじめとする学生も多数動員されている。近接の細河国民学校(旧市立細河小学校)に海軍の魚雷調整班が駐屯し、学校を宿舎にしながらか航空魚雷を調整、伊丹飛行場からの出撃に備えていた。

終戦間際には空襲時の延焼防止のため、市街地の一部で建物疎開とよばれる強制的な家屋取り壊しもおこなわれた。今の桜通りは、そのときに拡幅された通りの一つである。

終戦までの市内の空襲は、8 月にかけて全部で 9 回を数え、死者 17 人、全半焼・全半壊約 120 戸、罹災者約 340 人に及び、大阪府立池田中学校(現大阪府立池田高等学校)の校舎なども炎上した。十二神社(豊島南 1 丁目)には防空壕が今でも残っている。この間、池田市出身の戦死者は 600 名を超し、その 7 割近くは昭和 19、20 年 (1944、45) に戦死したと推定されている。



写真 2-28 十二神社の防空壕跡

○ 現代 (昭和戦後・平成時代)

戦後、池田市は壊滅的な被害を免れたとはいえ、極度の食糧難や経済の荒廃など、極めて困難な状況から復興を目指した。地元の中小業者を支えるべく、小林一三の後押しで昭和 26 年 (1951)、戦後全国で 5 番目の地方銀行として株式会社池田銀行(現株式会社池田泉州銀行)が設立。昭和 27 年 (1952) にも地元資本によって北摂信用組合が設立された。物資の安定供給が一大課題であったこの時代、商人の熱意によって新しく出来た市場や旧来の商店街などは、近隣からも多くの人を集め、昭和 30 年 (1955) 前後にかけては、かつての商都を思わせる賑わいをみせるまでになった。

住宅不足に対応するため、昭和 24 年 (1949) の大阪府による池田団地にはじまり、池田市も市営住宅を順次建設した。昭和 30 年代に入るとそれらに加えて大阪府住宅協会(現大阪府住宅供給公社)団地も次々につくられた。昭和 33 年 (1958)、市内で初めて日本住宅公団(現独立行政法人都市再生機構)

による 434 戸の池田団地が完成。翌 34 年（1959）に 1,577 戸の五月ヶ丘団地、37 年（1962）には 1,130 戸の緑ヶ丘団地と、同公団の大型団地が誕生した。昭和 47 年（1972）には新たに開発された伏尾台住宅地の入居も始まっている。

こうした大規模な住宅開発などにより、昭和 35 年（1960）に 6 万人に満たなかった人口は、昭和 40 年（1965）には 8 万 2 千人を超え、わずか 5 年で 4 割近くも急増し、昭和 50 年（1975）には人口 10 万人を突破した。

住宅地の増大と、団地という新しい住宅様式、通勤するサラリーマンという生活スタイルの定着は、戦前からの郊外住宅都市としての池田の性格を決定づけた。こうしたなか、池田から画期的な食品が誕生した。安藤百福（1910～2007）によるインスタントラーメンである。新しい生活スタイルのなかでの家事の合理化といった時代の要求にみごとに応え、昭和 33 年（1958）の発売開始とともに大ヒットとなり、その後の日本の食文化のみならず、世界の食文化にも多大な影響を与えている。

昭和 36 年（1961）、理研光学工業株式会社（現株式会社リコー）大阪工場と、ダイハツ工業株式会社池田第二工場が竣工した。戦後一時、商いのまちとしても賑わいをみせていた商業が、近隣市との競争や商業圏の変化などで相対的に伸び悩むなか、工業都市としての面も強めていく。大阪工業技術試験所（旧大阪工業試験所・現国立研究開発法人産業技術総合研究所関西センター）の先駆的な電気自動車の開発、昭和 56 年（1981）の株式会社リコーの電子技術開発センター竣工による半導体製造の開始など、新しい技術と製品が次々に池田から生み出された。

日本万国博覧会の関連事業として進められた中国縦貫自動車道（中国自動車道）・府道大阪中央環状線・国道 176 号バイパス、及び国道 171 号バイパス等が昭和 45 年（1970）に完成し、池田市南部の道路網が飛躍的に整備され、交通の要衝としての役割を担い続けている。さらに阪急池田駅の高架化と、駅周辺の再開発も昭和 62 年（1987）までに完了し、池田の新しいイメージを作りあげた。

他方、工場建設や宅地化、道路の新設などにより、比較的農地が広がっていた市内の風景は、この頃までに一変し、第一次産業の従事者は激減した。細河の植木は戦時中に強制的に作付け転換が行われ、戦後は壊滅状態にあったが、復興期を経て、高度経済成長期には植木需要の増大で活況を呈し、植木四大産地の一つとも並び称された。しかし、その後は、需要の後退や大規模生産地の新興などで低迷している。かつて全国的な隆盛を誇った酒造業も昭和 50 年（1975）以降は 2 歳までに減少した。また、戦前には観光馬車まで走り、盛んに宣伝された畑の梅林や、同じく畑で多く生産された晩生の池田みかんも、戦時から戦後にかけて消えている。今、わずかに残された池田みかんの木から、再び池田みかん復活の試みがなされている。

近世より脈々と続く、教育と文化のまちの伝統は、新しい文化と融合しながら、さらに展開した。池田市教職員組合出身の荒木正三郎（1906～1969）が日本教職員組合の初代委員長となったのは昭和 22



写真 2-29 五月ヶ丘団地 (S39)



写真 2-30 阪急宝塚線下りの高架運行 (S58)



写真 2-31 吉田酒造
(国登録有形文化財)

年（1947）のことである。戦後の新教育創造を目指した動きも活発であった。昭和 25 年（1950）には市立池田小学校で生活学習の全国発表大会を行うなど、その活動は大きな反響を呼んだ。

戦前より隆盛した歌や俳句においては、関西アララギ会を結成した歌人大村呉楼（1895～1966）、俳誌『早春』を創刊した俳人神田南畝（1892～1983）、俳誌『笈』の俳人藤田露紅、近代俳句の創始者日野草城（1901～56）らが池田で活躍している。絵画では、洋画家鍋井克之（1888～1969）を中心に池田市美術協会が発足、池田市美術展が継続して行われている。さらに、パリを拠点に国際的に活躍した画家吉田堅治（1924～2009）も池田から輩出している。

また、市民有志によって、昭和 32 年（1957）、五月ヶ丘団地建設予定地内の池田茶臼山古墳の保存を実現させ、昭和 43 年（1968）から翌年にかけては池田城跡の保存運動が行われていることも特筆される。

昭和 40 年（1965）にオーストラリアのローンセストン市と姉妹都市提携を結び、昭和 56 年（1981）には中国の蘇州市と友好都市を締結するなど、国際交流も進められている。提携 25 周年目の平成 2 年（1990）来、ローンセストン市からウォンバットがたびたび寄贈され、今も五月山動物園でその姿をみることができる。

平成 12 年（2000）、旧池田実業銀行だった大正期の建物は、「いけだピアまるセンター」の名称で、起業家らの育成室として活用がはじまった。平成 19 年（2007）、能勢街道の一部である本町通りが整備された。江戸時代には酒屋や問屋が立ち並び、明治に入ってからも多くは商店や金融業、公共機関などが集まり、戦後も商店街を形成したかつての池田の中心通りである。ここに平成 22 年（2010）、往年、猪名川沿いにあった大衆演劇の芝居小屋「呉服座」（建物は愛知県犬山市の博物館明治村に「くれはざ」の名称で移築・国重要文化財。「ごふくざ」とも広く呼ばれる）が、「池田呉服座」として新たに復活した。古いものと新しいものを融合させながら、事始めのまちとして、より良い教育・文化・住宅都市を目指す努力が続けられている。



写真 2-32 ローンセストン市との姉妹都市提携の調印（S40）

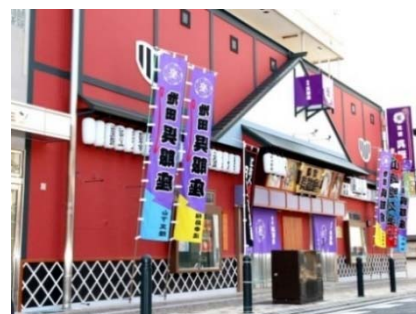


写真 2-33 池田呉服座

イ. 池田市の歴史文化遺産

先史・古代から現代に至る長い歴史のなかで、池田市には数多くの歴史文化遺産が育まれてきた。池田市では、これまで様々な調査を実施するなかで、それらの歴史文化遺産の実態の把握や価値の明確化に取り組むとともに、歴史上・芸術上・鑑賞上の価値の高いものについては池田市環境保全条例（平成28年度(2016)より池田市文化財保護条例)に基づく文化財の指定等を行うなかで保護を図るとともに、遺跡などの埋蔵文化財包蔵地も適宜発掘調査を行い、出土遺物の保存や記録をおこなってきた。また、国や府により、文化財の指定や登録を受けた文化財も多数あり、それらの保全にも努めている。

ここでは、これまでの指定等文化財として保護を図ってきた歴史文化遺産、ならびに国、府、市や大学等の研究機関等による調査によって把握した歴史文化遺産を整理する。また、併せて池田の歴史に関する調査報告や研究書なども挙げる。

○ 池田市内の指定・登録等文化財一覧

表 2-4 国指定文化財（平成 30 年 1 月 31 日現在）

区分	名称	員数	時代	所在地(管理者)	指定年月日
(重文)絵画	白描絵料紙墨書 金光明經(目無經)卷第二断簡	1 卷	鎌倉時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S25. 8.29
(重文)絵画	紙本著色 大江山絵詞 附紙本墨書詞書一卷	2 卷	鎌倉時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S25. 8.29
(重文)絵画	紙本著色 三十六歌仙切(高光)佐竹家伝来	1 幅	鎌倉時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S25. 8.29
(重文)絵画	紙本著色 豊臣秀吉像画稿	1 幅	桃山時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S34. 6.27
(重文)絵画	紙本著色 芦引絵	5 卷	室町時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S34. 6.27
(重文)絵画	紙本金地著色 三十三間堂通矢図 六曲屏風	1 隻	桃山時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S34.12.18
(重文)絵画	紙本著色 十卷抄(延慶二年覚厳奥書)	10 卷	鎌倉時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S34.12.18
(重文)絵画	紙本淡彩 奥の細道図 与謝蕪村筆(安永八年十月款記)	2 卷	江戸時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S53. 6.15
(重文)絵画	絹本墨画淡彩 白梅図 六曲屏風 呉春筆	一双	江戸時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S56. 6. 9
(重文)彫刻	木造 阿弥陀如来坐像	1 軀	平安時代	伏尾町 697 番地 久安寺	S25. 8.29
(重文)書画	紙本墨書 古筆手鑑 谷水帖 二十一種二十四葉	1 帖		栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S25. 8.29
(重文)書画	紙本墨書 楞伽經卷第二(天平廿年六月二十三日願俊願經)	1 卷	奈良時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S25. 8.29
(重文)書画	紙本墨書 内裏歌合 寛和二年六月九日	1 卷	藤原時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S25. 8.29
(重文)書画	紙本墨書 雙観無量寿經卷上(天平六年聖武天皇勅願經)	1 卷	奈良時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S34. 6.27
(重文)書画	紙本墨書 継色紙(あまつかせ) 伝小野道風筆	1 幅	藤原時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S50. 6.12
(重文)工芸品	花鳥蒔絵螺鈿洋櫃 附籐編外櫃	1 合	桃山時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S38. 2.14
(重文)建造物	久安寺楼門 三間一戸楼門 入母屋造・本瓦葺	1 棟	室町時代	伏尾町 697 番地 久安寺	S25. 8.29
(重文)建造物	五社神社十三重塔 石造十三重塔	1 基	室町時代	鉢塚2丁目4番 28 号 五社神社	S34. 6.27
(重文)建造物	八坂神社本殿 一間社流造 桧皮葺 附棟札 1 枚 (造立慶長十五年九月六日記)	1 棟	桃山時代	神田4丁目7番1号 八坂神社	S46. 6.22

表 2-5 国指定文化財件数一覧表（平成 30 年 1 月 31 日現在）

重要文化財						重要無形文化財		重要有形民俗文化財	重要無形民俗文化財	史跡	名勝	特別天然記念物	重要文化的景観	伝統的建造物群 保存地区	選定保存技術	合計
絵画	彫刻	工芸品	古文書 書跡・典籍・ 考古資料	建造物	芸能	工芸技術										
9	1	1	5	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19

表 2-6 国登録有形文化財（平成 30 年 1 月 31 日現在）

名称	種類	件数	時代	所在地等	登録年月日
稲束家住宅	住宅	1ヶ所 2 件(主屋・土蔵)	18 世紀中頃	綾羽 1 丁目 2466 番	H15. 9. 19
河村商店(旧加島銀行池田支店)	産業	1ヶ所 1 件	大正 7 年	栄本町 3172 番の 1	H15. 12. 1
いけだピアまるセンター(旧池田実業銀行本店)	産業	1ヶ所 1 件	大正 14 年	新町 2 番 14 号	H16. 6. 9
吉田酒造	産業	1ヶ所 3 件(主屋・蔵・塀)	明治 11 年	栄本町 2620 番地	H19. 5. 15
逸翁美術館旧本館、即庵、費隠、旧本館正門、旧本館塀	住宅	1ヶ所 5 件(旧本館・即庵・費隠・旧本館正門・旧本館塀)	旧本館・昭和 12 年	建石町 1965 番地 ほか	H21. 8. 7

表 2-7 府指定文化財（平成 30 年 1 月 31 日現在）

区分	指定番号	名称	員数	時代	所在地等	指定年月日
有形文化財(建造物)	建第 49 号	無二寺 石造宝篋印塔	1 基	南北朝時代	古江町 387 番地 無二寺	S52. 3.31
有形文化財(建造物)	建第 70 号	大広寺 本堂・開山堂・書院・庫裏・山門・鐘楼	6 棟	江戸時代	綾羽 2 丁目 5 番 16 号 大広寺	H19. 1.19
有形文化財(彫刻)	彫第 71 号	東禅寺 木造天部立像	2 軀	平安時代	東山町 373 番地 東禅寺	H22.1.13
民俗文化財 (有形民俗文化財)	民第 6 号	旧武呂家 桶・樽作り用具一式 附 用材・製品・工数帳等	一式		五月丘 1 丁目 10 番 12 号 池田市立歴史民俗資料館	S59. 5. 1
民俗文化財 (無形民俗文化財)	無民第 7 号	池田五月山の愛宕火 (がんがら火)			池田五月山大一文字がんがら火保存会 池田五月山大文字がんがら火保存会	H22.1.13
史跡	史第 7 号	鉢塚古墳	1 基	古墳時代	鉢塚 2 丁目 4 番 28 号 五社神社	S45.12. 7
史跡	史第 24 号	池田茶臼山古墳	1 基	古墳時代	五月丘 1 丁目 42 番地 池田市	S47. 3.31

表 2-8 府指定文化財件数一覧（平成 30 年 1 月 31 日現在）

有形文化財							無形文化財	民俗文化財			史跡	名勝	天然記念物	合計
建造物	絵画	彫刻	工芸品	古文書 書跡・典籍・ 古文書	考古資料	歴史資料		文化財	有形民俗	無形民俗				
2	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	7

表 2-9 市指定文化財（平成 30 年 1 月 31 日現在）

区分	指定番号	名称	員数	時代	所在地	指定年月日
(重文)絵画	第 1 号	紙本金地著色 松梅に鶴・桐に鳳凰の図襖絵(吉村周山筆)	8 面	江戸時代	栄本町5番 18 号 託明寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 2 号	板絵著色(旧杉戸) 岩に波・柏に鷹・芦に鶴の図衝立(桃田伊信筆)	4 面	江戸時代	室町7番4号 呉服神社	S53.10.31
(重文)絵画	第 3 号	紙本金地著色 松欄に孔雀・松樹に孔雀図襖絵(勝部如春斎筆)	8 面	江戸時代	綾羽1丁目4番 10 号 弘誓寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 4 号	紙本著色 池田名所図絵	双幅	江戸時代	西本町2番 20 号 寿命寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 5 号	紙本著色 池田知正画像	1 幅	桃山時代	綾羽2丁目5番 16 号 大広寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 6 号	絹本著色 池田三九郎画像	1 幅	桃山時代	綾羽2丁目5番 16 号 大広寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 7 号	紙本著色 涅槃図(大岡春卜筆)	1 幅	江戸時代	伏尾町 697 番地 久安寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 8 号	久安寺縁起 真名縁起1巻 仮名縁起1巻 版木 22 面	一括	江戸時代	伏尾町 697 番地 久安寺	S53.10.31
(重文)絵画	第 9 号	紙本金地著色 松林図六曲屏風(桃田伊信筆)	一双	江戸時代	五月丘1丁目 10 番 12 号 市立歴史民俗資料館	S57. 3.27
(重文)絵画	第 10 号	紙本著色 熊野本地絵巻	3 巻	室町時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S62. 3.27
(重文)絵画	第 11 号	絹本著色 寒林落日図(呉春筆)	1 幅	江戸時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	S63. 3.28
(重文)絵画	第 12 号	絹本著色 月溪(呉春)像(紀広成筆)	1 幅	江戸時代	栄本町 12 番 27 号 逸翁美術館	H 1.3.27
(重文)彫刻	第 1 号	木造 千手観音立像	1 軀	平安時代	神田3丁目 11 番2号 常福寺	S53.10.31
(重文)彫刻	第 2 号	木造 阿弥陀如来坐像	1 軀	鎌倉時代	旭丘3丁目2番2号 市立養護老人ホーム	S53.10.31
(重文)彫刻	第 3 号	木造 雨宝童子立像	1 軀	鎌倉時代	鉢塚2丁目7番 26 号 一乗院	S53.10.31
(重文)彫刻	第 4 号	木造 十一面観音立像	1 軀	平安時代	木部町 133 番地 永興寺	S53.10.31
(重文)彫刻	第 5 号	木造 増長天立像	1 軀	平安時代	伏尾町 697 番地 久安寺	S53.10.31
(重文)彫刻	第 6 号	木造 薬師如来立像	1 軀	平安時代	伏尾町 697 番地 久安寺	S53.10.31
(重文)彫刻	第 7 号	木造 聖観音立像	1 軀	平安時代	鉢塚2丁目7番 26 号 一乗院	S53.10.31
(重文)彫刻	第 8 号	木造 多聞天立像	1 軀	平安時代	鉢塚2丁目7番 26 号 一乗院	S53.10.31
(重文)彫刻	第 9 号	木造 十一面観音立像	1 軀	平安時代	綾羽1丁目1番9号 高法寺	S53.10.31
(重文)彫刻	第 10 号	木造 春日竜神立像	1 軀	室町時代	鉢塚2丁目7番 26 号 一乗院	S53.10.31
(重文)彫刻	第 11 号	木造 二十四孝透塀欄間	21 面	江戸時代	神田4丁目7番1号 八坂神社	S55. 3.24
(重文)彫刻	第 12 号	木造 薬師如来立像	1 軀	平安時代	上池田1丁目9番7号 上池田町町内会	H 7. 4.24
(重文)彫刻	第 13 号	木造 薬師如来坐像	1 軀	平安時代	東山町 373 番地 東禅寺	H16. 2.23
(重文)彫刻	第 14 号	木造 十一面観音立像	1 軀	平安時代	東山町 373 番地 東禅寺	H16. 2.23
(重文)彫刻	第 15 号	木造 天部立像	2 軀	平安時代	東山町 373 番地 東禅寺	H16. 2.23
(重文)彫刻	第 16 号	木造 不動明王坐像	1 軀	平安時代	神田3丁目 11 番2号 常福寺	H26. 3.20
(重文)書跡	第 1 号	紙本墨書 望海亭記(横川景三筆)	1 幅	室町時代	綾羽2丁目5番 16 号 大広寺	S53.10.31
(重文)書跡	第 2 号	紙本墨書 牡丹花岸柏三百間忌懐吟歌(山川正宣筆)	1 巻	江戸時代	綾羽2丁目5番 16 号 大広寺	S53.10.31
(重文)書跡	第 3 号	立教舎関係資料	一括	江戸時代	五月丘1丁目 10 番 12 号 市立歴史民俗資料館	S59. 3.26
(重文)歴史資料	第 1 号	算額(文化3年奉納)	1 面	江戸時代	住吉2丁目3番 18 号 住吉神社	H 2. 3.26
(重文)歴史資料	第 2 号	算額(嘉永元年奉納)	1 面	江戸時代	住吉2丁目3番 18 号 住吉神社	H 2. 3.26
(重文)歴史資料	第 3 号	算額(嘉永5年奉納)	1 面	江戸時代	畑3丁目 15 番8号 天満宮	H 2. 3.26
(重文)歴史資料	第 4 号	元禄十年摂州豊島郡池田村絵図	1 舗	江戸時代	綾羽2丁目4番5号 伊居太神社	H15.3.24

区分	指定番号	名称	員数	時代	所在地	指定年月日
(重文)工芸品	第1号	梵鐘	1口	桃山時代	綾羽2丁目5番16号 大広寺	S53.10.31
(重文)工芸品	第2号	梵鐘	1口	江戸時代	鉢塚3丁目4番6号 釈迦院	S53.10.31
(重文)工芸品	第3号	秋草蒔絵螺鈿聖餅篁	1合	桃山時代	栄本町12番27号 逸翁美術館	S63.3.28
(重文)考古資料	第1号	池田茶臼山古墳出土品	一式	古墳時代	五月丘1丁目10番12号 市立歴史民俗資料館	S53.10.31
(重文)考古資料	第2号	鉢塚古墳上部所在経塚出土品	一式	鎌倉時代	鉢塚2丁目4番28号 五社神社	S53.10.31
(重文)考古資料	第3号	娯三堂古墳出土品	一式	古墳時代	五月丘1丁目10番12号 市立歴史民俗資料館	S53.10.31
(重文)建造物	第1号	石造 宝塔基礎	1基	鎌倉時代	神田3丁目11番2号 常福寺	S53.10.31
(重文)建造物	第2号	石造 板碑	1基	鎌倉時代	畑3丁目15番8号 天満宮	S53.10.31
(重文)建造物	第3号	石造 燈籠	1基	南北朝時代	畑3丁目15番8号 天満宮	S53.10.31
(重要有形民俗文化財) 信仰	第1号	木造 雨乞竜	1基	近世以前	西本町2番20号 寿命寺	S57.3.27
(重要有形民俗文化財) 民具	第1号	木製 踏車(水車)	1基	江戸時代	五月丘1丁目10番12号 市立歴史民俗資料館	S62.3.23
(重要無形民俗文化財) 祭礼行事	第1号	愛宕火			五月山城山町・建石町々会	S53.10.31
(重要無形民俗文化財) 祭礼行事	第2号	神田祭 額灯と幟の宮入り			神田4丁目7番1号 八坂神社 (旧神田村六ヶ村)(旧神田村)	S53.10.31
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第1号	娯三堂古墳		古墳時代	綾羽2丁目129 池田市	S53.10.31
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第2号	池田城主池田氏の墓	2基	江戸時代	綾羽2丁目5番16号 大広寺	S53.10.31
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第3号	伝承 弁慶の泉			豊島南2丁目731-1 池田市	S53.10.31
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第4号	麻田藩主青木家累代の墓	16基	江戸時代	畑1丁目18番17号 仏日寺	S53.10.31
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第5号	五月ヶ丘古墳および出土遺物		古墳時代	五月丘1丁目10番12号 池田市	S55.3.24
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第6号	伝承 唐船が淵			木部町から新町	S57.3.27
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第7号	田中桐江の墓	1基	江戸時代	綾羽2丁目5番16号 大広寺	H4.3.18
(史跡名勝天然記念物) 史跡	第8号	猪名川政右衛門の碑	1基	江戸時代	新町1番1号 西光寺	H16.10.18
(史跡名勝天然記念物) 天然記念物	第1号	イスノキ	1		神田4丁目7番1号 八坂神社	S53.10.31
(史跡名勝天然記念物) 天然記念物	第2号	カイヅカイブキ	1		渋谷3丁目17番11号 自性院	S57.3.27

※彫刻第15号 東禅寺 天部立像、祭礼行事第1号 愛宕火は、平成22年1月13日付けで大阪府指定文化財に指定

表2-10 市指定文化財件数一覧表(平成30年1月31日現在)

重要文化財							重要有形民俗文化財		重要無形民俗文化財	史跡名勝天然記念物		合計
絵画	彫刻	書跡	歴史資料	工芸品	考古資料	建造物	信仰	民具	祭礼行事	史跡	天然記念物	
12	15	3	4	3	3	3	1	1	1	8	2	56

表 2-11 重要美術品一覧

所蔵	名称	員数	指定年月日
逸翁美術館	蒔絵芒文様棚	1基	S 8. 7.25
"	彩牋墨書 伊勢集断簡(石山切)(ぬきためて)	1幅	S 8.10.31
"	紙本著色 鹿図 与謝蕪村筆 四曲屏風	一双	S 8.10.31
"	袈裟襷文銅鐸 伝奈良県添上郡櫛本村出土	1個	S17. 5.30
"	絹本著色 砧図 呉春筆	1幅	S10. 8. 3
"	絹本著色 地藏十王図	1幅	S12. 5.27
"	紙本墨書 藤原定家消息「一日」	1幅	S12. 5.27
"	陶製瀬戸劃花菊紋瓶子 有蓋	1箇	S12.12.24
"	紙本墨書 古今集(伝為家筆)冷泉為條ノ跋アリ	2帖	S13. 9. 5
"	紺紙金銀字賢劫経 卷第四 卷第五 卷第九 卷第十	4巻	S14. 2.22
"	紺紙金銀字清浄毗尼方廣経	1巻	S14. 2.22
"	紙本著色 露殿物語	3巻	S14. 2.22
"	鳥形紐蓋附高脚串埴	1箇	S 8.10.31
"	紙本墨画 蓮根図 伝牧溪筆	1幅	S15. 9.27
"	紙本著色 高野大師行状絵	1巻	S17. 5.30
"	蒔絵桐竹文硯箱	1合	S17. 5.30
"	紙本墨書 後撰集 卷第十断簡(白河切)(人のものに)	1幅	S17.12.16
"	紙本墨書 後拾遺集 卷第十断簡(中院切)(おくれしと)	1幅	S17.12.16
"	紙本墨書 元永元年十月十一日内大臣家歌合断簡	1幅	S17.12.16
"	紙本墨書 和漢朗詠抄(金澤文庫本)	2巻	S17.12.16
釈迦院	宝篋印塔	1基	S10.10.14

※「重要美術品等の保存に関する法律」(昭和8年)に基づくもの

※重要美術品については、法はなお効力を有する(文化財保護法 附則第4条)

表 2-12 埋蔵文化財包蔵地 (平成30年1月31日現在)

遺跡名	種別	時代	所在地
吉田古銭出土地	その他の遺跡(埋納遺跡)	中世	吉田町
吉田遺跡	散布地	古墳・奈良	吉田町
鼓ヶ滝遺跡	散布地	弥生	古江町
古江古墳	古墳	古墳	古江町
古江北古墳	古墳	古墳	古江町
古江遺跡	散布地	弥生・古墳	古江町
古江石匙出土地	散布地	縄文	古江町
木部1号墳	古墳	古墳	木部町
木部2号墳	古墳	古墳	木部町
木部桃山古墳	古墳	古墳	木部町

遺跡名	種別	時代	所在地
木部遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世	木部町
愛宕神社遺跡	集落跡	弥生・古墳	綾羽 2
遺物散布地	散布地	弥生	綾羽 2
伊居太神社参道遺跡	散布地	旧石器・縄文・弥生	綾羽 2
五月山公園遺跡	集落跡	弥生	綾羽 2
紅葉古墳	古墳	古墳	綾羽 2
娛三堂古墳	古墳	古墳	綾羽 2
娛三堂南古墳	古墳	古墳	綾羽 2
池田城跡	城館跡・集落跡・古墳	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	上池田 1・建石町・城山町・栄本町・五月丘 2・大和町
柳原遺跡	集落跡	弥生・古墳	城南 3
池田茶臼山古墳	古墳	古墳	五月丘 1
五月ヶ丘古墳	古墳	古墳	五月丘 1
善海1号墳	古墳	古墳	畑 3
善海2号墳	古墳	古墳	畑 3
石積廃寺	社寺跡	奈良	畑 5
新稲西遺跡	散布地	縄文	畑 4・畑 5
京中遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳	畑 3
畑有舌尖頭器出土地	散布地	縄文	畑 4
夏湖池遺跡	散布地	弥生	緑丘 1
野田塚古墳	古墳	古墳	旭丘 2
狐塚古墳	古墳	古墳	旭丘 3
石橋古墳	古墳	古墳	井口堂 3
二子塚古墳	古墳	古墳	井口堂 1
鉢塚北遺跡	散布地	弥生	鉢塚 1
鉢塚古墳	古墳	古墳	鉢塚 2
鉢塚遺跡	集落跡	中世	鉢塚 1・鉢塚 2・鉢塚 3
禅城寺遺跡	集落跡・社寺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	八王寺 1・宇保町
鉢塚南遺跡	散布地	古墳	鉢塚 2
宇保猪名津彦神社古墳	古墳	古墳	宇保町
宇保遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・中世	八王寺 1・宇保町
神田北遺跡	集落跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	八王寺 1・神田 1・神田 2
神田南遺跡	散布地	弥生・古墳	神田 3
脇塚古墳	古墳	古墳	神田 1
門田遺跡	集落跡	古墳	神田 2
天神遺跡	散布地	縄文・古墳	天神 1・天神 2
宮の前遺跡	集落跡・古墳	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	住吉 1・住吉 2・石橋 4
待兼山遺跡	散布地	古墳	石橋 3

遺跡名	種別	時代	所在地
住吉宮の前遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	住吉 2・空港 1・空港 2
宮の前西遺跡	集落跡	旧石器・古墳・中世	空港 1
豊島南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	豊島南 1・豊島南 2・空港 2
蛭池西遺跡	集落跡	弥生・古墳	空港 1・空港 2
梅室経塚	その他の遺跡(経塚)	中世	槻木町
姫室経塚	その他の遺跡(経塚)	中世	槻木町

表 2-13 文化財未指定の建物

名称	旧名称等	時代	構造ほか	所在地
八千代橋		昭和 13 年	トラス橋(使用材料:鋼橋、床版材料:コンクリート)	伏尾町
千代橋		昭和 6 年	桁橋(使用材料:鋼橋、床版材料:コンクリート)	伏尾町
中川原町旧海軍地下魚雷格納庫跡		昭和 20 年		中川原町・東山町
個人住宅		昭和 5 年	鉄筋コンクリート洋館	木部町■
個人商店		明治末		西本町 6-■
いけださわやかビル	いとや百貨店	昭和 5 年	RC3 後ろ部分は木造 2 階建	栄本町 1-8
個人住宅	酒造家	17 世紀末頃	木造・本瓦葺	栄本町 9-■
呉春酒蔵		19 世紀か	木造・本瓦葺	栄本町
呉春倉庫		18 世紀末頃	木造つし 2 階・本瓦葺	綾羽 1-2-■
個人住宅	干鰯屋	17 世紀末頃	木造・本瓦葺	綾羽 1-4-■
個人住宅		近世か	木造・本瓦葺	綾羽 1-5-■
ダイハツ工業クレハクラブ		大正 12 年	木造平屋	室町 4-36
個人住宅	池田新市街	明治 43 年		室町 6-■
室町会館	室町倶楽部	明治 44 年		室町 7-13
個人住宅	池田新市街	明治 43 年		室町 8-■
個人住宅	池田新市街	明治 43 年		室町 9-■
個人住宅	池田新市街	明治 43 年		室町 9-■
個人住宅	池田新市街	明治 43 年	木造・寄棟瓦葺	室町 10-■
池田市立池田小学校 西校舎		昭和 11 年	RC3	大和町 1-4
池田泉州銀行池田営業部	池田銀行本店	昭和 27 年	RC5	城南 2-16-16

※個人情報に伴い、住所一部を■で表記した

※平成 10 年代以降の複数の調査成果をまとめたため、必ずしも現況を反映していない場合がある

表 2-14 文化財未指定の石造物・碑など

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
墓	平間長雅の墓	久安寺	伏尾町 697	宝永 7 年	歌人 宝永 7 年 74 歳没 法名精剛院風観長雅六諭元夢居士
墓	津田道意の墓	久安寺	伏尾町 697	元禄 9 年	俳人 元禄 9 年 91 歳没 法名夢翁大居士
その他	南佐兵衛像	久安寺	伏尾町 697		細河村村長
碑	近江友七の歌碑	久安寺	伏尾町 697	昭和	になの道かわくことなし山のみずここにたまりてさくら花ちる 近江友七は「地中海社(日の伴)」主宰
碑	花谷和子の句碑	久安寺	伏尾町 697		日野草城に師事
碑	安谷地厚の句碑	久安寺	伏尾町 697		
碑	句碑?	久安寺	伏尾町 697		詳細不明
碑	句碑	久安寺	伏尾町 697		花に昏れ瀧は己れの音にかえる(詳細不明)
碑	句碑	久安寺	伏尾町 697		暮●初●●かなかなや山に安堵に ●●(詳細不明)
碑	大村呉楼の歌碑	久安寺	伏尾町 697		雑木やま騒がせてたつ春のあらし櫃の花粉の散りけぶり来る
その他	森秀次胸像	久安寺	伏尾町 697	昭和 19 年	箕面公園に昭和 5 年に建立された像が昭和 18 年に金属供出され、代わりに陶器製のものが設置された。昭和 44 年に銅像を復元設置した際に、陶器製のものを久安寺に移設安置
碑	岡本地厚の句碑	不死王閣	伏尾町 128-1	昭和	鮎放流それより橋も色めけり 地厚岡本卯一郎 明治 24 年生、鮎茶屋を開く、昭和 39 年 74 歳没
鳥居	鳥居	久安寺楼門前天満宮	伏尾町	宝暦 11 年	池田稲束小兵衛嘉包立
その他	青面金剛	新八千代橋たもと	伏尾町	寛永 7 年	
碑	忠魂碑	細川神社	吉田町 1	昭和 10 年	陸軍大臣林銃十郎書 発起人細河村長南佐兵衛ほか 市立細河小学校校庭から移転(細河小学校『創立 100 周年誌』)
その他	細川神社社号標柱	細川神社	吉田町 1	元文 1 年	並河誠所
塔	宝篋印塔	東禅寺	東山町	応永 4 年	
碑	神殿松(こどのまつ)の碑	国道 423 号沿い	東山町	昭和	細河郷会建立 昭和 46 年に枯れた樹齢数百年の「一本松」の記念碑
その他	青面金剛	東山公園の南東 30m	東山町		祠に安置されている
石仏	地藏(光明阿弥陀仏)	無二寺	古江町	永禄 12 年	『新修池田市史』第 1 巻
石仏	地藏(二尊阿弥陀像)	無二寺	古江町	室町時代初期	『新修池田市史』第 1 巻
石仏	地藏	古江町 妙見道 札場橋三叉路	古江町		『郷土のあゆみ』4 No.105 430×210×210 cm
石仏	地藏	古江町 墓地へ行く途中	古江町		『郷土のあゆみ』4 No.107 400×230×190 cm

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
石仏	六地藏	古江町	古江町		『郷土のあゆみ』4 No.109
碑	水害記念碑	国道173号沿い西側	古江町(川西市と池田市の境界)	明治31年	明治29年8月30日水害(台風)復興祈念 碑文あり(明治30年9月30日にも水害あるが…)
碑	橋本久太郎翁之碑	古江橋右手	古江町	昭和6年	川辺郡丸橋村出身 古江橋の所に居を構える 明治6年没 明治29年の水害により家屋流失 長男が記念碑建立
石仏	地藏	中河原町専行寺東手	中河原町	永禄12年	『新修池田市史』第1巻
碑	福井熊三郎君功蹟之碑	JA大阪北部細河支店前	中河原町	昭和5年	初代組合長(明治44~大正9年) 細河信用組合建立 碑文あり
石仏	地藏(阿弥陀像)	古江橋歩道	木部町		『郷土のあゆみ』4 No.95 300×200×140cm
石仏	地藏	古江橋南下ったところ	木部町		『郷土のあゆみ』4 No.94 550×260×15cm
碑	下村高潜彰碑	紀部神社前	木部町	明治26年	下村兵次郎 明治22年48歳没 木部村と出在家小戸村境界裁判で活躍 片岡易山書碑文あり
碑	今仲政二郎記功碑	新宅会館北方	木部町	大正8年	絹延町民一同建立
碑	日の丸展望台の碑	五月山		昭和39年	大阪府知事左藤義詮書
碑	望海亭記碑	五月山		天保12年	横川景三作 山川正宣建立
碑	藤田露紅の句碑	五月山			
碑	中村若沙の句碑	五月山			明治27~昭和53年、ホトギス同人
鳥居	鳥居	五月山秀望台	綾羽2	元禄3年・慶応1年	愛宕神社、池田材木町の建立。東西両柱とも破損により慶応1年に継ぎ足されたものか
石仏	六地藏	五月山公園望海亭コース入口	綾羽2	江戸時代	『郷土のあゆみ』4 No.91
碑	忠魂碑	五月山公園	綾羽2	昭和3年	
碑	五月山公園碑	五月山公園	綾羽2	昭和29年	昭和25年着工、昭和29年竣工 池田市長武田義三筆
碑	鳩ぼっぼの歌碑	五月山公園	綾羽2	昭和33年	東くめ(室町在住) 作詞瀧廉太郎作曲「鳩ぼっぼ」
碑	中村若沙の句碑	五月山公園	綾羽2	昭和	もろともに憩ひ春蟬聞くことに 若沙
鳥居	鳥居	伊居太神社	綾羽2-4-5	天和2年	猪名津彦祠 願主坂上平太夫
碑	使主室碑	伊居太神社	綾羽2-4-5	文化11年	
碑	姫室の碑	伊居太神社	綾羽2-4-5		
墓	五輪塔地輪部	大広寺	綾羽2-5-16	永正1年	馨室祐徳大姉永正元甲子五月九日
墓	五輪塔地輪部	大広寺	綾羽2-5-16	永正5年	笑岩正忻禅定門ア永正五年戊辰五月
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽2-5-16	天文10年	天文十年辛丑ア一椿山永春禅定尼二月十日敬白
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽2-5-16	天文13年	天文十三年甲辰ア一潤陽壽桃禅定門十月六日

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	天文 14 年	天文十四年乙巳ア一玉山妙牀大姉正月十日
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	永禄 3 年	永禄三ア宗春童女正月廿六日 空風輪欠
墓	五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	永禄 7 年	永禄七一翁宗清五月九日 所在不明
石仏	地藏	大広寺	綾羽 2-5-16	永禄 7 年	永禄七年甲子三月十三日 逆修
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	天正 3 年	天正三甲戌年 ア一前肥州向陽宗喜禪定門二月十七日
墓	五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	天正 10 年	天正十稔壬午ア一財室妙善大姉正月十二日 所在不明
墓	五輪塔地輪部	大広寺	綾羽 2-5-16	元亀 3 年	長 元亀三年壬申 ア一妙善禪定尼 訃八月十四日
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	文禄 2 年	文禄二年積岩宗壽禪定門三月五日 空輪欠
墓	一石五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	慶長 3 年	慶長三壬戌年ア一天徳妙春禪定尼正月十九日
墓	五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	慶長 5 年	慶長五庚子年ア一瑞巖宗祥禪定門十月四日
墓	五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	慶長 11 年	慶長十一丙午ア一隆嶽妙繁禪定尼正月廿日
墓	五輪塔	大広寺	綾羽 2-5-16	慶長 13 年	慶長十三年戊申年ア一河庵幽智居士十月廿三日 所在不明
墓	休計の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	宝永 1 年	萱野三平の従弟
墓	田中桐江の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	寛保 2 年	72 歳没 碣銘あり
墓	荒木適翁の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	寛延 1 年	59 歳没 墓誌あり
墓	栢村(桐江夫人)の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	宝暦 2 年	74 歳没 「貞亮孺人栢村氏之墓」墓誌あり
墓	清地以悦の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	宝暦 9 年	60 歳没 春潭 桐江門人 墓誌あり
供養塔	天津禪師塔	大広寺	綾羽 2-5-16	寛政 6 年	阪上十五郎 僧 元文 4 年 64 歳没
碑	牡丹花隠君遺愛碑	大広寺	綾羽 2-5-16	文化 1 年	田中桐江撰 荒木梅閣筆
碑	牡丹花隠の歌碑	大広寺	綾羽 2-5-16		
碑	竹中碧水史の句碑	大広寺	綾羽 2-5-16		砂丘会・俳句・俳画
墓	阪上竹外の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	文政 2 年	山本屋弥右衛門 法名賢明一味居士
墓	井上遅春の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	文政 4 年	布屋庄右衛門 法名一通源機信士
墓	常盤山吉右衛門の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	文政 6 年	力士 文化 9 年没 法名大機活用居士 門弟建立
墓	松下一扇の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	文政 13 年	古手屋六兵衛 37 歳没 法名的翁良中信士
墓	中川先生墓	大広寺	綾羽 2-5-16	江戸時代	麻田家士門人 3 名と尼崎家士門人 1 名の名を刻む
墓	珠菴道全居士	大広寺	綾羽 2-5-16	江戸時代	未調査
墓	山中家(鴻池屋)墓石群	大広寺	綾羽 2-5-16	慶安～寛政	20 基 五輪塔・蓮牌型墓石・位牌型墓石
燈籠	燈籠	大広寺	綾羽 2-5-16	安政 2 年	弁天祠 達磨講中
鳥居	鳥居	大広寺	綾羽 2-5-16	安政 5 年	弁天祠 達磨講中

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
供養塔	ハインリヒ・フォン・シーボルト供養塔	大広寺	綾羽 2-5-16	昭和 3 年	細原はな(慶応 2~昭和 12 年)建立、碑文あり
碑	三好風人記念碑	大広寺	綾羽 2-5-16	昭和 4 年	俳人 芳起唐船句会 賛助近畿俳句友人池田町有志
墓	細原はなの墓	大広寺	綾羽 2-5-16	昭和 12 年	ハインリヒ・フォン・シーボルトの日本での妻 72 歳没
墓	小林一三夫妻の墓	大広寺	綾羽 2-5-16	昭和 32 年	法名大仙院殿真覚逸翁大居士
その他	大広寺石柱	大広寺	綾羽 2-5-16	昭和 41 年	施主八尾工務店石工大東石材店功德主谷東茂
その他	大広寺表門七ツ時の標石	大広寺	綾羽 2-5-16	江戸時代	平井村十九良兵衛建立
墓	北田栄太郎の墓	陽春寺	綾羽 2-5-17	昭和	満寿美住宅開発者
碑	旌忠記念碑	五月山児童文化センター上がり口	綾羽 2-5-9	明治 34 年	明治 33 年 1 月 7 日に創立された興風会により、戊辰戦役以来の豊能郡の国時殉職軍人 32 名のために建立、明治 34 年 6 月建碑式、昭和 9 年池田町字城之口 2033 番地より現在地へ移転
その他	武田義三寿像	茶臼山公園	五月丘 1-7	昭和 39 年	
その他	田村駒治郎胸像	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12		
その他	絹延小橋欄干	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12	大正 13 年 3 月	木部町と川西市との市境にあった絹延小橋を、絹延橋改修工事に伴い撤去。欄干は 2 つが川西市に、2 つが歴史民俗資料館前に移設
その他	桜橋欄干	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12		水路に掛かっていたものを、昭和 56 年頃に歴史民俗資料館前に移設
その他	畠山氏領の堤敷石柱	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12		畠山領は市域にない。個人所有だったものを歴史民俗資料館前に移設
墓	五輪塔	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12		もともと市内個人宅にあったが来歴不明。歴史民俗資料館前に移設
燈籠	石燈籠竿部分	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12		採取地・来歴不明、歴史民俗資料館前に移設
その他	百度石?	歴史民俗資料館	五月丘 1-10-12		百度石に似ているが、採取地ともども詳細不明、歴史民俗資料館前に移設
その他	青面金剛	呉服神社	五月丘 1-10		呉服神社境内脇の祠に安置
その他	青面金剛	おんばのふ(ほ)ところ	五月丘 5	享保 12 年	
碑	池田城址の碑	池田城跡公園	城山町 3-46	大正 8 年	大阪府
塔	宝篋印塔	個人宅	城山町	応永 12 年	基壇と基礎のみ
碑	日初和尚遺蹟碑	個人宅南側	建石町 2035 番地	大正 13 年	山川正宣誌 池田史談会建立、平成 11 年に市へ寄贈
その他	石敢当	個人宅前	建石町 8		
石仏	地藏	上池田薬師堂前	上池田 1-9-7	天文 16 年	逆修十六人 『郷土のあゆみ』3 No.65

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
墓	五輪塔	上池田薬師堂前	上池田 1-9-7	弘治 3 年	弘治三年ア松空童子九月四日
碑	紀元二千六百年記念碑	上池田薬師堂前	上池田 1-9-7	昭和 15 年	上池田北町内会と刻んだ石柱と並んで建つ
墓	山川荷雲夫妻の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	延享 4 年	山川荷雲
墓	山川鳳陽夫妻の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	明和 3 年	荒木李谿撰墓誌あり
墓	山川星府夫妻の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	寛政 10 年	
墓	山川正宣夫妻の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	文久 3 年	大和屋大三郎 74 歳没 大正 8 年従 5 位
墓	山川小枝の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	文政 1 年	山川正宣の最初の妻 正宣撰墓誌あり
墓	山川邦子の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	文政 2 年	山川正宣の二番目の妻
墓	山川正彬の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	安政 2 年	大和屋庄左衛門
墓	山川定正夫妻の墓	本養寺	綾羽 2-2-23	弘化 2 年	山川正宣撰墓誌あり
その他	手洗石	本養寺	綾羽 2-2-23	寛延 2 年	酒造家大和屋の山川金五郎寄進によるもの
塔	題目法界塔	本養寺脇門	綾羽 2-2-23	元禄 12 年	
碑	川田祐作居士遺愛碣	高法寺	綾羽 1-1-9	寛政 5 年	寛政 5 年 73 歳没 荒木李谿撰 梅閨筆
その	熊塚	弘誓寺	綾羽 1-4-10	万延 1 年	身代わりの熊塚 雑喉屋太兵衛
墓	荒木秋江の墓	西光寺	新町 1-1	明和 2 年	与兵衛 71 歳没 法名徳誉恭山宗隆居士 荒木蘭皐撰書墓誌あり
墓	荒木蘭皐の墓	西光寺	新町 1-1	明和 4 年	吉右衛門 51 歳没 法名直誉雲外如竹居士 加藤景範撰墓誌あり
墓	荒木鶴汀の墓	西光寺	新町 1-1	安永 2 年	六左衛門 秋江の子 51 歳没 法名祥譽如雲宗端居士 荒木李谿撰梅閨書墓誌あり
墓	荒木以松の墓	西光寺	新町 1-1	天明 3 年	勝 蘭皐の妻 68 歳没 法名貞誉固岳以松大姉 荒木李谿撰墓誌あり
墓	荒木美保の墓	西光寺	新町 1-1	寛政 3 年	梅閨の妻 39 歳没 法名松誉節窓貞心善女墓誌あり
墓	荒木重榮・柳の墓	西光寺	新町 1-1	寛政 5 年	63 歳没 法名俊誉適英居士 晃誉智鏡大姉 荒木李谿撰墓誌あり
墓	荒木梅閨側女の墓	西光寺	新町 1-1	寛政 5 年	25 歳没 法名随窓智順信女 平成 6 年印藤和寛氏調査では所在未確認
墓	荒木李谿の墓	西光寺	新町 1-1	文化 4 年	善右衛門 72 歳没 法名皓誉幽雲商山居士墓誌あり
墓	荒木都那の墓	西光寺	新町 1-1	文化 10 年	李谿の妻 63 歳没 法名光誉晴煙?陵大姉墓誌あり
墓	荒木梅閨の墓	西光寺	新町 1-1	文化 14 年	続三郎 70 歳没 法名竹誉窓外梅閨居士 墓誌あり
墓	荒木養老の墓	西光寺	新町 1-1	天保 2 年	李谿の子 53 歳没 法名幽誉皓覚寂昭善士墓誌なし

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
墓	林榕洞の墓	西光寺	新町 1-1	享保 19 年	53 歳没 法名光誉春伯の心居士 田中桐江撰清地以悦書による墓誌、阪神大震災により剥落
墓	阪上稲丸の墓	西光寺	新町 1-1	元文 1 年	太郎兵衛 83 歳没 法名保譽宗仙禪定門 五輪塔形式
墓	平野端的齋の墓	西光寺	新町 1-1	明和 6 年	法橋端的齋
墓	平野澹齋の墓	西光寺	新町 1-1	寛政 5 年	64 歳没 平野澹齋居士
墓	平野條達の墓	西光寺	新町 1-1	文政 9 年	平野澹齋の子 86 歳没 法橋條達居士
墓	平野立健夫妻の墓	西光寺	新町 1-1	文政 10 年	條達の子 63 歳没 立健居士・貞暉大姉
墓	阪上故友の墓	西光寺	新町 1-1	文政 13 年	池田屋仁兵衛 法名樂利呼友信士 平成 6 年印藤和寛氏調査では所在未確認
墓	荒木関の墓	西光寺	新町 1-1	江戸時代	法名寶室妙樹善女
墓	国米亀吉の墓	西光寺	新町 1-1		明治 10 年代に大阪猪名川部屋で活躍した池田出身力士
墓	樟蔭翁の墓	西光寺	新町 1-1	明治 38 年	山口正養 79 歳没
墓	田村駒治郎ほか田村家累代の墓	西光寺	新町 1-1	大正 3 年	
碑	後藤常治郎君之碑	西光寺	新町 1-1	明治 39 年	明治 24 年池田町長就任 碑文あり
燈籠	永代常夜灯	西光寺本堂前	新町 1-1	元禄 11 年	施主坂上元智
その他	桜橋欄干	新町	新町	大正 14 年	
墓	葛野氏墓	託明寺	栄本町 5-18	文政 2 年	葛野美住(山城屋次郎兵衛)文政 2 年 50 歳没 法名釋道便
墓	西村瀨右衛門碑	託明寺	栄本町 5-18	天保 8 年	瓦屋瀨右衛門 算術師範
墓	井関左言の墓	託明寺	栄本町 5-18	文政 2 年	菊屋市右衛門 法釋自南 現在なし
その他	井戸の辻の井戸蓋石	本町通りポケットパーク	栄本町 6		本町通りの整備に伴い、平成 19 年 3 月にサカエマチ 2 番街とほんまち通り商店街交差点の通称「井戸の辻」の井戸の遺構を検出、埋め戻しに際して、井戸の蓋石を 100 ㎡ほど西の本町通りポケットパークにモニュメントとして保存
供養塔	稲丸塚	源立寺	槻木町 1-10	江戸時代	俳僧稲丸
碑	登龍門の碑	市立池田小学校	大和町 1-4	明治 7 年	大阪府権知事渡辺昇書 第一番小学校(市立池田小学校)に設置、建石町に池田尋常高等小学校が新築移転、後、市立池田小学校へ再移転
墓	一石五輪塔	大和町	大和町	天文 3 年	[]大禪定門 アー 天文三年六月十二日
その他	平和像	市役所玄関北	城南 1-1-1	昭和 38 年	平和安全都市宣言を祈念し制作 製作者水島弘一(昭和 56 年没) 平和安全協議会
燈籠	燈籠	呉服神社	室町 7-4	元禄 9 年	表門 山川十良右衛門寄進
鳥居	鳥居	呉服神社	室町 7-4	元禄 13 年	末社 井関甚兵衛寄進
碑	小蟹川の碑	呉服神社	室町 7-4	享保 5 年	名所小かに川

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
碑	猪名津彦命塚	呉服神社	室町 7-4	寛政 12 年	願主油屋吉兵衛
碑	姫室の碑	呉服神社	室町 7-4	大正 2 年	寄付人神田屋田村駒治郎
碑	染殿井の碑	満寿美町住宅地	満寿美町 10	江戸時代	
墓	清地以立の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	享保 14 年	67 歳没 釣雪丈人墓 清地以悦の墓誌あり
墓	清地文悦妻の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	宝暦 12 年	25 歳没
墓	清地文悦の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	明和 8 年	46 歳没 墓誌あり
墓	いろは友右衛門の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	享和 1 年	力士 いろは友右衛門
墓	桃田伊信の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	天保 9 年	法名鋤雲翁法眼桃田伊信 画家
墓	馬場仲文の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	江戸時代	
墓	猪名川又衛門の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2		力士 五代目猪名川又右衛門
墓	山田川豊治郎の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	明治 2 年	力士
墓	山田川亀吉の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	昭和 5 年	力士
墓	平垣美代司の墓	市立桃園墓地	桃園 2-2	昭和	日教組書記長
碑	征清戦死忠魂碑	市立桃園墓地	桃園 2-2	明治 31 年	
碑	故池田町書記栗原培之君碑	市立桃園墓地	桃園 2-2	昭和 5 年	池田町建立
碑	新池跡の碑	舟池北西端	緑丘 2-1	昭和 36 年 5 月	池田市長武田義三建立。新池(皿池)埋め立ての正確な年次は不明だが、緑ヶ丘団地造成時と思われる。緑ヶ丘団地入居開始は昭和 37 年 6 月
墓	地藏	五社神社	鉢塚 2-4-28	室町時代	鉢塚古境内 『郷土のあゆみ』3 No.39 H182 cm
その他	板碑	五社神社	鉢塚 2-4-28	室町時代	鉢塚古境内
鳥居	鳥居(表)	五社神社	鉢塚 2-4-28	元禄 12 年	入口
鳥居	鳥居(脇)	五社神社	鉢塚 2-4-28	元禄 7 年	
その他	町石	釈迦院	鉢塚 3-4-6	鎌倉時代	
石仏	六地藏	釈迦院墓地	鉢塚 3-4-6	永禄 7 年	『郷土のあゆみ』3 No.40
碑	釈迦院墓地記念碑	釈迦院墓地	鉢塚 3-4-6	昭和 6 年	六斎念仏講中建立 鉢塚村石田源七が田地を寄付した功績をたたえる碑文
その他	青面金剛	釈迦院東	鉢塚 3-5	正徳 1 年	
墓	五輪塔	一乗院	鉢塚 2-7-26	応仁 1 年	
碑	石田三成軍旗塚	一乗院	鉢塚 2-7-26	昭和 36 年	庄屋石田四郎右衛門孫稻澤トミヲ建立石田三成の遺児千代丸が軍旗に包まれ乳母によりこの地に隠れ住んだという伝承
碑	岸本秦十郎頌徳記念碑	畑 5 の東畑交差点北側	畑 1-9	明治 36 年	初代秦野村長岸本秦十郎の記念碑、市立秦野小学校西側より移設
碑	池田新祐彰徳碑	市立秦野小学校西側	畑 1-1-1	大正 3 年 3 月	

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
墓	阿澄家累代の墓	仏日寺	畑 1-18-17	昭和 5 年(平成 9 年改修)	麻田藩藩主青木家直系の一族
墓	太田家一門の墓	仏日寺	畑 1-18-17		江戸期累代の墓が並ぶ。霊標(平成に建立)に初代太田牛一の名も記されている
塔	狛犬	天満宮	畑 3-15-8	天保 2 年カ	西畑村氏子中 御蔭躰納之
塔	三界萬霊塔	天満宮	畑 3-15-8	寛文 11 年	
墓	安倍清明の墓	個人宅	畑 4-22-■		
墓	渡辺綱の子孫の墓	個人宅	畑 4-22-■		
碑	平田龍昇師の碑	石澄滝	畑 5	昭和 16 年	石澄滝開山
碑	金鷹竜王の碑	長楽寺参道	畑 5-7	昭和 37 年	北摂開発株式会社建立
碑	呉羽の里住宅地開発記念碑	呉羽の里	旭丘 2-9	昭和 12 年	柴田土地建物株式会社建立 府立池田高校北 200m 付近にあった野田塚古墳の天井石 1 枚を利用
墓	良純親王御母源具子墓所	正智寺	井口堂 3-3-4	昭和 12 年	良純親王並御生母遺蹟顕彰会建立 魚澄惣五郎書
碑	秋田篤孝歌碑	正智寺	井口堂 3-3-4	昭和 28 年	石ぶみのうた 萩の上の月吹かれたりそののちやとりとめて何かなしきならず
碑	侠客鏡留吉の碑		石橋 3	昭和 7 年	75 歳没
その他	石橋のいわれ石	市立石橋南小学校	石橋 4-6-1		能勢街道と西国街道の交差する西側の小川にかかり、石橋の地名の由来となったという
碑	石田小右衛門の碑	正国寺	天神 2-4-13	文久 3 年	大根屋小右衛門 知白翁 西本願寺財政改革 碑文あり
その他	青面金剛		荘園 1-1		天王の森と呼ばれた場所にあり、道路に面して集められた石仏などと建つ。
その他	夜泣きの中納言石	正光寺	住吉 1-9-20		藤原峰嗣(平安時代の人)休息石といわれ、大正 14 年に石柱が建てられる 2 月 23 日中納言祭
墓	エドワード・ハンター娘の墓	正光寺	住吉 1-9-20	大正 12 年	釈民常芳若林金子 エドワード・ハンターは日立造船の前身大阪鉄工所の創業者
碑	橋川三美先生頌徳之碑	順正寺	住吉 1-15-7	大正 13 年	大正 12 年 60 歳没 明治 36 年北豊島村長 同 38 年東京砲兵工廠 大正 10 年順正寺住職 碑文あり
燈籠	燈籠	住吉神社	住吉 2-3-18	元禄 15 年	青木民部多治比重安
鳥居	鳥居	住吉神社	住吉 2-3-18	享保 5 年	末社天満宮 麻田家臣中村伊兵衛
燈籠	燈籠	住吉神社	住吉 2-3-18	宝暦 2 年	青木主膳正多治比宿禰見典
鳥居	鳥居(裏)	住吉神社	住吉 2-3-18	天保 6 年	
鳥居	鳥居(表)	住吉神社	住吉 2-3-18	弘化 3 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	元禄 14 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	安永 8 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	弘化 2 年	

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	文久 2 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	宝暦 3 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	宝永 5 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	万治 3 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	宝永 7 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	宝暦 6 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	寛文 9 年	
その他	狛犬	八坂神社	神田 4-7-1	文化 8 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	寛政 7 年	
その他	手水石	八坂神社	神田 4-7-1	元禄 2 年	
燈籠	燈籠	八坂神社	神田 4-7-1	安永 8 年	
その他	狛犬	八坂神社	神田 4-7-1	寛文 7 年	
碑	藤阪仁兵衛頌徳碑	法正寺	神田 3-17-4	昭和 7 年	
塔	層塔基礎	常福寺	神田 3-11-2	鎌倉時代	釣鐘堂石積 願主 永宗
塔	層塔相輪・笠	常福寺	神田 3-11-2	鎌倉時代	相輪 1、笠 2 あり、常福寺層塔に伴うものと推測される
墓	津田直方・美濃夫妻の墓	常福寺	神田 3-11-2	江戸時代	篠崎小竹墓誌あり
その他	青面金剛		ダイハツ町		神田 3 丁目との境、府道伊丹池田線脇
鳥居	鳥居	十二神社	豊島南 1-2-9	文化 12 年	
塔	般若塔	正福寺	豊島南 1-5-26		
供養塔	道供養の碑	箕面市下止々美との境の山中	伏尾町	明和 6 年	
道標	道標 1	西国街道と能勢街道の交差	石橋 3-197	天保 2 年	右西宮左大坂 右妙見すぐ西宮
道標	道標 2	稲荷山古墳北側	井口堂 1-5	江戸時代	左ハ京道右ハ大坂道
道標	道標 3 地藏	稲荷山古墳北側	井口堂 1-5		右大坂
道標	道標 4	井口堂 1 丁目 2 個人宅西側	井口堂 1-2		左ハありまみち右ハいけだみち
道標	道標 5	個人宅	鉢塚 1-1-■ (現在なし)		右大坂 願主敬白
道標	道標 6	個人宅	鉢塚 1-1-■ (現在なし)		すぐ多田妙見池田中山道
道標	道標 7	五社神社南	鉢塚 2-6	昭和 7 年	右秦野村役場へ 左池田町へ近道 石田小兵衛 昭和七年十月廿六日
道標	道標 8 石仏	市立池田中学校西側	建石町		

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
道標	道標 9	星の宮前	建石町	江戸時代末	左京大坂道
道標	道標 10	阪急文化財団池田文庫	建石町		左みのを道右大坂みち京
道標	道標 11	法園寺西側	建石町		為法界萬靈菩提 右中山寺道是より五十丁 左法園寺善導御影当寺有
道標	道標 12	高法寺西側	綾羽	天保4年	天保四巳三月 左京 みのを山 かけ尾寺 右 中山
道標	道標 13	西光寺西側	西本町	明治時代	右能勢街道 地黄亀岡 左篠山街道 篠山伊丹
道標	道標 14	呉服橋東側	西本町	江戸時代	自然石 妙見中山道
道標	道標 15	木部町 新町勤労者センター跡北側	木部町	天保10年	天保十巳亥年二月吉祥日建之 右久安寺 亀山愛宕山 左妙見山多田御社道
道標	道標 16	木部町 新町勤労者センター跡北側	木部町	江戸時代前期	右ハ久安寺道 南無阿弥陀仏 カクヤ 久西 左ハ銀山道
道標	道標 17	木部町 新町勤労者センター跡北側	木部町		右大聖天道 久安寺宝積院 是ヨリ二十五丁 久安寺より妙見道池のせったい所まで十三丁 池田 永代浴油講中
道標	道標 18	(木部町175角)	(現在なし)	明治30年頃	自然石 右かめおの 左多田みよけん 岡村 甚助
道標	道標 19	(木部町175角)	(現在なし)	明治時代	左能勢街道 妙見地黄 右余野街道 余野亀岡
道標	道標 20	古江橋北側		安永3年	右妙見山左多田院并ゆもと 世話人岩井友右 衛門
道標	道標 21	古江橋北側		明治24年	左妙見 世話人池田入江 指絵あり
道標	道標 22 地蔵	慈恩寺山門前(元古江橋)	吉田町		右ハ中川ら道 左ハぎんざん道
道標	道標 23	古江町 札場橋	古江町	明治39年	札場橋 能勢街道 明治三十九年十月架之
道標	道標 24	中川原町 松樹園前		江戸時代	左ハのせみち右久安寺かめやま道
道標	道標 25	国道423号東山町信号	東山町	寛文12年	寛文十二年 右ハざい所 左ハ久安寺かめ山 みち 二月吉日 南無阿弥陀仏
道標	道標 26	国道423号東山町信号	東山町	明治34年	右東山 直亀岡道 左細川神社毘沙門 明治 三拾四年九月再建
道標	道標 27	八千代橋西側	伏尾町	寛文10年11月	寛文十庚戌年 右かめ山道 南無阿弥陀仏 左久安寺道 敬白 十一月吉祥日 裏 五郎 右衛門 志之衆中 長右衛門 長二郎
道標	道標 28	箕面市下止々美との境の山中	伏尾町	江戸時代	右久安寺
道標	道標 29	市営古江住宅南側	古江町	安政3年7月	北辰妙見大菩薩 是ヨリ妙見山迄三拾丁 右 ハ妙見山 左ハ多田院
道標	道標 30	陽松庵の南側	吉田町		右吉田陽松庵左能勢妙見山

種別	資料名	場所	所在地	時代	備考
道標	道標 31	慈恩寺山門前	吉田町		長尾山毘沙門天 妙見ぬけ道
道標	道標 32	東畑	畑 4-16 付近	寛文 12 年	左仏日寺右中山道 東畑村
道標	道標 33	大阪教育大学 附属池田小学 校	緑丘 1-5-1		左高山右みのをかしお寺
道標	道標 34	大広寺下	綾羽 2		右みのを道
道標	道標 35	油かけ地藏前	綾羽 2-16	宝永 1 年	左あたこみち右大広寺みち是より九町
道標	道標 36	藤木(現在なし)	(現在なし)		左京ミち右あまがさき大坂 平野屋徳兵衛
道標	道標 37	下水処理場北 側	神田 3		左いけだ 是より十五丁 右いたみ 是より二十丁
道標	道標 38	旧中井梅太郎・ 末雄氏宅	石橋 3-3-18		「左中山 右さいのう」「梶佐」元の所在場所不明
道標	道標 39	旧中井梅太郎・ 末雄氏宅	石橋 3-3-18	安永 3 年	「右麻田道」「左大坂道」「安永三甲…」「従作事建之」元の所在場所不明
道標	道標 40	上渋谷(不明)			右中山道
道標	道標 41	栄町(不明)	(現在なし)	明治 42 年	すぐ池田停車場右能勢妙見山

※個人情報に伴い、住所一部を■で表記した
 ※昭和 40 年代以降の複数の調査成果をまとめたため、表記の揺れや、必ずしも現況を反映していない場合がある

表 2-15 文化財未指定の寺社の美術品など

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
彫刻	木造 釈迦如来坐像		陽松庵	吉田町 179	鎌倉末～室町時代	1 軀
彫刻	木造 菩薩坐像		陽松庵	吉田町 179	南北朝時代頃	1 軀
彫刻	開山天桂禅師坐像	蜂須賀侯奉納	陽松庵	吉田町 179		1 軀
絵画	紙本着彩 天桂禅師頂相		陽松庵	吉田町 179		1 幅
絵画	紙本着彩 天桂禅師頂相		陽松庵	吉田町 179		1 幅
絵画	紙本淡彩 仏涅槃図		陽松庵	吉田町 179	延享 2 年	1 幅
工芸品	梵鐘	大谷相模掾	陽松庵	吉田町 179	江戸時代	1 口
文書	「正法眼蔵辨正」ほか文書		陽松庵	吉田町 179		
彫刻	木造 釈迦牟尼仏		無二寺	古江町 387		1 軀
彫刻	木造 十一面観音立像		無二寺	古江町 387	12 世紀末頃	1 軀
彫刻	木造 地藏菩薩立像		無二寺	古江町 387	15 世紀力	1 軀
彫刻	木造 毘沙門天立像		無二寺	古江町 387		1 軀
彫刻	方丈欄間		無二寺	古江町 387		
彫刻	木造 阿弥陀如来立像	康雲	如来寺	古江町 423	江戸時代	1 軀

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
文書	「(撰河泉播但丹淡州諸寺什物・免許状収録帳)」ほか文書		如来寺	古江町 423		
絵画	絹本淡彩 月之下柳江図	竹蜂	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 辛棒の図	面観	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本淡彩 山寺之図(俳画)	素石	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	絹本墨画 魚籠観音立像図	葦州筆 海晏賛	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨画 堪忍徳		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	嵯峨清涼寺 徹誉筆 版画 釈尊像(彩色)	徹誉	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 山水之図	鐵翁	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 十六羅漢		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 山水図	清人許鑄治	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨画淡彩 秋景山水図	塩川文鵬	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	絹本着彩 観音像		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨画 蓮之図	岸岱	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 寒山拾得之図		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 瀑布之図		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	絹本着彩 十六善神図		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨書 兔画賛	風外和尚	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨画 流水高山唱咏		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	紙本墨画 巳之図	風外	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	彩色 五眼釈迦説法絵図(巻)		永興寺	木部町 133		1 巻
絵画	墨画 出山釈迦	狩野永諱	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	自賛本師古佛画像 小子桂巖持持		永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	明月清風主賓	無説造人	永興寺	木部町 133		1 幅
絵画	桜鳥之図		永興寺	木部町 133		1 幅
文書	「(曹洞宗教会条例誓規)」ほか文書		永興寺	木部町 133		
彫刻	多聞天立像		久安寺	伏尾町 697	藤原時代	1 軀
彫刻	持国天立像		久安寺	伏尾町 697	藤原時代	1 軀
彫刻	聖天(大聖歡喜天)像		久安寺	伏尾町 697		1 軀
彫刻	堅実像		久安寺	伏尾町 697		1 軀
彫刻	木造 不動明王立像		久安寺	伏尾町 697	南北朝時代	1 軀
彫刻	木造 毘沙門天立像		久安寺	伏尾町 697	南北朝時代	1 軀
彫刻	木造 仁王像(阿形像、楼門内部)		久安寺	伏尾町 697	中世力	1 軀
彫刻	木造 仁王像(吽形像、楼門内部)		久安寺	伏尾町 697	室町時代	1 軀
絵画	紙本著色 旧境内図		久安寺	伏尾町 697		1 幅

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
絵画	絹本着色 弘法大師尊像		久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	著色 弘法大師像	土蔵栄相	久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	著色 不動明王尊像	堪海上人	久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	絹本墨 乘龍観音図	林丘寺宮	久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	僧形八幡像	木食以空	久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	絹本着色 五大尊画像		久安寺	伏尾町 697	南北朝時代	1 幅
絵画	著色 阿弥陀九品浄土大曼荼羅		久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	著色 観音霊験図像		久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	絹本着色 天満大自在天神-影	伝鳥羽天皇宸筆	久安寺	伏尾町 697		1 幅
絵画	墨絵 舟図雀と鷺図(書院襖絵)	江上偏 簡林斎尚卜	久安寺	伏尾町 697		4 面
文書	「足利尊氏寄進状」ほか文書		久安寺	伏尾町 697		
絵画	奉納絵馬(日露戦争絵図)	□□村若中	神明社	伏尾町	明治時代	1 枚
彫刻	木造 観音菩薩立像		東禅寺	東山町 373	11 世紀	1 軀
彫刻	木造 釈迦三尊像		大広寺	綾羽 2-5-16	南北朝時代	3 軀
絵画	紙本淡墨 大廣寺一山之図		大広寺	綾羽 2-5-16		1 幅
絵画	紙本着彩 摂州池田邑塩増山大廣寺禅寺一山之図		大広寺	綾羽 2-5-16		1 幅
絵画	絹本着色画 仏涅槃図		大広寺	綾羽 2-5-16	室町時代初期	1 幅
絵画	紙本着色 池田充正肖像		大広寺	綾羽 2-5-16	江戸時代	1 幅
絵画	坂上頼宗夫妻画像		大広寺	綾羽 2-5-16	江戸時代	2 幅
絵画	絹本 開山天巖越老和尚肖像	原在中	大広寺	綾羽 2-5-16	文久 4 年製 明治 4 年賛	1 幅
絵画	紙本着彩 牡丹花隠君画像		大広寺	綾羽 2-5-16		1 幅
彫刻	牡丹花肖柏彫像 著色坐像		大広寺	綾羽 2-5-16	江戸時代力	1 軀
文書	「大廣寺由緒略記」ほか文書		大広寺	綾羽 2-5-16		
絵画	紙本 為奈都比古大明神尊像	源具選賛	伊居太神社	綾羽 2-4-5		1 箱 1 幅
絵画	紙本 孝献皇帝聖像	藤原公修賛	伊居太神社	綾羽 2-4-5		1 幅
絵画	田中桐江像		伊居太神社	綾羽 2-4-5		1 幅
彫刻	舞楽面		伊居太神社	綾羽 2-4-5	桃山～江戸時代	1 面
彫刻	能面(小面)		伊居太神社	綾羽 2-4-5	桃山～江戸時代	1 面
彫刻	牡丹鶴盆(堆黒)		伊居太神社	綾羽 2-4-5		1 枚
絵画	扇面(穴織社染戸の井)	雲竹草	伊居太神社	綾羽 2-4-5		1 握
彫刻	穴織姫神像		伊居太神社	綾羽 2-4-5		1 軀

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
文書	「穴織宮拾要記」「伊居太神社日記」ほか文書		伊居太神社	綾羽 2-4-5		
絵画	絹本着色画 仏涅槃図	土蔵入道浄久	本養寺	綾羽 2-2-23	室町時代力	1 幅
絵画	絹本着色 鬼子母神 古唐画		本養寺	綾羽 2-2-23		1 幅
絵画	絹本着色 出山釈迦図	狩野宗信	本養寺	綾羽 2-2-23		3 幅対
絵画	山中孤亭図	呉春	本養寺	綾羽 2-2-23		1 幅
絵画	襖絵残闕 鶴 山樵群像	呉春	本養寺	綾羽 2-2-23		1 面
絵画	瑞光山本養寺境内地子惣絵図	大工平兵衛	本養寺	綾羽 2-2-23	文化 2 年	1 舗
絵画	彩色古図(穴織神主宅地・瑞光山本養寺古図)		本養寺	綾羽 2-2-23		1 舗
絵画	境内古図		本養寺	綾羽 2-2-23		1 舗
絵画	銅版画本養寺境内絵図		本養寺	綾羽 2-2-23		銅版刷物並原版各 1 枚
工芸品	梵鐘	伊場勘右衛門尉藤原兼光	本養寺	綾羽 2-2-23	江戸時代	1 口
文書	「本養寺縁起」ほか文書		本養寺	綾羽 2-2-23		
彫刻	木造 阿弥陀如来坐像		寿命寺	西本町 2-20	10 世紀後半	1 軀
彫刻	木造 如来立像		寿命寺	西本町 2-20	室町時代	1 軀
彫刻	木造 弁財天像		寿命寺	西本町 2-20		1 軀
彫刻	呉服姫坐像		寿命寺	西本町 2-20	江戸時代	1 軀
彫刻	八幡太郎義家像		寿命寺	西本町 2-20	江戸時代	1 軀
彫刻	新羅三郎義光像		寿命寺	西本町 2-20	江戸時代	1 軀
絵画	行基僧正絵巻		寿命寺	西本町 2-20	江戸時代	2 巻
絵画	医王山寿命寺古絵図		寿命寺	西本町 2-20		1 幅
絵画	穴織呉服二姫之像		寿命寺	西本町 2-20		2 幅
工芸品	梵鐘	島下郡福井 谷山氏家次	寿命寺	西本町 2-20		1 口
文書	「仁木頼章寄進状」ほか文書		寿命寺	西本町 2-20		
彫刻	閻魔大王		西光寺	新町 1-1		1 軀
彫刻	十王		西光寺	新町 1-1		1 軀
彫刻	俱生神司命夫妻		西光寺	新町 1-1		1 軀
彫刻	奪衣婆		西光寺	新町 1-1		1 軀
彫刻	書院欄間		西光寺	新町 1-1		
工芸品	梵鐘		西光寺	新町 1-1	江戸時代	1 口
絵画	絹本着色 仏涅槃図		西光寺	新町 1-1		1 幅

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
絵画	絹本着彩 馬場仲文自画賛	馬場仲文	呉服神社	室町 7-4	江戸時代	1 幅
文書	「伝 片桐且元筆寄進状」ほか文書		呉服神社	室町 7-4		
彫刻	阿弥陀如来坐像	伝鳥仏師	法園寺	建石町 3-1	12 世紀末頃	1 軀
彫刻	木造 聖観音立像		法園寺	建石町 3-1	12 世紀	1 軀
絵画	絹本著色画 二祖対面図		法園寺	建石町 3-1	室町時代	1 幅
工芸品	梵鐘		法園寺	建石町 3-1	江戸時代	1 口
絵画	龍図(法園寺観音堂天井)	桃田伊信	法園寺	建石町 3-1	江戸時代	1 面
彫刻	木造 阿弥陀如来立像		弘誓寺	綾羽 1-4-10	南北朝～室町時代初期	1 軀
絵画	絹本淡彩 鯉の図	馬寅	託明寺	栄本町 5-18		1 幅
絵画	絹本淡彩 川柳鴛鴦の図	馬寅	託明寺	栄本町 5-18		1 幅
絵画	紙本墨画 鏡餅図	葛野宜春斎	託明寺	栄本町 5-18		1 幅
工芸品	梵鐘		託明寺	栄本町 5-18	江戸時代	1 口
彫刻	木造 釈迦如来坐像		仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 軀
彫刻	木造 寺伝 弁財天		仏日寺	畑 1-18-17		1 軀
彫刻	木造 多聞天立像		仏日寺	畑 1-18-17		1 軀
彫刻	木造 青木端山(重兼)像		仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 軀
彫刻	木造著色 青木経山像		仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 軀
彫刻	木造 隠元禅師像		仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 軀
彫刻	木造 慧林正機和尚像		仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 軀
絵画	絹本著色 摩耶山仏日禅寺旧伽藍絵図		仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	紙本著色 仏涅槃図		仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 幅
絵画	絹本著色 慧林和尚像	慧林和尚像自賛	仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	絹本著色画 十六羅漢図		仏日寺	畑 1-18-17	南北朝時代	16 幅
絵画	紙本水墨 出山釈迦像	慧極和尚自画自賛	仏日寺	畑 1-18-17	江戸時代	1 幅
絵画	青木氏歴代画像		仏日寺	畑 1-18-17		3 幅
絵画	第一代老林和尚寿像		仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	紙本 第二代別傳和尚寿像		仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	紙本 第三代黙堂和尚寿像		仏日寺	畑 1-18-17	享保	1 幅
絵画	絹本 第十三代無外和尚法像		仏日寺	畑 1-18-17	明治 28 年	1 幅
絵画	絹本 第十四代仁能弘規和尚法像	秀嶺 真翁禅師賛	仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	絹本 祖大師像	中峰和尚賛	仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	絹本 第一代 恵林和尚像	戊午小陽月自賛	仏日寺	畑 1-18-17		1 幅

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
絵画	絹本 径山老和尚像		仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	絹本 天童老和尚像		仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	絹本 松隠老和尚像	恵林和尚賛	仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
絵画	絹本 普賢菩薩像	黄檗紫石禅師 画賛	仏日寺	畑 1-18-17		1 幅
文書	「仏日寺領物成之覚」ほか文書		仏日寺	畑 1-18-17		
工芸品	梵鐘	大塚屋彌兵衛	一乗院	鉢塚 2-7-26	江戸時代	1 口
彫刻	木造 多聞天立像		一乗院	鉢塚 2-7-26	12 世紀	1 軀
文書	「寺傳書上」ほか文書		一乗院	鉢塚 2-7-26		
彫刻	木造 釈迦如来坐像		釈迦院	鉢塚 3-4-16	11 世紀	1 軀
彫刻	木造 十一面観音坐像		釈迦院	鉢塚 3-4-16	南北朝時代	1 軀
彫刻	木造 十一面観音立像		釈迦院	鉢塚 3-4-16	室町末期頃	1 軀
彫刻	木造 地藏菩薩立像		釈迦院	鉢塚 3-4-16	天正頃力	1 軀
絵画	絹本極彩色 涅槃図		釈迦院	鉢塚 3-4-16	延宝 2 年	1 幅
絵画	絹本著色 弁財天		釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	絹本著色 三尊阿弥陀如来	伝恵心	釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	絹本著色 三宝荒神	土蔵宗	釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	絹本著色 行基菩薩		釈迦院	鉢塚 3-4-16	室町時代	1 幅
絵画	絹本著色 不動明王	伝智證大師	釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	絹本著色 金剛界曼荼羅		釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	紙本著色 二十四宿曼荼羅	御室絵所望月 松溪	釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	絹本著色 両界曼荼羅図(金剛界曼荼羅)		釈迦院	鉢塚 3-4-16	室町時代	1 幅
絵画	絹本著色 両界曼荼羅図(胎蔵曼荼羅)		釈迦院	鉢塚 3-4-16	室町時代	1 幅
絵画	絹本著色 当麻曼荼羅	望月松溪	釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
絵画	紺地金泥絹本 一字金輪仏図		釈迦院	鉢塚 3-4-16		1 幅
文書	「寺社御改吟味帳」ほか文書		釈迦院	鉢塚 3-4-16		
彫刻	木造 阿弥陀如来立像		自性院	渋谷 3-17-11	室町時代半ば～	1 軀
絵画	紙本著色 仏涅槃図		自性院	渋谷 3-17-11	天保 15 年	1 幅
絵画	絹本著色 仏涅槃図		西福寺	畑 3-13-11		1 幅
絵画	紙本著色 仏涅槃図		長楽寺	畑 5-7-27		1 幅
彫刻	阿弥陀如来像		長楽寺	畑 5-7-27		1 軀
絵画	紙本著色 釈迦十六善神		吉祥寺	畑 4-22-14		1 幅
彫刻	観世音菩薩	堅心僧都	万福寺	石橋 3-10-5	伝奈良時代	1 軀
彫刻	准提観世音菩薩	佛工忠圓	万福寺	石橋 3-10-5		1 軀

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
彫刻	美女丸念持仏	棲口地蔵尊弘 法大師	万福寺	石橋 3-10-5		1 軀
彫刻	弁財天		万福寺	石橋 3-10-5		1 軀
絵画	慧極和尚頂相		万福寺	石橋 3-10-5		2 幅
絵画	紙本著色 涅槃図	忠岸上雪棹斎 親信	万福寺	石橋 3-10-5	安永 9 年	1 幅
文書	「石橋村合併願書」ほか文書		万福寺	石橋 3-10-5		
絵画	絹本極彩色 涅槃図		常福寺	神田 3-11-2	室町時代初期	1 幅
絵画	絹本著色 行基菩薩画像		常福寺	神田 3-11-2		1 幅
工芸品	梵鐘	藤原朝臣徳右 衛門尉正重 藤 原朝臣太郎兵 衛尉吉住	常福寺	神田 3-11-2	江戸時代	1 口
彫刻	木造 阿弥陀如来坐像		法伝寺	神田 3-4-5	10 世紀末頃	1 軀
彫刻	木造 観音菩薩立像		法伝寺	神田 3-4-5	10 世紀末～11 世紀	1 軀
絵画	絹本極彩色 涅槃図	垂相記金岡卿 孫 勅御絵所巨 勢緑山紀盈信 筆	法伝寺	神田 3-4-5	宝暦 9 年	1 幅
絵画	絹本極彩色 当麻曼荼羅図	従二位中納言 巨勢姓紀金三 十三世 土佐法 橋紀昌信	法伝寺	神田 3-4-5	延享 2 年	1 幅
工芸品	梵鐘	大谷相模大掾 藤原正次	法伝寺	神田 3-4-5	江戸時代	1 口
文書	「常念山法傳寺記録帳」ほか文書		法伝寺	神田 3-4-5		
絵画	絹本墨書 盡十方无碍光如来図		順正寺	住吉 1-15-7		1 幅
絵画	絹本著色 本願寺親鸞聖人絵伝		順正寺	住吉 1-15-7		4 幅
絵画	絹本著色 光明阿弥陀立像幅		順正寺	住吉 1-15-7		1 幅
絵画	絹本著色 親鸞聖人坐像幅		順正寺	住吉 1-15-7	南北朝時代	1 幅
彫刻	木造 阿弥陀如来立像		順正寺	住吉 1-15-7		1 軀
彫刻	木造 阿弥陀如来立像		順正寺	住吉 1-15-7		1 軀
彫刻	木造 地蔵菩薩像		順正寺	住吉 1-15-7		1 軀
彫刻	木造 阿弥陀如来立像		順正寺	住吉 1-15-7		1 軀
彫刻	木造 阿弥陀如来坐像		順正寺	住吉 1-15-7		1 軀
工芸品	梵鐘	同州島下郡福 井村谷山氏	順正寺	住吉 1-15-7	江戸時代	1 口
文書	「大庄屋日記」ほか文書		住吉神社	住吉 2-3-18		
絵画	紙本著色 釈迦八相図		十王寺	井 口 堂 1-4-17		1 幅

種別	資料名	作成	場所	住所地	時代	数量
彫刻	阿弥陀如来立像		受楽寺	豊島南 2-4-6	中世	1 軀
工芸品	備前焼眷属		八坂神社	神田 4-7-1	江戸時代	1 対

※主に絵画・彫刻・工芸品を対象とした

※昭和 40 年代以降の複数の調査成果をまとめたため、表記の揺れや、必ずしも現況を反映していない場合がある

○ 池田の歴史関連の調査報告・研究書など一覧

表 2-16 池田の歴史関連書など（平成 30 年 1 月 31 日現在）

書籍名など		刊行年
池田町 『池田町史』		昭和 14 年
池田市 『池田市史』	概説編	昭和 30 年
	各説編	昭和 35 年
	史料編① 原始・古代・中世	昭和 42 年
	史料編② 伊居太神社日記(上巻)	昭和 43 年
	史料編③ 伊居太神社日記(下巻)	昭和 43 年
	史料編④ 稲束家日記(宝暦 8 年～文政 12 年)	昭和 55 年
	史料編⑤ 稲束家日記(文政 13 年～慶応 3 年)	昭和 48 年
	史料編⑥ 稲束家日記(明治元年～明治 45 年)	昭和 61 年
	史料編⑦ 立教舎心学関係資料	昭和 62 年
	史料編⑧ 畑村関係資料	平成 2 年
	史料編⑨ 大庄屋日記(住吉神社蔵)	平成 4 年
史料編⑩ 近代史資料	平成 26 年	
史料編⑪ 現代史資料	平成 28 年	
池田市 『新版 池田市史』	概説編	昭和 46 年
池田市 『新修池田市史』	第 1 巻 地理・考古・古代・中世編	平成 9 年
	第 2 巻 近世編	平成 11 年
	第 3 巻 近代編	平成 21 年
	第 4 巻 現代編	平成 23 年
	第 5 巻 民俗編	平成 10 年
	別巻 年表・索引編	平成 24 年
池田市 『池田 50 年 写真集』		平成元年
池田市広報公聴課 『池田・昔ばなしと年中行事』		昭和 57 年
池田市教育委員会 『まんが池田の歴史』		平成 12 年
池田市教育委員会 『池田市古江町郷土史資料 森家文書』		昭和 49 年
池田市教育委員会 『池田市古江町郷土史資料 如来寺文書』		昭和 50 年
池田市教育委員会 『木部自治会文書目録』		平成 4 年
池田市教育委員会 『北摂池田 町並調査報告書』		昭和 54 年
池田市教育委員会 『池田の文化財』		昭和 63 年
池田市教育委員会 『身近な地域 池田』(副読本)		昭和 59～平成 28 年
池田市教育委員会 『わたしたちのまち 池田』(副読本)		平成 28 年
池田市教育委員会 『いけだ 新版・郷土学習資料』(副読本)		平成元年
池田市教育委員会 『池田市寺社調査目録』		平成 3 年
池田市教育委員会 『池田を歩く 市内の旧街道と道標を巡って』		平成 16 年
池田市教育委員会 『池田のお地蔵さん』		平成 27 年

書籍名など		刊行年
池田市教育委員会 『古江の歴史と民俗』		平成 4 年
池田市教育委員会 『私の歩んできた道 市民の戦争体験・被差別体験記』		平成 2 年
池田市教育委員会 『娛三堂南古墳』		平成元年
池田市教育委員会 『娛三堂古墳』		平成 4 年
池田市教育委員会 『池田城跡 主郭部発掘調査概要報告』1・2		平成 2・3 年
池田市教育委員会 『池田城跡 遺跡発掘事前総合調査概要報告』		平成 4 年
池田市教育委員会 『池田城跡 主郭の調査』		平成 6 年
池田市教育委員会 『池田市文化財調査報告』	第 1 輯 池田市茶臼山古墳の研究	昭和 45 年
	第 2 輯 池田市産所前塚発掘調査概要	昭和 46 年
	第 3 輯 五月ヶ丘古墳	昭和 55 年
	第 4 集 池田市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表	昭和 56 年
池田市教育委員会 『池田市埋蔵文化財発掘調査概報』	1986 年度 二子塚古墳・宮の前遺跡ほか	昭和 62 年
	1987 年度 宮の前遺跡・善海 1 号墳	昭和 63 年
	1988 年度 池田城跡・宮の前遺跡・豊島南遺跡	平成元年
	1989 年度 禅城寺遺跡・神田南遺跡	平成 2 年
	1990 年度 宇保猪名津彦神社古墳・池田城跡ほか	平成 3 年
	1991 年度 池田城跡・宮の前遺跡・豊島南遺跡	平成 4 年
	1992 年度 池田城跡・池田城跡主郭部・宮の前遺跡	平成 5 年
	1993 年度 池田城跡・神田北遺跡	平成 6 年
	1994 年度 池田城跡	平成 7 年
	1995 年度 I 池田城跡 II 宮の前遺跡	平成 8 年
	1996 年度 池田城跡・狐塚古墳	平成 9 年
	1997 年度 池田城跡	平成 10 年
	1998 年度 禅城寺遺跡・神田北遺跡	平成 11 年
	1999 年度 池田城跡・宮の前遺跡	平成 12 年
	2000 年度 禅城寺遺跡・池田城跡	平成 13 年
	2001 年度 宮の前遺跡・鉢塚遺跡	平成 14 年
	2002 年度 池田城跡・宮の前遺跡・神田北遺跡	平成 15 年
	2003 年度 禅城寺遺跡・伊居太神社参道遺跡・宮の前遺跡・池田城跡	平成 16 年
	2004 年度 池田城跡・禅城寺遺跡・宮の前遺跡・神田北遺跡	平成 17 年
	2005 年度 池田城跡・禅城寺遺跡・木部遺跡・神田北遺跡・宮の前遺跡	平成 18 年
	2006 年度 池田城跡・禅城寺遺跡・宇保遺跡・鉢塚遺跡・鉢塚北遺跡	平成 19 年
	2007 年度 池田城跡・神田北遺跡・宮の前遺跡	平成 20 年
	2008 年度 村重塔試掘・池田城跡・宇保猪名津彦神社古墳ほか	平成 21 年
	2009 年度 宮の前遺跡・池田城跡・宮の前西遺跡ほか	平成 22 年
2010 年度 神田北遺跡・禅城寺遺跡・池田城跡ほか	平成 23 年	
2011 年度 池田城跡・宮の前遺跡・豊島南遺跡ほか	平成 24 年	
2012 年度 宮の前遺跡・池田城跡・神田北遺跡	平成 25 年	

書籍名など		刊行年
	2013年度 神田北遺跡・五月山公園遺跡ほか	平成26年
	2014年度 宮の前遺跡・池田城跡・鉢塚遺跡	平成27年
	2015年度 池田城跡・宮の前遺跡・池田茶臼山古墳ほか	平成28年
	2016年度 禅城寺遺跡・池田城跡・池田茶臼山古墳ほか	平成29年
	2017年度 木部遺跡・神田北遺跡・宮の前遺跡・池田城跡	平成30年
池田市教育委員会 『池田市文化財分布図』		平成16年
池田市立歴史民俗資料館 『憚悟廬文庫目録』		平成4年
池田市立歴史民俗資料館 『蝸牛廬文庫目録』(一)~(三)		平成5~7年
池田市立歴史民俗資料館 『黒松家資料目録』(一)(二)		平成8・9年
池田市立歴史民俗資料館 『木部村関係資料目録』		平成10年
池田市立歴史民俗資料館 『岸上家文書目録』		平成11年
池田市立歴史民俗資料館 『資料館双書 第1集 池田の文化と資料 近世の文人』		昭和56年
池田市立歴史民俗資料館 特別展 解説図録	『城主池田氏と池田城跡』	昭和55年
	『池田の寺宝展 涅槃図を主体として』	昭和55年
	『猪名川流域の古墳文化』	昭和56年
	『近世池田の文人』	昭和56年
	『社宝をたずねて 猪名川流域神社を中心として』	昭和57年
	『南蛮文化の粋をたずねて 併展 北摂のキリシタン』	昭和58年
	『生活文化を支えた主役たち 職人と道具』	昭和59年
	『呉春と池田』	昭和60年
	『北摂 池田の無形民俗文化財 愛宕火と八坂の額灯』	昭和61年
	『江戸下り銘醸 池田酒と菊炭』	昭和62年
	『游・爽・美 いま甦る樫野南陽』	昭和63年
	『戦国の動乱と池田氏』	平成元年
	『倭の五王とその時代』	平成2年
	『市井に生きた画家 須磨対水』	平成3年
	『池田文化と大坂』	平成4年
	『混迷の6世紀 巨石古墳への時代』	平成5年
	『日本画家 上田耕夫・耕冲・耕甫』	平成6年
	『舞台と銀幕の世界 池田の呉服座・明治座と昭和大阪芸能史』	平成7年
	『古代国家の黎明 4世紀と5世紀の狭間で』	平成8年
	『行基菩薩と北摂』	平成9年
	『日本画家 伊藤溪水』	平成10年
	『古代国家胎動』	平成11年
	『町を放火候なり 信長 池田城合戦と畿内制圧』	平成12年
『日野草城生誕百年 俳句は東洋の真珠である』	平成13年	
『女性日本画家木谷千種』	平成14年	
『江戸時代のまち 池田と撰河泉の在郷町』	平成15年	

書籍名など		刊行年
	『出みては百兵を辟け 古墳時代対国外的軍事組織の編成』	平成 16 年
	『なにわのスーパーコンサルタント 大根屋小右衛門の財政改革』	平成 17 年
	『池田氏と牡丹花肖柏』	平成 18 年
	『電鉄時代の幕開け』	平成 19 年
	『賑 交わる街道と池田』	平成 20 年
	『没後 200 年 呉春展』	平成 23 年
	『廣瀬旭荘と池田・大坂』	平成 24 年
	『お殿様の「御勝手」事情 北摂麻田藩の財政再建』	平成 25 年
	『モダニズムの記憶 建築でたどる北摂の近代』	平成 26 年
	『支配と宗教のはざままで』	平成 27 年
	『内国博で地域振興！？ 明治の夢、大大阪を拓く』	平成 28 年
	『天若不愛酒 近代池田の酒づくり』	平成 29 年
池田市立歴史民俗資料館	『池田学講座』	平成 20 年
池田市立歴史民俗資料館	『続池田学講座 人物誌編』	平成 21 年
池田市立歴史民俗資料館	『古墳時代の猪名川流域』	平成 22 年
池田市教職員組合	『第二次世界大戦と池田 付・教師の戦争体験記』	昭和 57 年
(財)大阪府文化財調査研究センター	『調査報告書第 59 集 住吉宮の前遺跡』	平成 13 年
宮之前遺跡調査会	『宮之前遺跡発掘調査概報』	昭和 45 年
吉田鋭雄・稲束猛	『池田人物誌』上・下	大正 12・13 年
池田の町並み復元グループ	『昭和初期の池田 町並みを復元して』	平成 7 年
池田子ども物語の会	『昭和初期の池田 子ども物語』	平成 12 年
広江悦朗	『きたてしま物語 北豊島考』	昭和 56 年
室田卓雄	『池田市中川原旧海軍地下魚雷格納庫跡調査報告書』	平成元年
室田卓雄	『池田歴史散歩 地名と文化財』	平成 11 年
室田卓雄	『余野街道を歩く』	平成 15 年
室田卓雄	『南極の石 付・室町住宅に居住した人々』	平成 18 年
室田卓雄	「池田市出身兵士・細井末広の「大東亜戦争参戦記」を読む」(『歴史懇談』26・27・29・30)	平成 24・25・28 年
室田卓雄	「織り姫伝承の成立について 池田市に伝わる機織り伝承の形成」(『御影史学論集』18)	平成 5 年
室田卓雄	「池田城跡に開設された学校 戦時下の人材養成機関を中心として」(『御影史学論集』38)	平成 25 年
中岡嘉弘	『北摂池田伝統の火祭 「がんがら火」』	平成 11 年
田原茂生著・梅林武雄編・室田卓雄解説	『国民学校六年生 田原茂生の日記』	平成 10 年
高山茂	『ふるさと神田』	平成 14 年
いけだまちづくり 2010 市民会議歴史・文化部会	『いけだ今昔たずねあるき 地蔵めぐりガイドブック』(池田駅周辺)	平成 16 年
いけだまちづくり 2010 市民会議歴史・文化部会	『いけだ今昔たずねあるき 地蔵めぐりガイドブック』(石橋駅周辺)	平成 17 年
社団法人室町会	『室町のあゆみ』	昭和 33 年
社団法人室町会	『室町並びに室町幼稚園の沿革』	平成 8 年
社団法人室町会	『回顧録 室町にゆかりのある人々』	平成 10 年
社団法人室町会	『室町の沿革 改訂版』	平成 17 年

書籍名など		刊行年
鈴木祥造 『池田市の市史拾遺 名旧家小西家歴史』		昭和 40 年
松尾源一郎・藤原卓 「大阪府池田市畑秦野鉦山」(『京都地学会会誌』31)		昭和 53 年
大教大附属池田中学校郷土研究部歴史班編 『「池田空襲」の記録』		昭和 51 年
池田市立渋谷中学校社会科クラブ 『池田市における学童集団疎開 大阪市東淀川区神津国民学校』1・2		昭和 55・58 年
池田市立池田中学校地歴部『原始・古代の池田』		昭和 60 年
池田市立池田中学校研究委員会 『「父母の戦争体験」に学ぶ』1・2・3		昭和 52・54・62 年
池田市北豊島中学校歴史同好会 『消えゆく池田のため池 市内のため池調査』		昭和 49 年
池田市北豊島中学校郷土研究部 (池田市北豊島中学校歴史同好会) 『郷土のあゆみ』	1号 池田を支配した幕末の領主たち	昭和 50 年
	2号 池田の家紋調査	昭和 52 年
	3号 大阪国際空港創設当時のある実態について	昭和 54 年
	4号 池田の遺蹟碑調査	昭和 56 年
	5号 池田の戦没者調べ	昭和 59 年
	6号 戦没者遺族の声・池田の戦跡を探る	昭和 61 年
池田郷土史学会 『池田郷土研究』1～19号		昭和31～平成29年
池田郷土史学会 新装『池田のわらべ歌』		平成 24 年
池田古文書研究会 『郷土の古文書を読む』	1号 黒松家文書 近世の池田	平成 16 年
	2号 黒松家文書 池田町皇祖	平成 17 年
	3号 黒松家文書 維新前の池田	平成 20 年
	4号 池田村町村政文書 解説編	平成 18 年
	6号 黒松家文書 池田村諸記録	平成 21 年
	7号 池田村及び中河原村明細帳編	平成 22 年
	8号 倅邯鄲栄花の現	平成 23 年
	9号 商人取引状	平成 23 年
	10号 池田石橋村近世文書・山形家文書	平成 24 年
	11号 近世池田酒造文書(1)	平成 24 年
	12号 中池田村貢租文書	平成 25 年
	13号 池田村流作貢租文書	平成 25 年
	14号 近世池田酒造文書(2) 御朱印出入り一件覚書	平成 26 年
	15号 中田家文書(1)	平成 27 年
	16号 中田家文書(2)	平成 29 年
	後藤敦史 「もうひとつの「黒船来航」」(『グローバルヒストリーと戦争』)	
大阪府 『歴史の息づく町なみ』		昭和 50 年
大阪府教育委員会 『重要文化財 久安寺楼門修理工事報告書』		昭和 35 年
大阪府教育委員会 『重要文化財 八坂神社本殿修理工事報告書』		昭和 61 年
博物館明治村 『明治村建造物移築工事報告書 第4集 呉服座』		昭和 60 年
博物館明治村 『重要文化財(建造物)旧呉服座 保存修理工事報告書』		平成 10 年
津金澤聡廣 「沿線に庶民の楽園を！「郊外ユートピア構想」の本質を読む」(『歴史街道』)		平成 8 年
津金澤聡廣 「日本ではじめての分譲住宅 大阪府池田室町ものがたり」(『歴史街道』)		平成 10 年

書籍名など	刊行年
津金澤聡廣 「「家なき幼稚園」が時代を越えて現代の私たちに語りかけるもの」(月刊誌『広報』)	平成 11 年
津金澤聡廣 「『阪神毎朝新聞』と小林一三」(『館報池田文庫』第 15 号)	平成 13 年
岸本幸臣ほか 「室町に分譲住宅地に関する研究」(『大阪教育大学紀要』第 II 部門 33-1)	昭和 59 年
富田好久 「家なき幼稚園の保育史上の意義」上下(『大阪青山短期大学研究紀要』13・14)	昭和 62・63 年
富田好久 「橋詰良一の生涯とその社会事業」(『大阪青山短期大学研究紀要』15)	平成元年
富田好久 「池田市呉服座(芝居小屋)の調査概報」(『池田市立渋谷高等学校研究紀要』3)	
山崎千恵子 「橋詰せみ郎エッセイ集 「愛と美」誌より」(『関西児童文化史叢書』5)	平成 2 年
水田紀久 「山川正宣(上・下)」(『上方文化』4・5)	昭和 37 年
中島正雄 『池田師範学校 その 84 年の軌跡』	平成 6 年
土井勉 「箕面有馬電気軌道の企業PR誌『山容水態』について」(『館報池田文庫』2)	平成 4 年
大内昌子 「池田文庫の沿革(三)～(六)」(『館報池田文庫』3～6)	平成 5・6 年
池田文化風土研究会 「「香山君最後の手紙」をめぐって」(池田市『研修誌いけだ』41)	昭和 63 年
池田文化風土研究会 「池田と懐徳堂」(池田市『研修誌いけだ』44)	昭和 63 年
池田文化風土研究会 「泡鳴雑感」(池田市『研修誌いけだ』46)	平成元年
池田文化風土研究会 「ふたつの「池田日記」をめぐって」(池田市『研修誌いけだ』47)	平成元年
池田文化風土研究会 「日野草城と池田」(池田市『研究誌いけだ』58)	平成 5 年
肥田皓三 「阪急沿線をめぐる出版物 3～7 阪急電車の沿線案内書」1～5(『館報池田文庫』9～13)	平成 8・9・10 年
北野裕子 「稲束猛小伝 近代池田ルネッサンスの旗手」(『種智院大学研究紀要』3)	平成 14 年
原田久美子 「小室信介とその時代」(『季刊 郷土と美術』84)	昭和 59 年
原田久美子 「小室信介おぼえがき」(『季刊 郷土と美術』100)	平成 3 年
林田良平 「俳人としての画家呉春」、「池田酒の変遷」、「関取千両幟の猪名川」(『大阪春秋』17)	昭和 53 年
林田良平 「池田呉服橋の由来」(『大阪春秋』19)	昭和 54 年
林田良平 「狂歌師紫菀は吹田の人か」(『大阪春秋』21)	昭和 54 年
林田良平 「池田と牡丹花肖柏(上下)」(『上方』71・72)	昭和 11 年
林田炭翁 「池田炭に就いて」(『上方』71)	昭和 11 年
池田谷久吉 「豊能郡梵鐘年表」(『上方』71)	昭和 11 年
荒井也陶 「池田と池田氏」(『上方』71)	昭和 11 年
神田南畝 「蕪村、几董と当時の池田俳壇」(『上方』71)	昭和 11 年
三原久雄 「池田細河の植木」(『大阪春秋』17)	昭和 53 年
岩澤光城 「岡本地厚その他」(『大阪春秋』21)	昭和 54 年
名生昭雄 「池田呉服座の建築年代について」(『武陽史学』3-1)	昭和 43 年
伊井春樹 「櫻野南陽の「南一会」始末記 小林一三による画家への支援組織について」(『阪急文化研究年報』4)	平成 27 年
審良右一 「日本の四大植木産地の一つ、細河地区の近年の動向」(『地理学報』28)	平成 4 年
小林茂 「現代部落の史的研究 大阪府池田市古江について」(『部落問題研究』6)	昭和 35 年
小林茂 「近世における商品生産と農村構造 北摂植木業の展開」(『下関商経論集』6-1)	昭和 37 年
北崎豊二 「代議士時代の森秀次」(『部落解放』671)	平成 25 年
盛田嘉徳 「北摂K村記」(『盛田嘉徳部落問題選集』)	昭和 57 年
盛田嘉徳 「あの人この人」(『盛田嘉徳部落問題選集』)	昭和 57 年

書籍名など	刊行年
原田敬一「名望家と政治 大阪府豊嶋郡豊中村奥野熊一郎の場合」(『鷹陵史学』26)	平成 12 年
森本英之「明治後期・池田の社会主義運動 葛野枯骨と縦横社」(神戸史学会『歴史と神戸』11-2)	昭和 47 年
前川洋一郎「大阪の老舗と文化」3 北摂の街道と在郷町の賑いがうみだした池田の文化と老舗」(『大阪春秋』152)	平成 25 年
久安寺(国司禎相)・林田良平『久安寺と平間長雅』	昭和 56 年
託明寺(葛野勝規)『託明寺縁起略記(改訂版)』	平成 26 年
池田五月山がんがら火記録映像作成実行委員会「大阪府無形民俗文化財 池田五月山の愛宕火「がんがら火」」(映像)	平成 26 年
福西茂「池田の街なみ再発見スケッチ画展記念 池田の史跡」	平成
神谷勝広「多田南嶺と天津禪師」(仏教大学国語国文学編『京都語文』)	
伊藤加津子「大阪のかくれキリシタン」(『大阪春秋』66)	平成 4 年
乾宏巳「近世後期の畿内在郷町 摂津池田町を例として」(『地方史研究』166)	昭和 55 年
乾宏巳「畿内在郷町の町構造 摂津池田における」(地方史研究協議会『日本の都市と町 その歴史と現状』)	昭和 57 年
乾宏巳「畿内在郷町における民衆運動と村政機構の改革 摂津池田の村方騒動を中心として」(『大阪教育大学紀要』32-1)	昭和 58 年
松下万里子「畿内在郷町における町政機構 摂津国池田における」(梅溪昇教授退官記念論文集刊行会『日本近代の成立と展開』)	昭和 59 年
田中万里子「北摂池田における地震記録 『伊居太神社日記』と『稲東家日記』を中心に」(『近世近代の地域と権力』)	平成 10 年
田中万里子「池田立教舎」(『大阪春秋』72)	平成 5 年
田上雅則「畿内惣構えに関する素描 池田城跡を中心として」(『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』)	平成 15 年
川合賢二「天保のお蔭踊りと村政改革 摂津国池田を中心として」(『ヒストリア』76)	昭和 52 年
斎藤勤「畿内在郷町の変質過程 宝暦～天明期を中心として」(大阪教育大学『歴史研究』16)	昭和 53 年
本井優太郎「戦後地域社会における基地問題の生成と展開 伊丹航空基地とその周辺地域を事例に」(『待兼山論叢』49)	平成 27 年
松迫寿代「近世中後期における合業流通 商品流通の一例として」(『待兼山論叢』29 史学篇)	平成 7 年
神戸女子大学文学部史学科『大阪府池田市伏尾町の民俗 日本民俗学実習調査報告書』6	平成 16 年
鳴海邦匡「近世山論絵図と廻り検地法 北摂山地南麓における事例を中心に」(『人文地理』51-6)	平成 11 年
鳴海邦匡「「復元」された測量と近世山論絵図 北摂山地南麓地域を事例として」(『史林』85-5)	平成 14 年
鳴海邦匡『近世日本の地図と測量 村と「廻り検地」』	平成 19 年
廣川和花・鳴海邦匡「名所「待兼山」の成立 和歌と伝承の近世的受容をめぐって」(『上方文藝研究』6)	平成 21 年
鶴崎裕雄「牡丹花肖柏の経済活動」(続群書類従完成会『ぐんしょ』73)	平成 18 年
石本倫子「戦国期摂津における国人領主と地域 摂津国人一揆の再検討を通して」(『ヒストリア』213)	平成 21 年
藤田真一「酒の町池田の輝き 『俳諧呉服絹』の文雅」(関西大学国文学会『国文学』91)	平成 19 年
井上敏幸「淡窓・旭荘兄弟の文章論」(思文閣出版『鴨東通信』78)	平成 22 年
橋本雅夫『阪急電車青春物語』	平成 8 年
貴田清「大阪府豊能郡細河村に於ける松の栽培に就て」(『庭園』8-5)	昭和元年
沢田稔「大阪府豊能郡の花弁園芸と豊能美風園芸組合」(『日本園芸雑誌』45-12)	昭和 8 年
南佐兵衛「大阪府下細河村に於ける縁日盆栽の副業栽培」(『農業世界』31-8)	昭和 11 年

書籍名など	刊行年
石橋五郎・川崎健史「園芸都市・新池田市」(『地理学』7-7)	昭和14年
井沢俊雄「溪口集落としての北摂池田町」(『人文地理』2-1)	昭和25年
海野一隆「古地図に見る近世の摂津池田」(大阪学芸大学地理学会『地理学報』6)	昭和30年
内田秀夫「池田の植木」(『日本産業史大系』6)	昭和35年
本田聰三「北摂の交易都市いけだ」(『歴史のふるい都市群』7)	平成6年
小松和生「近世在郷町の酒造業 北摂池田町」(『大阪大学経済学』17-4)	昭和43年
小野佐和子「摂津池田稲束家の横丘山荘」(公益社団法人日本造園学会『造園雑誌』49-5)	昭和61年
小野佐和子「宝暦・天明期の在郷町池田におけるレクリエーション生活と別荘」(公益社団法人日本造園学会『造園雑誌』50-5)	昭和62年
小野佐和子「横岡山荘における普請について」(公益社団法人日本造園学会『ランドスケープ研究』61-5)	平成10年
宮内輝武「満願寺屋考 池田酒造産業史の側面(1)」(大阪学院大学『商経論叢』2-1)	昭和51年
宮内輝武「大和屋考 池田酒造産業史(2)」(大阪学院大学『商経論叢』4-1)	昭和53年
桑原秀夫『岩田清庸の生没年の研究』	昭和45年
桑原秀夫・山田悦郎・岩田秀一『浪華の算学者 岩田七平清庸』	昭和51年
吉田高子「池田新市街(室町)分譲住宅地と住宅について」(『近畿大学理工学部研究報告』25)	平成元年
吉田高子「池田室町/小林一三の住宅地経営と模範的郊外生活」(片木篤編『近代日本の郊外住宅地』)	平成12年

※適宜集約・表記を省略した

2-2. 池田市の歴史文化の特徴

(1) 池田市の歴史文化の特徴の捉え方

ア. 歴史文化遺産の概念整理からみた特徴

池田市の歴史文化遺産は、指定等文化財に代表される、「市を特徴づける歴史文化遺産」と、市内各地域の個性を表す「地域の個性を表す歴史文化遺産」の大きく2つに分けることができる。

「市を特徴づける歴史文化遺産」は、市内外の人びとが池田市の歴史や文化の特色を知る手掛かりとなる歴史文化遺産である。

一方、「地域の個性を表す歴史文化遺産」は、1町3村が合併した池田市において、市内各地域の歴史や文化を感じられる歴史文化遺産であり、各地域の社寺やそこで行われる祭り・行事、地域の人びとによって献花・管理される地蔵、街道筋、また地域で受け継がれる食文化や説話・伝承などの歴史文化遺産が該当する。

しかし、それらは必ずしも明確に区分できるものではなく、右図に示すように、双方にまたがる歴史文化遺産もみられ、その一部は文化財に指定されている。

そのため、指定等文化財も含めて、池田市の「地域歴史文化遺産」を発掘しながら、地域が主体となった保存・活用の取り組みの推進が必要である。

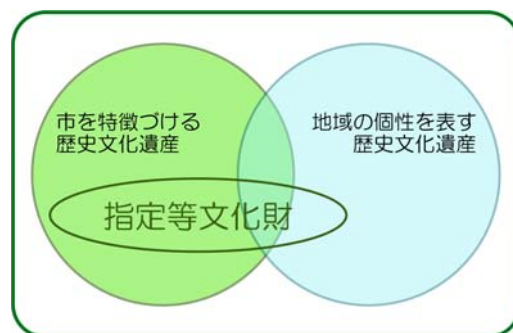


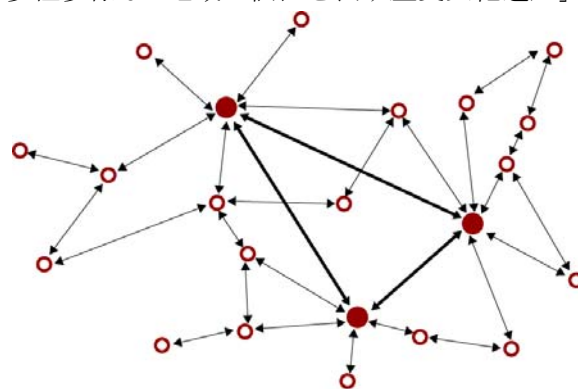
図 2-25 池田市の歴史文化遺産の構成

イ. 歴史文化遺産からみた池田市の特徴

「市を特徴づける歴史文化遺産」と「地域の個性を表す歴史文化遺産」の相互関係は、下図のように、「市を特徴づける歴史文化遺産」を核とし、そこから多種多様な「地域の個性を表す歴史文化遺産」が関連・展開していく構造として位置づけることができる。

このため、本構想においては、市内外の多くの人びとが池田市の歴史文化に親しみ、理解できるよう、「市を特徴づける歴史文化遺産」から、池田市の歴史文化の特徴を整理する。

「市を特徴づける歴史文化遺産」のうち、主要な歴史文化遺産を、建築物や石造物、遺跡、自然などの「もの」、古くからの営み（祭りや行事、生業、食文化等）や新たな取り組みなどの「こと」、史実や説話・伝承などの「きおく」の3つの区分に従い、表 2-17 に示す。



●市を特徴づける遺産 ○地域の個性を表す遺産

図 2-26 「市を特徴づける歴史文化遺産」と「地域の個性を表す歴史文化遺産」の相互関係

表 2-17 池田市を特徴づける歴史文化遺産（うち、主要な歴史文化遺産）

区分	もの 建築物、石造物、遺跡、自然など	こと 祭り、行事、生業、食文化、 新たな取り組みなど	きおく 史実、説話、伝承など
指定・登録文化財	久安寺楼門 五社神社十三重塔 八坂神社本殿 稲束家住宅 旧加島銀行池田支店（河村商店） 旧池田実業銀行本店（いけだピアまるセンター） 吉田酒造 小林一三記念館 大広寺と文人等の墓など 鉢塚古墳・池田茶臼山古墳・娛三堂古墳 自性院のカイズカイクキ 桶樽作り用具	愛宕火（がんがら火） 神田祭 額灯と幟の宮入り	池田村絵図 伝承 弁慶の泉 伝承 唐船が淵 豊臣秀吉像画稿など逸翁美術館所蔵品
未指定の遺産	室町住宅 呉羽の里・満寿美・石橋荘園の住宅 園芸高校の苗圃 能勢街道・西国街道・有馬道 池田城跡 五月山 猪名川・小水路・溜池 池田小学校の登竜門	天満宮・住吉神社の太鼓 細河植木畑 池田酒 池田炭 インスタントラーメンの発明 畑の梅林の復活 池田みかんの復活 ダイハツ工業	クレハトリ・アヤハトリの伝承 （絹掛けの松・星の宮・染殿井・ 姫室碑） 接木巧者「橋兵衛」の賜名 師範学校を偲ばす並木 池田の猪買い・池田の牛ほめ 端午の節供と豆芝居 塩増山大広寺の池 織田信長の池田城攻め 池田文庫蔵の近代化産業遺産

これらの市を特徴づける歴史文化遺産より、池田市の歴史文化の特徴を構成する歴史文化のテーマとして次の5つがあげられる。

○ コミュニティの力で継承する歴史文化

市民の手で保存が進められた池田茶臼山古墳をはじめ、市内の古墳や池田城跡、がんがら火や神田祭の継承など、コミュニティの力で培われた歴史文化

○ ものづくりの機運に育まれた歴史文化

機織の技術を伝えたとされるクレハトリ・アヤハトリ伝承から、近世の植木産業や酒づくり、近代の自動車製造や銀行の創設、さらに現代に花開いたインスタントラーメンの発明などのものづくりの機運に育まれた歴史文化

○ 住宅・教育都市としての歴史文化

近代に建設され現代まで継承されている電鉄会社による日本で最初の本格的な計画的分譲住宅地、さらに現代に整備されたニュータウンにいたるまで良好な居住環境を有するとともに、師範学校の誘致・設置や出版・画壇・建築などでの新たな活動など、戦前から学校教育・文化にも力を注ぐ都市として発展してきた歴史文化

○ 交流が培った歴史文化

中世池田氏を中心とした多様なつながり、能勢街道の街道筋の在郷町として十二斎市や池田炭などに代表される物資の集散地、さらに池田の猪買いなどの落語の題材となったまちとして、多くの文人や画人の来遊による文化の伝播が生まれ、また近代における旧家や小林一三らによる絵画の収集等、多様な交流によって培われてきた歴史文化

○ 森と水に育まれた歴史文化

市民に親しまれてきた五月山や八坂神社などの鎮守の森、猪名川などの河川や農業用水路及び溜池などの水辺など、都市近郊の多様な森と水に育まれた歴史文化

(2) 池田市の歴史文化の特徴の整理

池田市の歴史文化を構成する5つのテーマを踏まえると、その歴史文化の特徴は次のように整理することができる。

～ 池田市の歴史文化の特徴 ～

古墳や城跡などの遺跡の継承、そして中世池田氏による町屋支配を淵源とする池田の市町^{いちまち}の成立、街道筋の拠点都市としての物資の集散や文人・画人などの来訪による文化の発展、さらに近世幕藩体制のなかで発展してきた在郷町としての酒づくりや、農村部での植木生産の技術、近代以降には日本で最初の電鉄会社による本格的な分譲住宅地が生まれるほか、現代ではインスタントラーメン発祥の地となるなど、池田市は、歴史文化を継承しながらそれらを発展させて新しい「事」が始められた「まち」としての歴史文化を継承してきた。

そのため、現在もがんがら火をはじめ、各地区に受け継がれる伝統的な祭り・行事、クレハトリ・アヤハトリの伝承などが時代とともに姿を変えながらも、地域の個性豊かな歴史文化の一つひとつとして花のように地域で咲き続けており、これらの特徴をまとめると

『まち・産業・人が織り成す<事始めのまち>の歴史文化』といえる。



池田茶臼山古墳



久安寺楼門



能勢街道と有馬道の分岐



逸翁美術館旧本館（現小林一三記念館）



室町住宅



稲束家住宅



細河植木産地



池田炭



愛宕火（がんがら火）

2-3. 池田市における歴史文化を活かしたまちづくりの取り組み経緯

池田市におけるこれまでの歴史文化を活かしたまちづくりの取り組み経緯について、「(1) 歴史文化の価値の発信に係る取り組み」、「(2) 担い手育成や意識啓発・学習に係る取り組み」、「(3) 歴史文化の保存等に係る取り組み」、「(4) 歴史文化の活用に係る取り組み」の4つに区分して概観する。

(1) 歴史文化の価値の発信に係る取り組み

ア. 市史編纂及び郷土資料収集・情報発信

池田市では、指定等文化財の各種調査を継続的に進めてきたが、近年、これらの調査結果を活用して、その価値や重要性ならびに魅力を発信する取り組みが進められている。

市史の編纂は昭和26年(1951)頃から着手したが、戦後の自治体史として、これは先駆的な取り組みであった。昭和30年(1955)の『池田市史』概説編の刊行を皮切りに、その後も、各説編、『新版 池田市史』概説編、9巻の『池田市史』史料編の刊行を積み重ねてきた。なかでも『稲束家日記』『伊居太神社日記』という江戸時代～明治にかけての膨大な日記史料をそのまま翻刻した史料編は、池田のみならず我が国の庶民史料として高い評価を得ている。



写真 2-34 編纂された市史

一方、市を取り巻く生活環境や社会情勢は年々大きく変化し、また、調査・研究の進展に伴って新たな成果も蓄積されてきた。こうしたことから、平成5年(1993)、概説編を改訂した新しい市史、『新修 池田市史』の編纂に着手し、全6巻の構成で平成24年(2012)に完結した。



写真 2-35 調査中の市内の古文書資料

その後、『池田市史』史料編の編纂を再開し、平成26年(2014)に史料編としては22年ぶりとなる史料編10(近代史資料)を、平成28年(2016)には現代の史料をまとめた史料編11(現代史資料)を刊行した。

また、編纂の過程で浮かび上がったエピソードや、新しく判明した事柄を平成17年(2005)2月号の『広報いけだ』より、わがまち歴史散歩「市史編纂だより」として紹介している。このほか、市史編纂担当部署では、池田の歴史について幅広く調査するため、古い資料や、明治・大正・昭和時代の池田のまち並みなどを写した写真などを市民から募集して収集・整理している。

さらに、市立歴史民俗資料館では、郷土資料の体系的な収集を行い、後世への保存・継承に努めるとともに、調査・研究を進めている。併せて毎年1回の特別展、4回の企画展、「目で見ると池田の歴史」の常設展の各展示事業をとおして、これらの文化財を公開し、市民の歴史・文化に対する理解と知識、郷土への愛着を深める機会を提供するとともに、北大阪ミュージアムネットワークなどを通して広域での情報発信などにも取り組んでいる。

このほか、「池田の猪買い」にちなみ、「落語のまち池田」として情報発信している本市において、市立としては日本初となる、上方落語の資料を常設展示する「落語みゅーじあむ」が平成19年(2007)

4月に開館した。館内は映像による落語の紹介や、落語家のDVDやCDを視聴できるコーナー、「池田の猪買い」、「池田の牛ほめ」展示コーナーのほか、毎月第2土曜日には落語会を開催している。さらに有料アマチュア落語入門講座も開催して、池田の特徴である落語に関する情報発信を進めている。また、平成29年(2017)には、池田商工会議所がクレハトリ・アヤハトリ伝承をアニメ・マンガ化し、ホームページなどで分かりやすいPRを行っている。

こうした歴史文化遺産の価値の発信とそれらを支える調査研究や活動は、地域文化の継承と地域コミュニティの醸成に寄与するものとしての取り組みといえる。

イ. 企業資料館における資料の収集・展示

池田市には、民間の資料館、博物館が複数立地しているが、そのなかでも、箕面有馬電気軌道株式会社(現阪急電鉄株式会社)の創始者・小林一三に関連する資料館が複数立地する。小林一三は鉄道だけでなく、土地開発、宝塚歌劇・映画・演劇・日本初のターミナルデパート等数多くの事業を生み出した。小林一三の旧邸の雅俗山荘を美術館とした「逸翁美術館」は、平成21年(2009)に新美術館を建設して、収集品を展示している。茶人逸翁(雅号)としての収集品は、茶道具として用いた陶磁器や書画等からなり、とくに蕪村、呉春のコレクションは有名であり、重要文化財に指定されている作品が多く含まれている。

旧邸の逸翁美術館旧本館は「小林一三記念館」として整備され、多方面で活躍した起業家小林一三の軌跡を当時の資料・写真・映像等で紹介し、逸翁が構想を練った書齋等も公開されている。また、茶人としての逸翁が工夫を凝らした茶室・庭園のほか、邸宅レストラン「雅俗山荘」で食事を楽しむこともできる。なお、小林一三記念館の「逸翁美術館旧本館」「即庵」「費隠」「正門」「塀」の5件が国の登録有形文化財となっている。さらに、小林一三が理想的な地方文化事業の見本として、昭和24年(1949)に開館した池田文庫は、現在20万冊を超える図書・雑誌が収められているが、収蔵図書の約60%は映画・演劇・美術・文学に関するものである。宝塚歌劇の創始者としての小林一三の寄贈書や宝塚歌劇・阪急電鉄のポスター類、芝居錦絵などの歌舞伎関係の資料が所蔵されている。

また、日清食品株式会社創業者の安藤百福は、昭和33年(1958)に、世界初のインスタントラーメン「チキンラーメン」を池田市で発明した。そして、「発明・発見の大切さを伝えたい」との思いから平成11年(1999)、インスタントラーメン発明記念館(現カップヌードルミュージアム 大阪池田)を開館した。世界で新しい食文化となったインスタントラーメンの原点を学べる体験型食育ミュージアムとなっている。

ダイハツ工業株式会社は、平成19年(2007)に創立100周年を迎えた事を記念して、資料展示館「Humobility World」を開館した。「人・家族に優しい」「地球に優しい」クルマづくりをテーマに、100年間という歴史をたどるとともに、クルマの原理、クルマと環境問題、そして未来のモビリティ社会への夢や展望を紹介する体験型展示を中心とした「楽しみながら学ぶことのできる施設」となっている。

(2) 担い手育成や意識啓発・学習に係る取り組み

ア. 学校教育における取り組み

池田市では、小学校3年、4年の社会科で池田市について学ぶ副教材として『わたしたちのまち 池田』を刊行している。同書では、池田市の産業、暮らし、自然や発展に寄与した人物などを紹介しているが、第3章では「昔の暮らしとこれからの池田市」を設けて、暮らしの道具や暮らしの移り変わ

り、昔から伝わる祭りや行事、伝統文化などを学ぶことができる構成としている。

また、中学校における郷土学習の一環として、昭和49年(1974)に市立北豊島^{きたてしま}中学校歴史同好会による『郷土のあゆみ』が創刊され、昭和50年(1975)には郷土研究部と改称したうえで2号が発行され、6号(昭和59～60年度<1984～85>)まで発行された。昭和60年(1985)には市立池田中学校地歴部によって『原始・古代の池田』が発行された。これらの取り組みを発展継承して池田市教育研究会社会科部会と池田市教育委員会の編集による『いけだ～新版・郷土学習資料』が刊行された。

この郷土学習資料は、社会科授業で活用する指導資料として刊行されたものであるが、市民にも身近な地域の学習が深まることも目的としていた。この郷土学習資料をさらに発展させたものとして、昭和59年(1984)来、『身近な地域 池田』の刊行・改訂を続け、地域の過去と現在の姿をとらえる力を養成するものとしている。このように、学校教育における次世代育成をめざして、歴史文化に関わる冊子などの発行に力を注いでいる。

イ. 市民活動の支援・連携と次世代の育成

市民の文化財への理解を深めるため、池田市では文化財保護審議会委員の解説による池田市内の文化財をみて歩く文化財公開ウォーキングを毎年秋に実施しているほか、市立歴史民俗資料館では学校と連携した出前授業の実施により、次の世代に向け、郷土史への関心を高めるための取り組みを行っている。

また、「池田郷土史学会」では、研究発表、講演会及び見学会、会誌の発行、郷土の歴史と文化財を普及するための史跡の保存ならびに保護に対する協力、池田市史編纂に対する協力などの事業を行っており、市は会誌の発行事業を支援している。同会は昭和31年(1956)の池田茶臼山古墳の保存運動では中心的役割を果たしたが、市民だけで遺跡保存運動を行ったことは前例がなく、市民の文化力の高さを物語るものである。

ウ. 社会教育との連携

市民をはじめ広く市外にも市域の魅力を発信するため、市立歴史民俗資料館では特別展などの展示事業のほか、記念講演会の開催、地域学「池田学」を学ぶ参考書『池田学講座』、『続池田学講座』を作成している。『池田学講座』は事項編として、池田市域の豊かな自然や歴史を写真、図版などを交えて紹介し、『続池田学講座—人物誌編—』は人物編として、池田ゆかりの人物の活躍を肖像や作品などの写真を交えて紹介している。

また、中央公民館では近隣大学などと連携して定期的に歴史文学講座や歴史入門講座を開催、図書館では郷土史に関するコーナーとレファレンスの充実に努めているほか、例えば「がんがら火」を共通テーマとしたパネル展示など、社会教育施設全体での連携事業の試みも行っている。

(3) 歴史文化の保存等に係る取り組み

ア. 調査研究の推進

池田市では、市民や関係者の協力を得ながら、歴史文化遺産の調査研究を進めている。これまでも昭和54年(1979)には旧池田村^{なかんちょう}の中之町・小坂前町^{おさかまえちょう}を中心とした綾羽地区^{あやは}の歴史的なまち並み調査を行い、『北撰池田一町並調査報告書一』^{ほくせん}としてとりまとめている。

また、昭和57年(1982)には、昔話や伝承などが『池田・昔ばなしと年中行事』として冊子にまとめられている。加えて、平成元年度(1989)より4ヵ年で調査を実施した池田城跡主郭では、主殿と

思われる建物跡や枯山水様の庭園などを検出し、成果をまとめた『池田城跡—主郭の調査—』が刊行された。さらに、池田茶臼山古墳、^{ごきんどう} 娛三堂古墳では発掘調査により、埋葬施設などの状況や副葬品が明らかにされ、それぞれ『池田市茶臼山古墳の研究』『娛三堂古墳』として調査報告書が作成されている。また、市民グループによる昭和初期のまち並みや子どもの頃の生活をまとめた『昭和初期の池田—町並みを復元して—』、『昭和初期の池田—子ども物語』、地蔵の所在を調査した『いけだ今昔たずねあるき 地蔵めぐりガイドブック』なども相次いで出されている。

このように、市内の歴史文化遺産については、継続的な調査が進められており、それらを冊子や報告書として刊行することによって、市民が郷土の歴史に触れる機会を提供している。

イ. 技術伝承

^{ほそかわ} 細河の植木の生産は、戦国時代末期からとも江戸時代初め頃からも言われ、その後飛躍的に発展した。承応2年(1653)、^{つぎき} 接木の名人六蔵が火災に遭った内裏の橘の接木に成功し「^{たちばなひょうえ} 橘兵衛」の名を賜ったという伝承が残るなど、当時の細河の接木技術の高さが伝わっている。とくに、木部の「ボタン」は有名で、文化・文政の頃(1804~1830)には白ボタン172種類、赤ボタン161種類にも及ぶ多品種が生産されていたという記録も残っている。江戸時代後期になると、植木は全国各地に大量に出荷され、昭和の初めには、国内はもちろん、遠く中国、東南アジア、欧米にまで販路が開かれた。その後、第二次世界大戦で、植木の生産は転作により壊滅状態になったが、終戦と同時に、当時の指導的立場にあった人たちが園芸再興に力をつくし、生産地及び植木の集散地として、復興を遂げた。

日本四大産地の一つとも称されてきた細河の植木産業であるが、近年は、急速な都市化の進展に伴い農業環境が縮小し、新興産地の出現や植木需要の減少などにより、厳しさを増している。このため、国が定める認定農業者の有志で組織された研究グループ「細河植木塾22」が結成され、歴史と伝統を誇る細河の植木産業の担い手として、将来の植木づくり、細河の活性化を考えるなど、技術の伝承に向けた取り組みと植木のPRが進められている。また、細河園芸農業協同組合は地域と寄り添い、植木市の開催など植木の販売促進を通して、植木産業と技術の向上を図っている。

近世中頃、池田酒は銘酒として好評を博し、江戸にも大量に出荷され、最盛期には30蔵以上の酒蔵があった。しかし、海上輸送に不利な立地であることや、技術改良を果たした新興酒造地に押された結果、江戸時代後半から停滞し、明治以降、縮小傾向が強まった。戦時の統制を経て、市域で残ったのは4蔵のみであり、戦後は大手酒造メーカーへの桶売りで売り上げを確保していたものの経営環境は厳しかった。昭和50年(1975)までにさらに2蔵が^{ごしゅん} 廃業し、駐車場や商業施設に姿をかえた。現在も続いている^{ごしゅん} 呉春株式会社と吉田酒造株式会社の2蔵は、その頃から、大手酒造メーカーへの桶売りをやめ、近年は、少量・少品種生



写真 2-36 細河の植木畑



図 2-27 細河植木塾 22 のロゴマーク



写真 2-37 呉春の酒蔵

産による品質にこだわり、酒造技術の向上とブランド確立に努めている。

また、明治～大正にかけて、旧^{はたの}秦野村、とくに五月山の南斜面を中心に、みかん栽培がさかんであった。『大阪府農会報』によれば、明治43年(1910)の「^{とよの}豊能郡生産物統計一覧」のなかで、みかんの産地として池田・秦野の名が第一に挙げられている。戦後にかけて、市域の果実生産の作付本数・収穫高をみても、みかんが一番多かった。池田みかんの特徴は、^{うんしゅう}温州系の^{おくて}晩生種で、酸味が強く皮が厚いが、長期の貯蔵に耐え、^{むろ}室で1ヵ月ほど置くと甘くなる。そのため、一般のみかんより遅い2～3月頃にかけて京阪神に出荷されていた。

しかし、みかんの栽培地として池田は気象条件が北限にあたることや、大正期から昭和初頭にかけて虫害などを受けたこと、さらに戦時中の強制的な作物転換などにより、ほとんどその姿を消し、現在わずかに植栽されているみかんも、甘みのある^{わせ}早生種のみかんに植え替えられている。

平成19年(2007)頃から、大阪府立園芸高等学校の教諭や生徒が池田みかんの調査研究を始め、同校OBの協力なども得て、静岡市の国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の果樹研究所カンキツ研究興津拠点に残されていた、池田みかんの木の枝を譲り受け、接ぎ木をして再生させた。同校では、現在も引き続き、池田みかんの系譜や特性、活用方法などの研究が行われている。また、池田市も市内にわずかに残っていた池田みかんの古木から、接ぎ木によって苗木をつくり、五月山公園などに植栽、さらに池田みかんを活用したソースの販売を行うなど、池田みかんを後世に継承するための「池田みかん復活プロジェクト」に取り組んでいる。



写真 2-38 市内に残されていた池田みかんの木

ウ. 伝統行事保存の活動

毎年8月24日に行われる火伏せの神事「愛宕火」は、伊居太神社に伝わる『^{あやほのみやしゅうようき}穴織宮拾要記末』では、正保元年(1644)、多田屋・板屋・中村屋・丸屋の4人が五月山の山上で火をともしたところ、池田に愛宕(火の神)が飛来したと評判になり、参詣者が押し寄せたことが「愛宕火」のおこりであると伝えている。この愛宕火は、^{しろやま}城山町と^{たていし}建石町の人びとを中心に現在まで継承されている。8月24日の夜、城山町では、五月山山頂の愛宕神社で神火を松明にもらい、「大」文字に点火した後、山麓で大松明に火を移し、^{はっしやうがね}八丁鉦を打ち鳴らしながら練り歩く。八丁鉦といわれている鉦の名は、八丁四方に響き渡るというところから名づけられた。昔は鳴るものなら何でも打ち鳴らし、その発する「ガンガラガラ」という音から「がんがら火」と親しみをこめて呼ばれ、現在に至っている。

建石町では、京都の愛宕神社でお参りした後、8月24日の夕方に星の宮を出発し、五月山の^{だいまやがはら}大明ヶ原で「大」文字に組んだ火床に点火する。建石町も大松明が出ていたが、現在は子どもたちの火行列が行われている。このほか、八坂神社の神田祭、天満宮の太鼓など、伝統行事を保存する活動が市内各地で進められている。



写真 2-39 八坂神社の神田祭

エ. 歴史文化遺産の保存の活動

市内の歴史文化遺産のうち、とくに歴史的・学術的・芸術的価値の高いものについては、池田市、大阪府、国により、指定文化財や登録文化財として保護や修繕・整備などを行っている。また、埋蔵文化財包蔵地を中心に、工事などに伴う事前調査や出土遺物の保存に努めている。

そのほかにも、例えば大阪府立池田高等学校から市立秦野小学校辺りにかけては、大正期前後、「畑の梅林」としてシーズンには梅の花で埋まり、盛んに宣伝されて多くの梅見客を集め、石橋から乗合自動車まで運行されるほどであったが、戦時中の食糧増産や戦後の宅地化により、景色は一変してしまった。昭和48年(1973)、かつての畑の梅林を復活させようと、水月公園に梅林が設けられ、今では再び梅の名所として市民に親しまれている。

平成18～19年度(2006～07)には、能勢街道や西国街道など、地域の主要旧街道の各所に案内板を設置。同じ頃、本町通りの整備に伴い、かつての近世在郷町池田の中心で「井戸の辻」と称された場所から井戸の遺構を検出した際には、その井戸の蓋石を100mほど西の本町通りポケットパークにモニュメントとして保存した。この旧在郷町のエリアの一部等では、まちなみ保存整備事業として、建造物の外観整備などへの支援も継続して行っている。



写真 2-40 井戸の辻の井戸の蓋石

また、先にみた市民活動による池田茶臼山古墳や池田城跡の保存運動など、輝かしい成果に結びついた事例も多い。これらはその後、公園として整備され、池田の歴史を目にみるかたちで今に伝えるとともに憩いの場ともなっている。

このように、指定・未指定に関わらず、さまざまな分野の歴史文化遺産について、長年にわたり継続して整備・保全活動が行われている。

(4) 歴史文化の活用に係る取り組み

ア. 地域資源の活用

池田市の地域資源を活用する取り組みの一つとして、映画・テレビドラマなどのロケ地に関する様々な情報の提供、撮影を支援する窓口として「いけだフィルム・コミッション」を設置していた。現在も個別の問い合わせへの対応を継続している。ロケ地として、市内の神社仏閣、まち並み、店舗・家屋などを紹介し、これまでに、映画「黄金を抱いて翔べ」(平成24年<2012>)、木曜劇場「東野圭吾ミステリーズ エンドレス・ナイト」(平成24年<2012>)などが撮影された。フィルム・コミッションの設置以前にも、NHK朝の連続テレビ小説「てるてる家族」(平成15年<2003>)、「ゲゲゲの鬼太郎(実写映画)」(平成19年<2007>)などが市内で撮影され、地域資源が活用されている。

イ. ガイドツアーの開催

池田市観光協会では、年間十数コースの「いけだ観光回遊ツアー」事業を実施しているが、そのなかで、市内の古墳や社寺のほか、酒造のあるまち並み、細河植木産地や五月山など、市内の歴史文化資源などを体感できる取り組みを進めている。

ウ. コミュニティによる地域資源の活用

池田市は平成19年(2007)から小学校区単位で、11の地域コミュニティ推進協議会が組織化されているが、地域資源の活用も推進協議会の活動の一つとなっている。

石橋地域コミュニティ推進協議会では、校区の子どもに地域の歴史について知ってもらうために「地域を知ろう『石橋の昔と今』冊子作成事業」に取り組んだほか、^{ふたごづか}二子塚古墳では擬木で階段を設け、石室の入り口まで上られるようにするなどの整備を進めている。

^{はちづか}鉢塚・^{みどりがおか}緑丘地区コミュニティ推進協議会では、「ふるさと再発見講座開催事業」を実施しており、

地域資源である「鉢塚古墳」、「能勢街道」、「星の宮」、「池田城跡」、「細河の植木畑」、「伊丹空港の整備工場」などの見学を実施している。

ほそごう地域（細河地区）コミュニティ推進協議会では、寺社巡りや植木の産直販売などの細河フェアの実施、散策コースの設定、里道を利用した五月山のハイキングコースの整備などとともに、同推進協議会の活動拠点である「みどりの郷案内所」で地域の散策に対する説明対応なども進めている。

このように、身近な歴史文化遺産を地域資源として位置づけ、その活用に向けて、各コミュニティが積極的な活動を進めている。

2-4. 池田市における歴史文化を活かしたまちづくりの課題

池田市では、これまでも歴史文化を活かしたまちづくりに向けた様々な取り組みを展開してきた。

しかし、依然として、価値や魅力を見出されていない歴史文化遺産や失われてしまった歴史文化遺産も多くみられるとともに、歴史文化遺産を地域の活性化に十分に活かしてきれていないことが課題となっている。さらに、歴史文化遺産の管理や継承についても担い手不足や予算面などの課題もみられる。このため、池田市の歴史文化を活かしたまちづくりに係る現状の課題を「保存に係る課題」、「活用に係る課題」の2つの視点から課題の抽出と、解決に向けた必要な視点を整理する。

○ 歴史文化遺産の保存に係る課題

(課題の解決に向けた必要な視点)

・ 指定文化財の価値を把握するための学術調査が十分ではない遺産がみられる。

歴史文化遺産の継続的な学術調査の実施

・ 地域で守り育てられてきた未指定の歴史文化遺産が時間の経過とともに、失われてしまったり、忘れられてしまう恐れがある。

市民等からの情報提供による新たな歴史文化遺産の価値付けの推進

未指定の新たな歴史文化遺産の発掘（調査）の推進

・ 大規模災害発災時にも歴史文化遺産を着実に保存・修復できる仕組みづくりが必要である。

指定・未指定を含めた歴史文化遺産のデータベース化の推進

防災・防犯に対する市民・行政間の情報共有体制の構築

・ 歴史文化遺産の単体保存は進められてきたが、周辺環境との関係を踏まえた価値の保存が十分ではない。

歴史文化遺産とその周辺環境との一体的保全・形成のための景観づくり等の推進

・ 池田市の歴史文化の価値や魅力が市民に共有されておらず、歴史文化遺産の保存・活用に対する市民の意識が薄れつつある。

学校教育や生涯学習等との連携による歴史文化に関する価値や魅力の共有化の推進

次世代の歴史文化の担い手づくりに向けた取り組みの充実

・ 地域の歴史を検証するためには、古文書などの文献資料の保存が重要になる。現在、個人や機関が保管している古文書なども多数あるが、さらに未調査のものも含め、確認調査とデータベース化が必要である。

古文書などの確認調査とデータベース化

○ 歴史文化遺産の活用に係る課題

(課題の解決に向けた必要な視点)

- ・活用の取り組みが特定の歴史文化遺産に限定され、歴史文化遺産が地域づくりに効果的に活かされていない。
- ・市内回遊ツアーが開催されているものの、市を特徴づける歴史文化遺産がポイントとなることが少ない。
- ・池田の歴史文化遺産が、市民の学習や意識啓発を促し、さらには口コミで観光客を呼び込むツールとして十分機能していない。
- ・身近な歴史文化遺産である里道や散策路の管理、古墳周辺の環境整備などにコミュニティ単位で取り組んでいるが、それらの活動を継続するための基盤整備や行政的サポートが地域から求められている。
- ・市民が歴史文化について語り合う場や機会が少なく、池田の歴史文化遺産に対する認識が薄れてしまうことが危惧される。
- ・市域を超えた広域的な視点を含めた歴史文化遺産相互の連携が十分に図られてこなかった。
- ・池田市の歴史文化遺産情報の海外への発信力が弱い。

主体間・地域間の連携による歴史文化遺産に関わる物語の構築等による活用の推進

「市を特徴づける歴史文化遺産」の継続的な周知・認識・発信のための取り組みの推進

市民自らが歴史文化遺産に関する魅力的な情報の発信の担い手となる取り組みの推進

身近な歴史文化遺産の保存・管理・活用に向けた基盤整備の検討

地域における歴史文化遺産の活用に向けた行政的サポートの充実

池田の歴史文化を語り、学ぶ機会と場の提供

周辺市町との連携による歴史文化資産の活用ならびに周辺市町とのネットワークルート構築の推進

姉妹都市・友好都市を中心とした海外とのネットワークならびに池田市の歴史文化の国際的な発信力の強化